

研 究 紀 要

第 4 5 集

- 2003年度1年年「総合学習・奈良」実践報告 秋山啓子・金沢節子
鮫島京一・長谷圭城 1
矢野幸洋
- 2002年度1年2期・2003年度2年「総合学習・奈良」実践報告 大内淳也・河合士郎
櫻井 昭・武田 章 13
平田 健治
- 総合的な学習〈環境学〉を実施して（2002年度） 勝山元照・野上朋子 39
松田正昭・吉川裕之
- 「世界学」 落葉典雄・鮫島京一
南美佐江・横弥直浩 63
吉田 隆
- Global Classroom 2003 in Shetland 報告 南美佐江・平田健治 75
- 漢文の句法V. 2 谷本文男

2004

奈 良 女 子 大 学
附 属 中 等 教 育 学 校

2003年度1年「総合学習・奈良」実践報告

秋山啓子・金沢節子・鮫島京一
長谷圭城・矢野幸洋

I はじめに

本年度の「総合学習・奈良」は、1期9月2日（火）～9月5日（金）、2期12月8日（月）～12月12日（金）の各短期集中期間（午前中授業）を使い行った。なお、2003年度入学生（現1年）では、次のような内容を念頭に入れ、今年度はI期とII期の内容を実践した。

- 1年I期 本校が位置する周辺の奈良について知ろう
- II期 奈良について朗読劇をつくろう
- 2年III期 本校から遠く離れて奈良を眺め、再発見しよう（ここも奈良）
- IV期 奈良を表現しよう（まとめ）

実施形態は、クラスのまとまりを重視することを考慮に入れ、クラス単位で実施した。これにより、HR活動と一体化させた展開ができ、生徒の興味関心や理解の程度をみながら進めることができたのでよかった。また、できるだけ授業時間内で収まるように活動内容を吟味した。

II 1期「周辺の奈良を知り、表現しよう」実践の概要

(1) テーマとねらい

1期では、総合学習の目標である「見る・観る」の力をつけることを念頭においた。奈良は多くの文化財と貴重な自然環境を持つ観光地である。1期では、これら奈良の現状を知ることからはじめたいと考え、テーマ「周辺の奈良を知り、表現しよう」とした。中等教育における総合学習の導入であることを意識し、以下の点に注意し課題を設定した。

- ・集団行動における野外活動でのマナーの修得
- ・フィールドワーク（以下FW）でのマナーの修得
- ・奈良への親しみの育成
- ・コミュニケーション能力・表現力の育成
- ・自己評価の能力の育成

(2) 日程と内容

9月1日から5日までの日程と内容は以下の通りである

- 9月1日（月）総合学習・奈良の班決め（5名8班）
- 9月2日（火）奈良について
 - 8：45～ 全体会 日程説明（多目的ホール）
 - 9：00～ 「映像の世紀 奈良」 30min
 - 10：00～ 奈良について考える（HR）

奈良のイメージを広げる時間（イメージの花火）

○9月3日（水）奈良町ウォークラリー

8：45～ 日程説明（HR）、フィールドワーク、インタビューマナーの説明、地図配付・ルートの決定

9：30～ ウォークラリー出発（教師は6つのチェックポイントに立ち、そこでサインをする。）

12：00～ 興福寺五重塔前集合

○9月4日（木）県庁の屋上・国立博物館・東大寺大仏殿・自然観察（奈良公園）

8：50～ 現地集合

A組 春日大社表参道（市内循環バス停）→自然観察（奈良公園）→東大寺→国立博物館

B組 県庁噴水前→国立博物館→自然観察→東大寺大仏殿

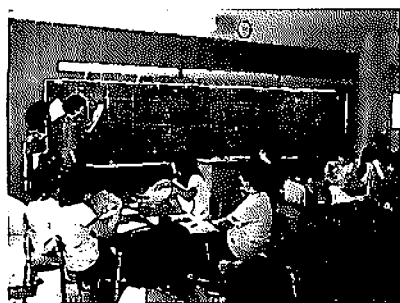
C組 南大門前（東大寺）→国立博物館→自然観察

○9月5日（金）まとめ

色鉛筆・絵の具・はさみ・糊などの工作道具を各自もってきて、班ごとに1枚の模造紙にまとめる。

(3) まとめ

初日は、奈良についてのイメージづくりからはじめた。全体会での日程説明後、奈良についてのビデオ鑑賞をおこなった。その後、各HRに別れ班ごとにイメージマップを使いイメージを広げ、発表した。2日目は、班別に活動し、学校そばの景観保存地区である奈良町のポイントを、クイズ形式でまわる奈良町ウォークラリーをおこなった。その際には、FWのマナー（インタビュー時）などを時間をさいて学習した。3日目には、本校周辺の文化施設や自然を徒歩で巡る計画を立てた。奈良県庁の屋上からは、奈良盆地全体の景観を見ることができ、東大寺では、実際に僧侶の方から話を聴き、普段は登ることの出来ない大仏の台座に上がらせて頂いた。また、ルリセンチコガネなどの珍しい昆虫が豊富な奈良公園内で自然観察をおこなった。短い時間ながらも、川の中の昆虫を夢中で捕まえていた。最終日の発表では、各班で話し合ったイメージを模造紙にまとめた。東大寺の大仏についてまとめたところや、奈良公園に生息する昆虫についてまとめたところなど、各々が努力し紙面一杯にまとめた。



2003年1期「総合学習奈良」

○ 日程

9月2日(火) 奈良について

8:45～ 全体会 日程説明(多目的ホール)

9:00～ 「映像の世紀 奈良」30min

10:00～ 奈良について考える(HR)

奈良のイメージを広げる時間

3日(水) 奈良町ウォークラリー

8:45～ 日程説明(HR) フィールドワーク インタビューマナーの説明
地図配付・ルートの決定

9:30～ ウォークラリー出発

12:00～ 興福寺五重塔前集合

チェックポイントの教員配置	
1	大乘院前(矢野)～10:30
2	格子の家前(長谷)
3	奈良町資料館前(鮫島)
4	元興寺極楽坊前(秋山)
5	書道美術館/奈良市史料保存館(金沢)
6	興福寺五重塔前(矢野) 11:30～

4日(木) 県庁屋上・国立博物館・東大寺・植物観察

8:50～ 現地集合

A組 春日大社表参道(市内循環バス停)

B組 県庁噴水前

C組 南大門前

	A組(金沢)	B組(長谷)	C組(秋山)
9:00	自然観察	県庁・国立博物館	東大寺大仏殿
10:15	東大寺大仏殿	自然観察	県庁・国立博物館
11:30	県庁・国立博物館	東大寺大仏殿	自然観察

教員配置 A組金沢 B組長谷 C組秋山 自然観察 矢野 国立博物館 鮫島

5日(金) まとめ

色鉛筆 絵の具 はさみ のりなどの工作道具を各自もってくること。

注意事項

◇ 3、4日の活動は屋外なので、帽子、水筒など暑さ対策を忘れないこと。

◇ 雨天決行の予定なので、雨対策も考えること。

奈良町ウォークラリー

○この行事の目的

- ・奈良町は文化財が豊富なところである。ゆっくりと実際に歩いてみよう。
- ・班別に歩いていろいろ発見しよう。
- ・町を歩いてクイズに答えよう。

○班別でやること

- ・どのようなルートでいくか作戦をたてる。→9時30分ごろ出発
- ・班員全員で地図中の1～6(順番でなくてよい)のチェックポイントの先生のところに行く。
- ・配付された地図に自分が歩いたルートを赤鉛筆(赤ペン)で書き入れる。
- ・全員がそろっていることを確認してもらい、ボードにスタンプを押してもらう。
- ・みんなでクイズの答えを考えて、ボードに書き入れる。
- ・クイズ以外にわかったことを書き込もう。

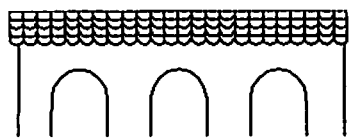
《注意》

- ・必ず班で行動する。はやさを競うのではない。
- ・奈良町をじっくり見てくること。
- ・交通ルールやマナーをしっかり守ること。
- ・12時までに興福寺五重塔前に集合すること。
- ・授業の一環なので携帯電話を使用しないこと。
- ・なにかあったら近くのチェックポイントの先生か、学校(0742-26-2571)に連絡すること。

《チェックポイント》

- 1 大乘院庭園文化館、2 格子の家前、3 奈良町資料館前、4 元興寺極楽坊前
- 5 奈良市杉岡華郵書道美術館/奈良市史料保存館、6 興福寺五重塔前

《クイズ》



- Q. 1 図の塀はなんでしょう？
- Q. 2 この一帯は、「アイドリングストップ地域」に指定されています。それはなぜですか？
- Q. 3 格子の家には何個のかまどがあるでしょう？
- Q. 4 肘塚と書く地名の読み方はなに？
- Q. 5 庚申堂でひとりさぼっている猿がいます。どんな顔をしているのでしょうか？
- Q. 6 奈良町の民家の軒先につるしてある猿の人形「身代わり猿」にはどのような意味があるのでしょうか。
- Q. 7 御霊神社の北約50mの北西角の専門店であつまっている商品は、古くから日本の夏の必需品でしたが、現在はあまり使われません。その商品名と使用方法を答えなさい。
- Q. 8 昔の奈良町は木の柵で囲まれていました。なぜでしょう？
- Q. 9 猿沢池のほとりにある「うねめ神社」を漢字で書いて下さい。
- Q. 10 猿沢池から興福寺五重塔への階段は何段ありますか。

Ⅲ 2期「朗読劇・音にまつわる奈良物語」実践の概要

(1) テーマとねらい

校外での活動が中心であった1期に対し、2期では校内での活動を主とした。この短期集中に行われる総合学習の時間は、普段のHRの時間ではできない、集団の創作活動に適している。2期では、「聞く・聴く」の力をつけることを念頭に1期で学んだ奈良のイメージを生かしながら表現力の育成を考え、テーマ「朗読劇・音にまつわる奈良物語」を設定した。各班で話し合っ共同制作することで、お互いの話を聞き、また人に聞かせることができる作品づくりを目指した。以下の点に注意し課題を設定した。

- ・班で共同し、制作する力の育成
- ・集団の中で、自由に意見を交換する力の育成
- ・発表能力の育成
- ・発表をよく聴ける力の育成

(2) 日程と内容

以下の説明で、班別に朗読劇の制作をさせた。

- 奈良の音をテーマに、自由に物語をつくり朗読劇で発表しなさい。
- 物語は、5分程度。次の5つの音を劇中にすべて登場させて下さい。
この5つの音については、CDで用意します。音は部分だけ使ってもよい。
奈良の蝉 鹿寄せホルン 奈良の蛙 鹿の鳴き声 興福寺の鐘
- 上記の音以外の効果音を1つ以上つくり、劇中に登場させて下さい。
その音はすべて自分達でつくり、生の音で表現して下さい。

12月8日（月）テーマ説明（多目的ホール）

全体会での日程説明

国語科の朗読教材を聞く「ブランコ乗りのキキ」

5つの音を聞く

ひとり1音を使い、個人で物語をつくる 400字（各教室）

（音については、担任があらかじめ各生徒に割り当てた）

12月9日（火）物語をつくる（HR）

班で物語をつくる

各自が昨日つくった400字の物語を班で回し読み、新たな物語をつくる。（約1600字）

音探し、音づくり

物語のイメージにあった、音を探しにいかせる。

12月10日（水）物語をつくる（HR）

練習、リハーサル

実際にCDラジカセとマイクを使い練習する。

12月11日（木）クラス発表・合評会（HR・美術室）

各クラス3班の代表を選ぶ

クラスで発表をおこない（8班）、学年発表に進む3班を投票によって選んだ。

12月12日（金）全体発表 自己評価

全体発表 9班（多目的ホール）

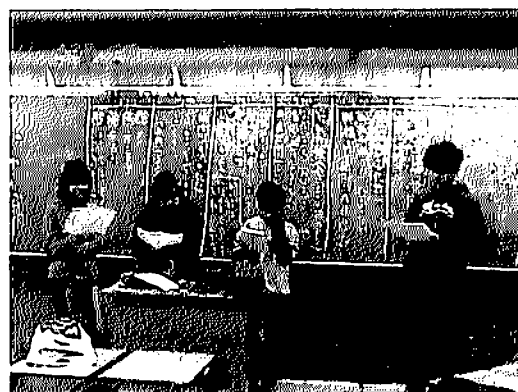
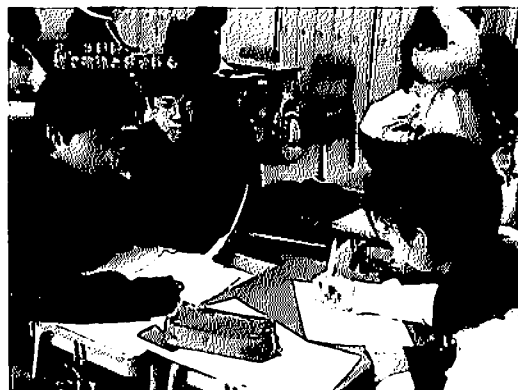
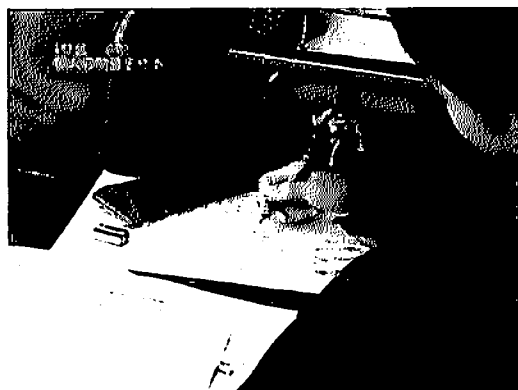
専用の評価シートをつくり、生徒の評価を点数化させ順位をつけた。(別紙)

自己評価 (各教室)

自己評価を各自がまとめることで、今回の総合学習奈良を振り返らせた。

(3) まとめ

まず、個人で奈良の音に対するイメージを広げさせ、400字の物語をかかせた。それらを5人一組の班に持ち寄り読み合わせ、新たな物語を制作させた。5つの音は、できるだけ奈良のイメージを持ったものを選び、各班がそのイメージをどれだけ利用できるかを競わせた。発表では、CDによって各自タイミングをあわせ、うまく効果音として利用した。朗読劇の内容については、昔話風のものや恋愛話など、それぞれの班が独自の話をつくることができた。各自で制作した効果音には、洗面器の中に容器を浮かべ、叩いて木魚の音を出すなど、さまざまな工夫がなされた。各クラス内の発表で、代表を3班選び計9班が全体会で発表した。みんなよい雰囲気で見ることができ、最後には投票して順位をきめた。



2003年「2期総合学習奈良」

朗読劇での発表
—音にまつわる奈良物語—

奈良の音をテーマに、自由に物語をつくり朗読劇で発表しなさい。

- 物語は、5分程度。
- 次の5つの音を劇中にすべて登場させて下さい。
この5つの音については、CDで用意します。音は部分だけ使ってもよい。
 - ・ 奈良の蝉 37秒
 - ・ 鹿寄せホルン 15秒
 - ・ 奈良の蛙 56秒
 - ・ 鹿の鳴き声 15秒
 - ・ 興福寺の鐘 8秒
- 上記の音以外の効果音を1つ以上つくり、劇中に登場させて下さい。
その音はすべて自分達でつくり、生の音で表現して下さい。

日程

8日(月) テーマ説明

- 8:45～ 全体会 日程説明(多目的ホール)
- 9:00～ 「空中ブランコ乗りのキキ」 15min
- 9:45～ 5つの音を聞く
- 10:00～ 5つの音から、個人で物語をつくる 400字(HR)

9日(火) 物語をつくる

- 8:45～ 班わけ 5人(24班)(HR)
- 9:30～ 班で物語をつくる(校内)
 - ・ 音探し、音づくり
 - ・ いくつかの音をイメージさせる。簡単な音づくりの説明

10日(水) 物語をつくり、練習(A組大教室 B組美術室 C組ライブラリー)

11日(木) クラス発表(A組HR B組美術室 C組HR)

- 8:45～ 練習
- 9:30～ クラス発表・合評会
- 12:00～ 代表決定(各クラス3班) 代表決定者は、午後多目的ホールでリハーサル
国語科CDラジカセ マイク3本

12日(金) 全体発表 自己評価

- 8:45～ 全体発表 9班(多目的ホール)
- 10:30～ 自己評価(HR)

評価シート

音にまつわる奈良物語 2003年「Ⅱ期総合学習奈良」 組 班

クラス発表用 合評シート

評価の欄には、A～Dまでの4段階を記入する。

班名	評価	感想

ただし次のことを守る。

Aは、2つの班にしかなつけられません。同様にBは3つ、Cは1つ、Dは1つとします。
この評価をもとに、代表の班を決定します。

音にまつわる奈良物語 2003年「Ⅱ期総合学習奈良」 組 班

クラス発表 班別 評価シート

班名	評価	感想

- Aを10点
- Bを8点
- Cを6点
- Dを4点

1年()組()番()

I期奈良学・自己評価シート

1. 下の表の各観点について自己評価しなさい。評価はA～D。基準は以下のとおり。

A:たいへんよくできた B:よくできた C:できた D:もう少し努力が必要だった

観点	A～Dで記入
み(見・観)たり、き(聞・聴)いたりすることが、しっかりできていた。	A
み(見・観)たり、き(聞・聴)いたりしたことを、よく考えた。	A
み(見・観)たり、き(聞・聴)いたりしたことを、よくまとめることができた。	A
み(見・観)たり、き(聞・聴)いたりしたことを、よく伝えることができた。	B
話し合いや作業をする時に、仲間とうまく協力できた	B

2. この奈良学の活動の中で、学んだことや考えたことをまとめなさい。

1日目、ウオ・クラリーで元興寺。2日目、見学で東大寺。2つの寺をまわりました。気がついたこと(共通点)は、天上が~~綺麗~~になっていました。なせだろうと思いたぶん、屋根(天上を支えている?)のがなと思いましたが、

東大寺の見学で上司さんのお話を聞きました。聖武天皇が世界が平和であるようにと造った大仏を、日本の戦いで、2度も焼失したのはや、は、り、いけないと思いました。第一、第二次世界大戦の時、奈良に原爆や空襲が落ちながら、たのは、こ、う、い、っ、た、大、切、な、も、の、が、あ、た、が、ら、う、だ、思、い、ま、し、た。で、も、も、と、と、大、き、く、西、大、塔、が、あ、た、の、に、今、ま、小、さ、く、塔、が、な、い、の、は、残、念、で、す。で、し、大、仏、が、残、た、だ、け、で、も、す、ご、い、と、思、い、ま、し、た。八、角、火、灯、籠、が、1250年、も、た、え、た、の、に、こ、こ、2～3年、の、西、交、性、雨、で、痛、ん、で、い、る、こ、と、は、人、間、が、そ、う、な、世、界、を、つ、く、た、と、上、司、さ、ん、が、お、し、ゃ、い、ま、し、た。葉、を、ぬ、る、だ、け、で、な、お、た、も、の、環、境、問、題、が、す、こ、く、深、刻、に、な、っ、て、い、る、こ、と、を、八、角、火、灯、籠、が、教、え、て、く、れ、て、い、る、人、だ、と、思、い、ま、し、た。私、は、こ、の、2日、間、で、知、ら、な、か、た、奈、良、田、の、世、界、遺、産、を、知、っ、た、よ、う、な、気、が、し、ま、し、た。

東大寺

1年()組()番()

I期奈良学・自己評価シート

1. 下の表の各観点について自己評価しなさい。評価はA～D。基準は以下のとおり。

A:たいへんよくできた B:よくできた C:できた D:もう少し努力が必要だった

観点	A～Dで記入
み(見・観)たり、き(聞・聴)いたりすることが、しっかりできていた。	C
み(見・観)たり、き(聞・聴)いたりしたことを、よく考えた。	D
み(見・観)たり、き(聞・聴)いたりしたことを、よくまとめることができた。	C
み(見・観)たり、き(聞・聴)いたりしたことを、よく伝えることができた。	C
話し合いや作業をする時に、仲間とうまく協力できた	B

2. この奈良学の活動の中で、学んだことや考えたことをまとめなさい。

奈良には、たくさん文化財、寺などがある。それらきれいなまま長く保つていくことで、「アトラクションストップ」という地域ができたんだなあ、と思った。

大仏は1000年以上も前という、とても古いときからできていた。でも、今は1000年前より30%ほど小さくなっている。

大仏が造られた理由は、聖武天皇が大仏で世の中を平和にしようと考えたからだ。鎌倉時代に源平合戦で大仏殿が全焼してしまっ。だが、この頃は木材が豊富にあったため、小さくはならなかった。小さくなったのは3度目に燃えてからだ。大仏や文化財は県の人全員が支えているんだなあ、と思った。私も少しは協力できたらいいなあ、と思った。

また、奈良にはたくさん自然も残っている。ナギという天然記念物の木や、シワモリ。川にはサワガニもいる。サワガニが住んでいるというところは、川の水がきれいなんだなあ、と思った。

また、山焼きなどの伝統行事も今に残っている。

この自然をきれいなまま保護して、ほしいと思う。

長期学習活動自己評価シート

1. 下の表の各観点について自己評価しなさい。評価はA～D。基準は以下のとおり。

A: たいへんよくできた B: よくできた C: できた D: もう少し努力が必要だった

観点	A～D で記入
み(見・観)たり、き(聞・聴)いたりすることが、しっかりできていた。	B
み(見・観)たり、き(聞・聴)いたりしたことを、よく考えた。	A
み(見・観)たり、き(聞・聴)いたりしたことを、よくまとめることができた。	B
み(見・観)たり、き(聞・聴)いたりしたことを、よく伝えることができた。	C
話し合いや作業をする時に、仲間とうまく協力できた	D

2. この奈良学の活動の中で、学んだことや考えたことをまとめなさい。

私はこの活動の中で音は人の感情を動かせるすごいものだと思えた。音は自然の中でも生まれるし、私たちためにも音を生むこともできる。それはとてもすごいことだと思う。

また、音は人の感情を表すこともできる。ゆるやかな音は優しい気持ち。激しければ怒を救すし、テンポの少しはやめな明るい音なら楽しい気持ち。

これを使、たのが今回の劇だと思、てる。音でまわりのふんいきを出す事もできるし、耳を使うだけで気持ちをどんと人がえれる。

今回劇をして、どうすれば水にしずんでいくふんいきを出せるかなど考えて難しかった。

音は人の感情を動かせるけれど動かそうと思、て動かすのは難しい…。だからそれができていた何理かの理はずいと思、た。

長期学習活動自己評価シート

1. 下の表の各観点について自己評価しなさい。評価はA～D。基準は以下のとおり。

A: たいへんよくできた B: よくできた C: できた D: もう少し努力が必要だった

観点	A～D で記入
み(見・観)たり、き(聞・聴)いたりすることが、しっかりできていた。	B
み(見・観)たり、き(聞・聴)いたりしたことを、よく考えた。	C
み(見・観)たり、き(聞・聴)いたりしたことを、よくまとめることができた。	B
み(見・観)たり、き(聞・聴)いたりしたことを、よく伝えることができた。	B
話し合いや作業をする時に、仲間とうまく協力できた	A

2. この奈良学の活動の中で、学んだことや考えたことをまとめなさい。

音だけで物語を作るのは、むしろいいと思、ていたけれど結構、楽しくおもしろく作れたのでよかった。目の不自由な人は、いつも音だけを頼りに、くらしている事を思えば、音も大事にあつた方がいいと思、た。

この奈良学で、また、他の人との仲が深まり、協力できたのでよかった。

物語を作る時は、少し人まかせにしてしまったりできなかった。人に、こんなきかいがあったら、自分から進んでやろうと思、た。

考えたり、練習する時間が少なかったけれど、みんなよくできていたので、発表をしたり、みたり(かたり)するのも楽しかった。

とてもよかったと思、う。いつも、映像と音を一緒にしてみたり、きいたりしていたので、音だけはおもしろいけれど、音だけでは、一人一人考え方もちがって、場面もちがうので、まいてから、どんな場面を想像したかを考えて、伝えあうのも、おもしろいと思、いました。

この奈良学でまた新しいことを考えて、音の使いかたよ、て、同じ物語でもちがう物語になることを学びました。

とても楽しく活動できたからよかったと思、います。

他の音を使って、他の物語も作りたいた。

IV 「総合学習・奈良」の評価

1・2年での「総合学習・奈良」は学び方を学ぶことを柱に構成される。具体的には6つのキーワード「みる・きく・考える・まとめる・伝える・協力する」が目標にある。評価を行うためには、1・2年の総合学習の実践が3・4年の総合学習「環境学」・「世界学」にどう繋がり、5・6年の進路選択等はどう影響を及ぼしたかについて言及すべきであるが、それらについては別の節に譲り、この節では、「本年1年での実践が妥当であったか」と「1年での総合学習の生徒の評価をどうしたのか」について述べたいと思う。

(1) 本年の内容の妥当性とHR活動

1年での活動のキーワードは「発表」として行った。1期の活動は、奈良を調べる第一歩としてはうまくできた。最後に模造紙にまとめる発表形式もグループの協力とまとまりの力を養えたと思う。2期は朗読劇による発表とした。指定された音を使つての朗読劇は1年にはやや難しいかと思われたが、創意工夫も見られ、こちらが予想した以上の物が創り出せた。1期、2期とも作品の仕上がりはよく、教師が想定した以上の活動ができたものと思われる。ただし、1、2年の総合学習は担任と副担任が担当することもあり、HR活動と表裏一体の面が大きい。特に、グループ活動を成功させるためには仲間作りが必要不可欠であり、HR活動と連携した「総合学習・奈良」をより深く考える必要がある。

(2) 総合学習1年の評価

学習活動の評価については、各期ごとに4段階で評価をつけることが決定されている。1年では自己評価を行わせてそれをもとに評価をつけた。他人の評価もさせる相互評価もさせるとより公平で客観的になる。しかし、1年という発達段階も踏まえ、今回は2期で、班で相談して他の班を評価する方法をさせるにとどめた。この方法により自己を客観的に評価するための第一段階は達成できたと思う。その方法を次に示す。

①個人で他の班（7つの班）の作品を評価する。

②個人の評価をもとに、班内で他の班の作品を評価する。その時、Aは2つの班、Bは3つの班、CとDは各1つずつの班と数を決める。

③自分の班の評価は、他の班による評価を集めて、点数に換算をして集計する。その時、Aは10点、Bは8点、Cは6点、Dは4点とする。

④クラス代表を3班選び、学年全体の場で発表し、学年優秀作品を選ぶ。

Aの数を限定したこと、Dを必ずつけるようにしたこと、作品を客観的にみる練習はできたと思う。

生徒個人に対する教師の評価の拠り所としたものは、生徒の自己評価、ファイルされた資料、出来上がった作品などである。生徒の自己評価は、到達目標を高く設定した生徒は厳しい評価をつけており、その評価を尊重しつつ他の生徒との公平性が保てるようにした。また、作品の仕上がり具合だけを見るのではなく、その制作過程を重視するようにした。

1年目の総合学習は学び方を学ぶ時期であり、ほとんどの生徒は目標に到達できていた。3期、4期では、さらに完成度の高い作品を生徒が追求するような動機づけを考えたいし、自己評価能力を高める方法も考えたい。

2002年度1年2期・2003年度2年「総合学習・奈良」実践報告

大内 淳也・河合 士郎・櫻井 昭
武田 章・平田 健治

I はじめに

本学年は、「総合学習・奈良」の実践を4期分行った、最初の学年である。当該学年の「総合学習・奈良」の構造に対する基本的な認識は、本校「研究紀要第44集（1年1期報告）」に詳述しており、ここでは繰り返さない。

この学年での実践の大きな特徴として、2期から4期にかけては、「短期集中方式」の特色を生かしながらも、各期を単発的な「一週間行事」に終わらせるのではなく、長期的に継続性・有機性を強く持たせ、1年間かけた取り組みとする、という方針がある。この方向性は学年裁量で決定したものであり、「各期完結」のプロジェクト（ユニット方式）を考えるのとでは、大きなスタンスの違いが存在する。いずれも一長一短があろうし、「総合学習・奈良」はまだ始まったばかりであるから、今後各学年における実践の積み重ねの中で、理想的な展開方法が徐々に見えてくるであろう。

授業担当者は、2期と3期の間で一名が交代した。ただし、学級担任3名＋副担任2名の「学年団」で担当する形は継承している。また、2期に組んだ少人数の新クラス（24名×5クラス）を基本的な単位とし、この短期3週間に関しては一年間同じメンバーで活動させた。各クラスに担当者5名がそれぞれつく「フラット5」方式も、1期から一貫している。

「ポートフォリオ方式」も2年間継続してきた。1期の初め、生徒一人ひとりに総合学習用として簡易ファイルを配り、その後配布されたプリント類や自分たちでの調査結果、その時間の感想など、授業に関係あるものは全部ファイルさせたが、2期以降も同じファイルを持ってこさせ、ハンドアウトは引き続き追加して挟み込ませることとした。これにより、自己評価や相互評価が可能となり、教師が質問内容や評価の観点を書いたシートを用意し、生徒がそれに書き込むことによって、各自その期に学習・体験した内容の整理・再確認と振り返りができるようになった。

「総合的な学習」においては、「内容知」よりも「方法知」が重視され、あくまで「対応の方法を学ぶ」ことが主眼である。その中で、2期から4期にかけての学習形態としては、お互いの知恵を出し合い、支え、高めあう「グループ学習」の側面を重視したつもりである。

本稿では、昨年度に引き続き、本学年の2期から4期の連続した取り組みに関して実施報告をしたうえで、この2年間の成果と課題について総括したい。

II 1年2期実践の概要

1期の計画を練った段階では、2期以降とのつながりに関して十分話し合えなかった。1期の評価を終えた時点で、さしあたって次期12月の企画について担当者でブレイン・ストーミングするなか、2点が基本的な問題となった。1つは1期と2期の関係、もう1つは2期とそれ以降との関係である。そして協議の結果、1期の内容は「総合学習入門」と位置づけて独立して扱い、その作品や調査内容をことさら2期の出発点とはしないこと、しかし、2期から4期までは連続したプロジェクトにする

こと、が決定された。

・ 2期……グループ分け

統一テーマ「奈良」に関して何を調べ、何を見、どこでどのように調べたいか
フリートーク、ディスカッションのなかで考えていく

・ 3期……グループ別活動

調査と見学、フィールドワーク、まとめと考察

・ 4期……発表会

オーラル・プレゼンテーション、ITなどメディアの利用
ポスターセッション

したがって、2期に完結はしないため、1期のようなフォーマルな発表の場は設けない。大まかに、この期の目的と留意事項については、次のようになった。

- ・ 調べたいことを自分たちで決めさせる
- ・ 班ごとに自主的に、来年度の活動計画を立てさせる
- ・ 議論のゆとりを確保し、じっくりと進める
- ・ 評価・評価の観点について、1期よりも意識をもたせる
- ・ 目標をきちんと定め、到達のようすを確認して進む

1 2期オリエンテーション

生徒には、2期のプログラムの表紙に次のことを示した。

今期の目標

表現とコミュニケーション

- ・ まず、いろんな考えやアイデアを自分で考えてみましょう
- ・ それを自分の言葉で表現してみましょう
- ・ 友だちの意見や発表をよく聴き、それに対するあなたの考えを伝えて、コミュニケーションを図りましょう
- ・ 円滑なコミュニケーションを図るには、それぞれの人の協力が必要です

「総合学習 奈良」2期以降の流れ

2期：[計画]：調査計画立案	班内でのコミュニケーション
3期：[体験]：実地調査実施	学校外でのコミュニケーション
4期：[表現]：プレゼンテーション(発表)	公の場でのコミュニケーション

2 12月の期間日程

1期の振り返り(評価)については、ファイルを一旦返却したときのLHRにおいて、説明し考えさせた。しかしこの週の初めにあたり、もう一度1期のプレゼンテーション活動を思い出させる時間をとることによって、「総合的な学習」の世界に引き込む。

その後、学年全体に2期～4期の活動アウトラインを示し、そのために必要なイメージづくり(マッピング)とグループ分けをして、1日目は導入とした。

2日目以降は、基本的に5クラス展開である。ただし、気分転換と見学を兼ねて校外学習「平城宮跡フィールドワーク」を3日目に取り入れた。2日目の最後にそのためのオリエンテーションをしている。また、その時間に先立ち、本校社会科教員に依頼して「世界遺産についての講義とクイ

ズ」を有志参加の形で開催した。

- 12/9 (月) 1期振り返り(各学級) 意見交換・プレゼンテーション論
2期オリエンテーションとグループ分け(学年集会・大教室)
今期・来年のプロジェクトを説明…統一テーマは「奈良」
マッピングの例を教師が実演して示し、その後「奈良」について各自マッピング
1期と同様、学年120名全員をランダムに24名ずつ(男女半々)に分けて、5クラス
に編成しなおした。今回の作業は、生徒自身による当日の公平なくじ引きをもとに
している。
- 12/10 (火) 班活動(新クラス…各24名×5)、担当教師は前日に相談して配当
顔合わせ・役割決め・テーマの考察と決定
個人の調査希望を出し合い、見通しのあるテーマを話し合わせる
平城宮跡探索オリエンテーション(学年集会)
「平城遷都1300年記念」VTR視聴(15分)
- 12/11 (水) 班活動アイス・ブレイキング(導入の意味、3期とは区別)
平城宮跡見学・探索
(9:00 現地(資料館)集合、二手に分かれて逆回りのルートで見学、解説者あり)
- 12/12 (木) 班活動(5教室) テーマ事前学習・活動計画
3期にグループで行きたいところ(FW)を考える
調査の方法と分担・テーマの小区分などを考える
- 12/13 (金) 班活動(5教室)
小班ごと情報交換・企画書(翌年の活動計画)提出・感想文・自己評価

3 配布シート類

1期と同様の書き込み用シート(A4版)を配布した。なお、以下のシートは1期と異なりかなりラフな構成になっており、単なるメモ用紙とあまりかわらない。形式にこだわらない、学びの「創造的な」側面を強める方向性の表れである。10日～12日に関しては、「本日のふりかえり」の欄を設け、文章で簡単に自己評価をさせた。

シート① 「グループの結成—興味を持って、自主的にテーマを考えよう—」

班員名簿や役割分担、テーマの希望などをメモする用紙。

シート② 「調査方法と分担—協力しあって、研究のしかたを考えよう—」

調査の方法と小グループ分け、より細かい役割を書いていく用紙。

シート③ 「平城宮跡探索—奈良の一つの姿をモデルに、研究のしかたを考えよう—」

見学メモ用紙。

シート④ 「事前学習—協力しあって、研究のしかたを考えよう—」

メモ用紙。

シート⑤ 感想シート「総合学習・奈良」2期まとめ

「この一週間の活動について、振り返りましょう(1.～5.は、あなた個人に対する評価です)。」

として、次の各項目について5段階で自己評価させた。()内は、示した具体的な観点である。

1. しっかりとみたりきいたりできたか
(友だちの発言を注意してよく聞いた・意見を述べる時、聞いている人のようすをよく注意した・結論を急がず、議論の中身を大切にした・興味をもって見学できた)
2. 自分でよく考えたか
(ユニークな発想をしようとした・議題について積極的に考えた・さまざまな調査方法を、多面的に考えようとした・調査の構成を論理的に考えようとした)
3. 自ら積極的に調べたか
(いろいろな資料を参考にしようとした・見学では調査の方法を学べた・情報を積極的に交換した・計画をじゅうぶん把握できた)
4. 表現・伝達することができたか
(アイデアを進んで述べた・意見をはっきりと簡潔に発表した・友だちにわかってもらえるように、ていねいに説明した・質問に適切に答えた)
5. 仲間と協働できたか
(協力して話し合いを進めようとした・活発に質問や意見を出した・議論をうまくまとめていけた・友だちにアドバイスをした)
6. 班としてのふりかえり
(考察が深められた・適切に分担ができた・見通しの確かな計画をたてられた・男女の協力ができた)

さらに、「自己評価の内容について、項目をとりあげ、もう少し詳しく、そう評価した理由を書いてください。」「ほかにも自分独自の観点で、気のついたことを書きましよう」の2項目について自由に書かせた。

シート⑥ 感想シート

2期の活動について、「・あなたが最も活躍できた・仕事をたくさんできた・楽しかったのはどの場面でしょう」「・心に残ること・よかったことと反省点・来期に向けての改善点と提案」の2項目について自由に書かせた。

平城宮跡フィールドワークに際しては、従来行われていた「1年秋の行事」で使っていた、活動のレジュメ・ウォークラリー問題・解答用紙などを参考に、ハンドアウトを作って持たせた。1期の「奈良公園自然観察」と同様、「秋の行事」の内容を継承した形である。

また、どのクラスでも各班で最終的に「調査活動計画書」をまとめさせた。各クラス(24名)が、大テーマのもと、さらに少人数のグループに分かれ、それぞれ異なった活動をするのであるが、現段階でその内容を具体的に表現させ、複写して全員に配ったり、各代表者に説明させたりすることで、クラス全体の来期以降の活動のようすについて、情報を共有しあった。

4 参考資料

資料1：3組（担当大内）12/10のまとめ

「総合学習・奈良」 3組

活動テーマを考える

〈10日の話し合いで出た意見〉

若草山からのスケッチ

- * 若草山山頂に上り、そこから見える風景をスケッチする
- ☆：同じ景色でも人によって何を描くかは様々… そこが面白そうですねえ

奈良とどこかの比較：自然や気候など…

- * どこかの町・村・都市を訪れて、その自然や気候を調べ、奈良との比較を行う
- ☆：どこと何の比較をするかが重要。 それによっていろいろな意味が生まれそう。 実際に現地へ行ってできることを考えるのがポイントか…

奈良の和菓子をつくろう

- * 和菓子作りを体験して 食べる
- ☆：奈良にはいい和菓子屋さんがあるからなあ… でも、教えてもらえる人が必要です。 職場体験とドッキングしてもいいのかも

奈良の環境を調べる

- * 奈良の環境について調べてみる 例えば酸性雨の状態など
- ☆：奈良の環境について関心を持つのは大切なことです

奈良と韓国

- * 奈良と韓国の歴史的な背景を調べ、現在の日本と韓国の関係を考える
- ☆：これは調べることはたくさんあると思います。 踏み込むといろいろ面白いことがわかるかもしれません

職場体験

- * いろいろな職場を体験する
- ☆：「職場体験」といって、各自がどんな職場をイメージするかも面白そうですねえ。 どんなところが体験可能か調べて、実際に体験してみるのはいいかも…

鹿せんべい作り

- * 奈良公園といえば「鹿せんべい」。 それを作ってみる
- ☆：鹿せんべいって、どうやって作るのでしょうか… おいしい鹿せんべいを作りたいなあ

平城京と平安京

- * 平城京と平安京の違いを幾つかの視点から調べる
- ☆：平城京と平安京。 それぞれの周りのお寺とか、調べることはたくさんありますね。 実際に現地へ行っていろいろ調べることも必要ですね。

（*：ちょっとした説明 ☆：大内コメント）

5 実践の評価

今回の計画では、1期のように、こちらから周到に準備されたタイムテーブルに生徒を乗せて進める授業からの、大きな方向転換が図られている。それは、生徒裁量の自由度をできるだけ拡大したこと、予定調和的なプログラムを排除したことである。まず、「奈良」に関するトピックのカテゴリズ（歴史・伝統・芸能・自然・地域・行政・先端技術など）をこちらから提示すること、事前に個人の興味・関心について希望調査をとりグループ分けに反映させること、担当教師がそれぞれ指導しやすいテーマのグループにつくこと、などは、審議の結果いずれも退けられた。このことは、生徒と教師が横一線の位置で何もなかったところからスタートし、行き先の分からない航海に旅立つような状態に例えられる。彼らを曳航するのではないが、同じ船に乗り込まなくてはならず、しかも教師は船長ではない、というわけである。

動きやすい小班の編成・時間的条件・金銭的条件・必要なものの事前準備・調査の適正人数配置などのさまざまな観点を考慮した計画の立案には、生徒のマネジメント能力が高度に求められる。このことはとりもなおさず、あらゆるグループの原案に対して担当教師が適切に助言できなければならない、ということと表裏であり、独特の負担感は否めない。しかし、2期はまだ計画の緒に付いたばかりであり、翌年度の3期までに準備期間が充分あったことも確かである。2期の各クラスの実態についての情報交換をはじめとする、担当者5名のやりとりの中で、協力していける部分も多かった。

校外学習以外の3日間の午前をすべて班別の話し合いに当て、ある意味非常に大胆に時間のゆとりをとった計画となったが、この時間の流れ方は、ふだんの45分授業が4つ並ぶ生活とは全く異なった、何ともいえない独自の雰囲気醸し出していた。変化をつけるため、2日目には自由参加の「世界遺産についての講義」を設定してみたが、その時間も話し合いに没頭していたクラスもあり、こちらで心配するほど案外生徒は退屈していない。24名の少人数編成だからということもあるのだろうが、個人差はあったにせよ、ほとんどの生徒が入念な議論に積極的に参加していて、彼らの自主性に驚かされた。

平城宮跡の見学は、新クラス内の親睦と、FWの軽い導入の意味を持たせて行ったが、いずれの目的も果たせていたように思う。特に後者に関しては、資料館のボランティアの方々の懇切丁寧なご説明により、ただ自分たちで見て回るだけでは得られないような非常に詳しい知識や、遺構の見方などが解り、大いに助けられた。ただし、1年生には難しすぎる内容もあり、また、当日が非常に風の強い寒冷な天候であったため、長時間の見学で後半はかなり生徒たちの消耗が見られた。適切な校外学習ということについては、季節的な条件も大きい。

この期で完結しないためむしろ議論の内容を重視し、結果を急いでいないので、各クラスないしクラス内の各グループによって、企画の進捗状況は異なっている。できたところまでの彼らの計画を仔細に点検し、次年度の6月に一度LHRの時間をとって確認に当て、9月に備えることになった。

Ⅲ 2年3期実践の概要

2期を終えた段階で、各クラスの大きなテーマは次のように決定された。

- 1組：「奈良の観光と商業について」（担当河合）
- 2組：「春日大社について」（担当武田）
- 3組：「職場体験」（担当大内）

4組：「水について」（担当平田）

5組：「奈良のお土産について」（担当櫻井）

3期から4期へと連続した取り組みの中で、3期は、学外でのコミュニケーションを主眼においた。まず、各クラスが自ら決定したテーマに基づいて、どこに行けば自分たちが必要な資料が収集できるのかを、クラス内の各グループで検討した。次に、それぞれ話し合った結果を、時間・活動場所・活動内容を記入する所定の用紙「活動計画書」にまとめて、担当教師に提出したうえ、実際に校外に出てフィールドワークを行った。

計画書をまとめる段階では、クラス内・グループ内で十分な議論をして、共通理解を持った上で、フィールドワークが行えるように指導した。場所によっては、事前に電話で趣旨を説明してから、訪問の約束を取り付けたこともあった。また、教師が直接交渉して、生徒訪問の許可を取ったりした場合もある。生徒たちには、フィールドワークを成功させるために、実際の訪問先で、自分たちの目的・知りたいことなどを、各自のことばでしっかり相手に伝えることの必要性を強調した。外で行うこのような調べ学習も近年、広く一般に周知されているようであり、生徒たちの活動には、どこへ行っても大変丁寧に対応していただいたと考える。

フィールドワーク後は、学校に戻ってから「活動報告書」をまとめさせた。計画書にしる、報告書にしる、あらかじめ所定の用紙を提示することで、生徒の頭の中も整理される。また、自分たちの話し合ったことや議論の結果をこのような形で言語化することは大変重要である。しっかりとまとめられているグループでは、その後の活動もうまく進んだところが多いようである。

1 9月の期間日程

2期以降、生徒それぞれの活動内容や活動方法は、グループ内での話しあいや結論を最大限尊重する方針が確認されている。また、今期は全ての日程が完全にクラス別授業であって、各担当者が思い思いの展開をした。なお1期と同様、この週は教育実習生が授業に参加する。各クラスに4名程度配当された実習生たちは、クラス内のグループに一人ずつついて観察したところが多い。

9月の期間日程については、各担当者が事前事後に適宜報告をし、情報交換しながら進めたが、フォーマットはそれぞれ異なる。様式を統一することはあえてせず、以下に各クラスの実践概要を、提出されたままに示す。なお、1日目は始業集会のため、簡単なオリエンテーションにとどまっている。

(1) 1組

9/1（月）10：45～2B

今週の活動・概略説明

班に分かれて計画（企画書）の確認

明日からファイルを持参のこと

9/2（火）2B・図書室

9/3～9/5の行動計画立案

訪問先決定 → ○活動計画書の提出・コピー

○それぞれの企画書を発表し、意見を出し合う → 小グループで再検討

質問事項の確定 → ○事前の調べもの…本・インターネット

○インタビュー…用紙（質問事項）記入提出（何を・なぜ）・コピー

○アンケートの準備…用紙作成・印刷

クラス全体のタイムテーブル印刷配布

○活動報告書の作成（9/3, 4 帰校後、当日中に提出）

9/3（水）・9/4（木）フィールドワーク

9/5（金）2Bほか

定時に教室集合 → ○まとめの日の「活動計画・活動報告」を提出する。

○まとめの仕事

○自己評価シート記入

〈観光都市・奈良の実態〉班分け（班長・副班長）

	班名	テーマ	メンバー
1	ギョム=ドラッグ	商業・商店街	大浦・平尾・佐藤・大谷・祝
2	松光堂	観光産業	岡崎・山形・反田・野村 増井・川口・氷置
3	あるある特産物大辞典	特産品・商店街	川嶋・喜多・中嶋・丸岡
4	@.com	奈良の有名人・人口の流入	長谷川・生野・江口・川端 橋戸・宮崎・山本・吉岡

- ・ 何を調べるのか、班ごとに細かく確認する。
- ・ 役割分担を考える。FWも手分けをして全員で。
- ・ 日程を考える→FW計画書(インタビュー・アンケートなど)
- ・ FWの下準備・予備知識の整理。準備物の確認
- ・ まとめは、体で得た情報・聞き出した情報・調べて得た情報を総合する。

フィールドワーク対象地

	小グループ	9/3	9/4
1	大浦・平尾・佐藤 大谷・祝	東向商店街・郡山駅前 餅飯殿商店街・柳町商店街	天理本通り
2-1	川口・反田・山形	東大寺・春日大社	まとめ(学校)
2-2	岡崎・野村・増井・氷置	明日香村	まとめ(学校)
3	川嶋・喜多・中嶋・丸岡	東向商店街周辺	福泉堂・ぜいたく豆・山崎屋
4-1	橋戸・山本・吉岡	西大寺・九条	三条通り
4-2	長谷川・宮崎・江口	近鉄奈良駅周辺	東大寺
4-3	生野・川端	猿沢池・興福寺	国立博物館周辺

フィールドワークの目的は大きく3つに分類される。(数字は小グループ)

- (1) 自分たち自身で見聞すること…1、2-2、3
- (2) 店主にインタビュー…1、2-2、3
- (3) 街頭アンケート…1、2-1、3、4

調査のまとめも、小グループ単位で行われた。2班は北和と中和に分かれた調査で、それぞれアンケート集計と、写真や聞き取りのまとめを行った。4班は3グループに分かれて、6箇所での街頭アンケートで数を集めた。この班は同一のアンケート用紙を用いているので、グループ作業の集計は一つのデータに収斂される。1班と3班は、2日間の時間のゆとりを最大限に活用し、2年生としては多面的なフィールドワークができたと思われる。1班は店主用と街頭用の2種類のアンケート用紙を作って臨んでいるし、3班は2日間の用途を変えている。いずれの班も、メモやデジタルデータの整理・保守と集計を行い、手書きの資料以外はいったんFDやCD-ROMに保存した。

(2) 2組

日	春日大社“解剖”計画
9/1 (月)	<p>■ 活動を始めるにあたって *出欠確認、ファイル確認など</p> <p>1 日程の説明</p> <p>2 春日大社の基礎知識を持とう…「春日大社概説」(武田講義)</p>
2 (火)	<p>■ 班別活動計画などの話し合い</p> <p>1 「夏休みに集めた情報」交換会 → 「夏休み活動の報告」提出 *「誰が」「何について」の「どんな情報」を集めたのか</p> <p>2 春日大社見学の際の質問事項確認 → 「春日大社での質問事項」提出 *何を質問するのか、なぜそれを質問するのか、 下調べは十分済んでいるか</p> <p>3 3日(水)～5日(金)の行動計画立案、訪問先等の決定 → 「活動計画書」提出</p> <p>4 その他必要なことの打ち合わせ</p>
3 (水)	<p>■ 春日大社見学(全員)</p> <p>9:00 春日大社集合 ※集合場所は裏の地図参照 春日大社見学 *ファイル、メモ用紙、筆記用具等を忘れずに持参 ↓帰校して 「活動報告書」の作成(当日中に提出)</p>
4 (木)	<p>■ 班別活動 8:45 理講集合 「(今日の)活動計画書」提出 → 活動開始 → 「(今日の)活動報告書」提出(当日中に提出)</p>
5 (金)	<p>■ 班別活動 8:45 理講集合 「(今日の)活動計画書」提出 → 活動開始 → 「(今日の)活動報告書」提出(当日中に提出) 「12月までの活動計画書」の相談と計画書の提出</p>

チーム	テーマ	キャプテン	メンバー
1	現実の春日大社	C津戸	A吉永・B奥林・A井平・C三宅
	訪問地	観光客にアンケート、神職・巫女さんにインタビュー	
2	信仰と歴史	B古林	C藤原・B野田・B中井・A菱川・B中田
	訪問地	奈良新聞社、市立図書館	
3	鹿の現在	A村上	C大高・A寫岡・A野中・A喜多・B松村
	訪問地	鹿愛護会、東大寺とその周辺	
4	鹿のエサ	A吉武	B立石・C中川
	訪問地	鹿愛護会、奈良公園、売店、住民	
5	春日大社の建築物	B小林	C大藤・C秋田・B荒木
	訪問地	春日大社	

(3) 3組

9月1日：オリエンテーション・日程確認 事前の希望等の状況から3グループに

9月2日：活動計画確認・準備

9月3日：Aグループ《幼稚園訪問の準備》

Bグループ《県庁訪問・調査》

Cグループ《とらや訪問・調査》

9月4日：Aグループ《幼稚園・職場体験》

Bグループ《新薬師寺訪問・調査》

Cグループ《岡崎松光堂訪問・調査》

9月5日：4期へ向けての準備・まとめ・自己評価

準備（実際の活動）

《A附属幼稚園》 実際に園児と接する際の活動準備（教材研究）

《B県庁・新薬師寺》 事前学習・質問事項確認

《Cお菓子屋》 電話にて訪問の許可確認・質問事項確認

現地にて

《A附属幼稚園》 幼稚園教育の概要の説明 担当クラスに配属 実際に考えた活動を展開

《B県庁・新薬師寺》 現地訪問 県庁では広報広聴課の大島氏に質問を 屋上から奈良を展望 新薬師寺では中田定観氏、定慧氏よりお話を 本堂見学

《Cお菓子屋》 「とらや」「岡崎松光堂」をそれぞれ訪問し、調査

*それぞれのグループに実習生が1人ずつ引率した

グループ

A：大辻 西野 山本 岡田 伊東 彦田 原田 大植 森澤

B：城 井上 座主 徳田 浅野 三木原 清水 濱田 福岡 西田 北西

C：土佐 村井 上井 富山



附属幼稚園



県庁

(4) 4組

班長：吉村 優志

副班長：青海 優花

●グループ

	テーマ	メンバー（最初の方が長）					
1	環境問題	丸田C	菅家C	吉岡B	吉岡A		
2	淡水生物	白川B	農澤A	山根B	南B	東野C	
3	名水	青海A	滝村B	岡本C	山出C	吉村B	山本C
4	伝説・物語	近藤A	坂野A	西村A	北村B	中野C	
5	ダム	稲見A	山口A	米原C	百南C		
活動							
1	河川水質調査、酸性雨と自然破壊、奈良北部と南部での酸性雨比較調査						
2	天川村みたらい溪谷で、魚類や水棲動物の観察						
3	「ごろごろ水」採集						
4	水にかかわる伝説の聞き取り調査など						
5	ダムが果たす役割について調べる						

●活動経過

- 8月上旬 洞川下見（平田）
- 9月1日（月） 洞川下見報告（平田）・パワーポイントプレゼンテーション
2期の振り返り
- 9月2日（火） しおりの内容決定・しおり作成のための資料収集を班ごとに行った
しおり原稿提出
- 9月3日（水） しおり印刷・配布
洞川訪問時の活動計画書を班ごとに作成・提出
しおり読み合わせ
- 9月4日（木） 8：00 樞原神宮前駅中央出口ロータリー集合
10：00 洞川到着（→洞川温泉→「ごろごろ水」採取→泉の森の水採取
→みたらい溪谷→洞川エコミュージアムセンター）
エコミュージアムにてビデオ鑑賞
自由行動
14：30 集合
15：00 樞原神宮前駅到着・解散
- 9月5日（金） 自己評価シート記入
プレゼンテーション（グループごとに一枚のフリップ「洞川の…」）作成
各班の報告（プレゼンテーションは2B前に掲示）

●バス代：中型バス 一人2500円徴収（教育基礎実習生も含む）

(5) 5組

『おみやげマスター』プロジェクト (リーダー：鎌田、サブリーダー：小池)

9月1日 [月] (2C)

一週間の活動計画の説明と、2期の振り返り。

小グループに分かれ、3期に行うフィールドワークに向けて確認しあった。

9月2日 [火] (2C・図書室)

各小グループで「目的と調査内容」を話し合い、企画書を全体に発表(黒板に板書)

- ・ 4期で行う『まとめと発表』を意識しながら、各小グループの違いや共通点などを見つける。
- ・ 現地で集める情報が目的にあっているか、必要な情報を全てあげているか確認しあう。

活動計画書の作成

- ・ 実際に調査させてもらう店舗、遊園地、温泉に電話でアポイントメントを取る。
- ・ フィールドワークでの細かな行動計画を考える(交通手段、時間、順序、等)。集合・解散はすべて学校とした。

全体で各グループの動きを確認(タイムテーブル作成)

① お土産屋の立地条件[濱渦、宮前、東、亀田、福場]

目的：よく売れるお土産屋を出せるようにする

調査内容：立地の理由、商品の配列場所、値段、種類、周辺環境、年代別・時間別の売上げ
利用者へのインタビュー

調査場所：近鉄奈良駅～東向商店街～三条通り のお店
東大寺周辺～国立博物館周辺 のお店

② 奈良のお土産の歴史

目的：奈良に昔からあるお土産(柿の葉すしと一刀彫)の歴史を調べる

調査内容：柿の葉すし 歴史、作り方、柿の葉を使う理由、昔と今の違い、食していた人々

一刀彫 歴史、作り方、作品の種類

調査場所：柿の葉すし 平宗

一刀彫 小林さんの家(奈良市小西町12番地)

③ 奈良の温泉土産[永島、山田、高木、室屋、井上]

目的：地元民が利用する温泉のお土産と、観光客が利用する温泉のお土産の違いを調査

調査内容：地元民が利用する温泉 何がお土産としてあるのか、売り上げ、利用者の違い

観光客が利用する温泉 同上

調査場所：地元民が利用する温泉 ゆららの湯、極楽の湯
観光客が利用する温泉 三笠温泉

④ 奈良の遊園地土産

目的：奈良にある遊園地のお土産の特徴と、遊園地の立地理由を調べる

調査内容：遊園地の立地理由、お土産の種類、工夫、値段と売上げ、お土産屋の配置
調査場所：あやめ池遊園地、ドリームランド

9月3日 [水]

各小グループで質問事項とアンケートなどの最終確認

- ① アンケート用紙・質問事項の作成
- ② 柿の葉寿し[乾、南野、今井]… FW「平宗」
一刀彫[川合、竹知、伊中]…… 歴史調べ、質問事項の作成
- ③ 質問事項・活動計画書の作成
- ④ あやめ池遊園地[高垣、鎌田、坂田]… 質問事項の作成、ドリームランド班との質問事項のすり合わせ、遊園地の歴史・立地条件など下調べ
ドリームランド[前川、小池、林、甲斐、杉本]… 質問事項の作成、あやめ池班との質問事項のすり合わせ、遊園地の歴史・立地条件など下調べ

9月4日 [木]

- ① 東向商店街と東大寺周辺のお土産屋さんへFW
- ② 柿の葉寿し…データのまとめ、報告書作成
一刀彫…FW「小林邸」
- ③ ゆららの湯…FW
- ④ FW

9月5日 [金] (2C)

- FWのまとめ(調査資料の整理、活動報告書の作成、FWにおける行動の振り返り)
3期の活動に対する自己評価
- ③ 三笠温泉…FW

2 配布シート類

今期は各クラスの活動内容がさほど統一されていないため、細かな記述を指示するようなシート類は、共通のものを作ることができなかった。しかし、各担当が必要と考えた資料や独自のシートは、それぞれのクラスで配布され、利用された。一方、校外でのフィールドワークを通じて、初対面の他者とのコミュニケーションのなかから、様々なことを学び取り、得たことをまとめ(表現する)、という、今期の目標に関しては5クラスとも共通である。学年全体で使用した書き込み式シートには、次のものがある。

- フィールドワーク質問事項記入用紙
- 活動計画書
- 活動報告書
- 「総合学習・奈良」3期まとめ(感想シート)

まず、各グループで時間をかけてフィールドワークの計画を練らせ、目的や手段をじっくり考えさせた。FWといっても、1-(1)でも述べたとおり、見聞きしてメモする型・インタビュー型・アンケートに答えてもらう型、と、場合に応じて有効な手法が異なる。したがって、上記「質問用紙」がそのまま利用できる班もあれば、独自にインタビュー用紙やアンケート用紙を印刷した班もある。

「活動計画書」と「活動報告書」は、今回の活動の要となる提出物であろう。いずれもほとんど自由な記述に任せているが、FWを含めた今期の一連の活動のなかで、現在の位置・知りたいことや調べたいことの進み具合、などについて、確認しながら前進していくことが必要である。「活動計画書」は、FWや調べ物の企画をしたら始める前に、「活動報告書」は、その日の活動が終わったら

必ず翌日までに、FWの場合は訪問先一ヶ所につき一枚を、必ず提出させるようにし、これらを担当教師がチェックして、ある程度のナビゲーションをしつつ、次のステップにつなげていった。

最後の「感想シート」は、3期全体についての簡単な自己評価である。活動内容や調査の手法には個人差・グループ差があるために、細かな項目は立てられない。ただし、「体験」「作業」「議論」を重視したという点においては、どのクラスの実践も一貫している。今回は以下の4観点に対して4段階の自己評価をさせた。

自分のグループのテーマに関わる調査（体験）を進めていくときに、

1. よくものごと（書物や現地のさまざまなもの）を観察したり、人の話をじっくりと集中して聞くことができましたか？
2. 観察したものや人の話に基づいて、じっくりと考えることができましたか？
3. 観察したものや人の話から、さらに発展した調査をすることができましたか？
4. チームや班の仲間と積極的に議論して建設的な作業を進めることができましたか？

さらに自由記述として、今までの期と同様、次の2点について書かせた。

- 「総合学習・奈良」3期の作業で、あなたが最も楽しかったのはどの場面でしょう
- 「総合学習・奈良」3期の作業について、感想を書きましょう

なお、「計画書」「報告書」「感想シート」のいずれについても、各クラスの担当者が使いやすいように、各々多少のアレンジを加えて印刷した場合もある。

2003 2年 総合学習「奈良」	山口校級名(7/台士郎) 記入日(2/4)
活動報告書	
◆ 組/班長(cap)名 (1) 堀	
◆ テーマ 奈良の有名な人・人口の流入	
◆ 調査日時 9月4日(木曜日) 9時 - 12時	
◆ 訪問先	
◆ 参加者 長谷川・宮崎・江口	
◆ 報告書記入者名 江口	
◆ 調査報告 (調査でわかったこと、疑問、様子、感想などできるだけ詳しく)	
アンケート結果は 人数は20人が参加した(4/14人) 住んでいるのは、ナガサキ・フリス・トベイ・1997・199・フリス・トベイ・フリス・トベイ・フリス・トベイ 奈良の主な目的は、ほとんどの観光客(14/14人) 訪れる場所には、興福寺・春日大社・養老寺・法隆寺・正倉院・石上神宮etc 奈良の有名な人は、ほとんどの人が(特に外国人)が知らない。 奈良の美しいところの印象は、Beautiful, Nice, 大仏、寺、奈良公園、Fushimi	
思えば、外国の観光客の人はとても優しい。アンケートに答えてくれた日本人は、とても優しく、とてもおもしろい。	
外国人には、答えてくれたらいい(日本語も話せる人が多かった)	
◆ 活動した日の翌日には忘れずに提出すること	
◆ 訪問先一つにつき、この用紙を1枚提出すること	

感想シート	
総合学習「奈良」3期まとめ	
(2年 組別、氏名)	
総合学習「奈良」3期の作業で、あなたが最も楽しかったのはどの場面でしょう アンケートで外国人の話を聞いた時、楽しかった時 思い出しているのは、どの場面でしょうか？	
総合学習「奈良」3期の作業について、感想を書きましょう 2期は今までの総合学習の中で一番楽しかったです。 2日間の活動は、FWを通じて、いろいろな人の話を聞けました。 外国人の話を聞くことができて、とても楽しかったです。 アンケートは、日本人の話を聞けずともいいのですが、外国人の話を聞けました。 アンケートで聞くのは難しいと感じました。	
◆ 以下の質問について、当てはまると思う記号に○をつきなさい	
● 自分のグループのテーマに関わる調査(体験)を進めていくときに、よくものごと(書物や現地のさまざまなもの)を観察したり、人の話をじっくりと集中して聞くことができましたか？ ② とてもよくできた ④ まあまあよくできた ③ あまりよくできなかった ⑤ 全くよくできなかった	
● 自分のグループのテーマに関わる調査(体験)を進めていくときに、観察したものや人の話に基づいて、じっくりと考えることができましたか？ ② とてもよくできた ④ まあまあよくできた ③ あまりよくできなかった ⑤ 全くよくできなかった	
● 自分のグループのテーマに関わる調査(体験)を進めていくときに、観察したものや人の話から、さらに発展した調査をすることができましたか？ ② とてもよくできた ④ まあまあよくできた ③ あまりよくできなかった ⑤ 全くよくできなかった	
● 自分のグループのテーマに関わる調査(体験)を進めていくときに、チームや班の仲間と積極的に議論して建設的な作業を進めることができましたか？ ② とてもよくできた ④ まあまあよくできた ③ あまりよくできなかった ⑤ 全くよくできなかった	

3 実践の評価

3期は特に夏休み明けで、教師と生徒はもちろんのこと、生徒同士の事前の打ち合わせや準備ができにくい状況にある。そのため6月に一度LHRの時間を確保し、総合学習のことを思い出させる必要があった。2期と3期との間隔が離れていることもあって、前の期間に行ったことを認識させるのに時間が取られて、ロスが多かったともいえる。クラスによっては、夏休みに各自で活動させたところもある。生徒の活動も、それぞれの短期集中期間中だけで完結するよう想定されてはいるものの、やはり収まりきらず、生徒の負担になる場合も皆無ではなかったのである。

しかし反面、今回は2期～4期を一連の流れで捉えたため、たつぷりと計画やフィールドワークに時間が取れたという利点がある。計画段階においても、資料収集後においても、そこから何がしかの学習なり結果なりを導き出すためには、それ相応の議論や、醸造にもあたる一定の期間が必要である。また、結果よりもむしろ、そこに至ったプロセスを大切にしなければならない。発表段階に至る前の、十分な時間を確保することについては、今回の企画は相応しいものとなっているはずである。生徒同士、生徒と教師、または地域の人々と、いろいろ話し合ったり交渉したりする中で、コミュニケーション能力の向上が見られたと考える。

短期集中期間はAG（アカデミック・ガイダンス）とも重なっており、コンピュータやPC教室の利用がかなり制限されている。いっぽう、資料の整理や発表の準備にテクノロジーを利用する傾向は、いずれのグループでも変わらない。FWに行っている間は、デジタルカメラやときにはVT R・ヴォイスレコーダの貸し出しを求められ、前後にはアンケート作りやインターネットによる調べ物、その集計作業・写真のプリントアウトなどに、コンピュータの台数が追いつかない。生徒の要求にすべて応える必要はないが、なるべく快適な「学びが各自でデザインできる」環境を整えてやるためには、事前に周到な準備が必要であることを感じた。

2期以降は少人数でクラスが構成されているため、話し合いや合意形成が比較的容易で、すぐに活動につながるという利点があった。その反面、クラスが全く独立して動いているため、それぞれの教師の仕事が適切に分担できていないロスも生じた。期間中における教師同士の横の情報交換はたいへん重要である。また、3期では1期に引き続き、教育基礎実習生と一緒に授業に参加することになる。そのほとんどが、教師と生徒という人間関係で構成されている学校生活という時空において、生徒ではないが教師でもなく、それでいてそのどちらにも比較的年齢が近接している基礎実習生が存在することは、生徒たちを刺激し活性化させる機会ともなるようである。1期に、いずれのクラスでも有効に授業参加させて活用したように、今後も基礎実習生を単なる「観察者」にしない、効率的な利用方法も一考に価する。

IV 2年4期実践の概要

最後の4期は「プレゼンテーション（発表）」をキーワードに据えた。今までに蓄積した各班のデータを適切にまとめ、他者に対して伝えたいことを効果的に伝達しよう、ということが、活動内容の主たる目標である。今までプレゼンテーションは、校内で行うことがほとんどであったが、今回は、場所を別のところに移して行うことにした。学校現場では、時間や施設面での制約が多く、どうしても教師主導になりがちであったこと、別の場所では、もちろん新たな制約や条件が出てくるのであるが、その中でいかにすればよいプレゼンテーションができるかを考えさせる契機としたいこと、などが主な理由である。生徒たちが自分たちで時間の使い方や時程の立案などを行うように促し、自ら一つの行事を作り上げていくようにも指導した。

また各期において、毎回校外活動を取り入れることにより、「肌で触れる奈良」ということにも留意してきたが、4期は、「奈良の別のすがた（ここも奈良）」に触れるという視点から、「けいはんな関西学術研究都市」を訪れ、班ごとに見学および聞き取りを行わせた。訪問前には「奈良の未来への発展」という考え方も説明として加え、一連の総合学習の締めくくりとしている。

以上のようなことを一挙に可能にさせ、同時に時間を有効に使える方法として、4期の最後に、「グリーンパル南山城」という公立の施設を利用した宿泊行事を計画した。学研都市と比較的近い距離にあるうえ、発表にふさわしい施設や機材が揃っており、なおかつ安価である、ということがこの施設を選んだ主な理由である。

1 12月の期間日程

最初の3日間は、それぞれの班で発表の準備を行った。第4日に、見学希望場所に基づいて新たに5つに分けたグループで、けいはんな関西学術研究都市に点在する研究施設の見学をした。生徒にはあらかじめワークシートを配布し、見学してわかったことや学んだことをまとめさせ、宿泊場所に到着後提出させた。そして、第5日目の午前中は、3期に調べたことの発表会を行った。

12/8・9 Ⅲ期に調査したことのまとめ、発表準備、役割分担、しおり完成

12/10 1限 発表準備完成、予行練習

2限 「学術研究都市」についての講義、しおり読み合わせ（学年集会）

12/11 「学術研究都市」見学→「グリーンパル南山城」宿泊

12/12 「総合学習・奈良」発表会（於グリーンパル南山城）→学校解散

「学術研究都市」見学予定地には事前にコンタクトをとり、5コースに調整した。

- ・事前に希望を調査し、学年を新しく見学班5つに分ける。
- ・各施設には、マイクロバスで回る。
- ・説明を受け、案内をしてもらって、見学後できればインタビュー（質疑応答）をする。

午 前（見学後昼食）	午 後
A 国際電気通信基礎技術研究所（ATR）	A 福寿園CHA研究センター
B 積水ハウス総合住宅研究所	B 三輪そうめん山本ならやま「麺ゆう館」
C 福寿園CHA研究センター	C 大和ハウス工業総合技術研究所
D 大和ハウス工業総合技術研究所	D きつづ光科学館ふおとん
E 三輪そうめん山本ならやま「麺ゆう館」	E きつづ光科学館ふおとん

見学・宿泊計画

12月11日（木）

- 8：35 学校集合、発表準備物の確認
- 9：30 マイクロバス5台に分乗、物品積み込み
- 10：30 見学地1
- 12：00 班毎に昼食（弁当）
- 13：00 見学地2
- 16：00 「グリーンパル南山城」到着

12月12日（金）

- 6：30 起床・洗面
- 7：10 朝の集い・体操
- 8：00 朝食
- 9：00 「総合学習発表会」
まとめ、振り返り、自己評価
- 12：00 昼食
- 13：00 退所、帰校

(1) 発表の準備

2期から企画を始め、3期に実際にデータを収集したテーマに関し、いよいよ今期は全体にプレゼンテーションをして締めくくることになる。1クラス30分(20～25分発表、5～10分質疑応答)の時間を与え、その中で発表の構成(シナリオ)・役割分担を考えさせた。

事前に、各クラスの名義・発表の順番などがリーダー会議で確認され、各クラスではリーダー・サブリーダーを中心として、司会や最後のまとめを外枠とした、クラス・メンバーの発表配置を練ることになった。

「発表内容に対して、どういった発表形式を選びとるか」という点は、まったくそのクラスや小グループのセンスに委ねられ、担当教師は、よほど無理がなければそれぞれの方針を了承して進めた、とあってよい。今回の発表は校外の施設を用いて行うため、準備物に関しては特に留意しなければならなかったが、実際にはマイク設備やスクリーンの整った大ホール(ただしプレーンで、椅子と机並べは必要)を使え、本校の大教室と似ておりさらに少し広い環境が提供された。したがってわれわれが持ちこめた物は、発表原稿を別とすると、作品・発表用模造紙・指示棒・ノートパソコン・プロジェクタなどである。

3日目には、各クラスで時間を計測しながら発表の予行演習をし、本番に備えた。教室でうまくいっても、大ホールでは声が通りにくかったり、文字が見えにくかったりということは当然想定される事態であり、20名程度に対してではなく100人を超えるマスに向かつてのプレゼンテーションには独特の負荷がかかるし、コミュニケーションに関してまた別の工夫が問われる。

そういう意味で、初めての場所での、試行錯誤しながら臨機応変に活動する「自ら創造していく発表会」という要素が強くなった。

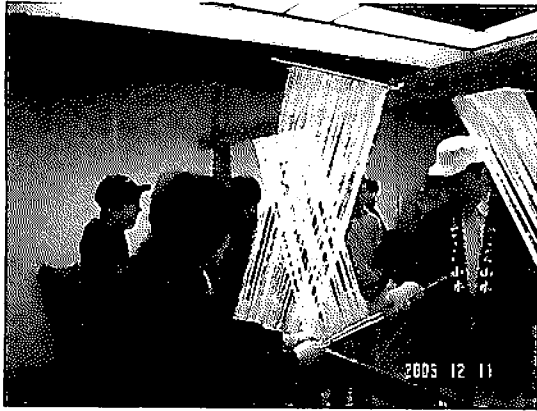
(2) けいはんな関西学術研究都市の見学

科学技術の最先端(ATR・光科学館)、住環境の研究(積水ハウス・大和ハウス)、食文化(三輪そうめん・福寿園)という3つの括りに大別される6つの見学地を2つずつ組み合わせ、5コースを設定した。担当教師の数に合わせた5コースの引率ということについては、「少人数」「フラット5」の考え方で一貫している。ただし希望を優先したため、24名×5コースには特にそろえず、実際は26・24・27・23・20といった人数の分かれ方になった。

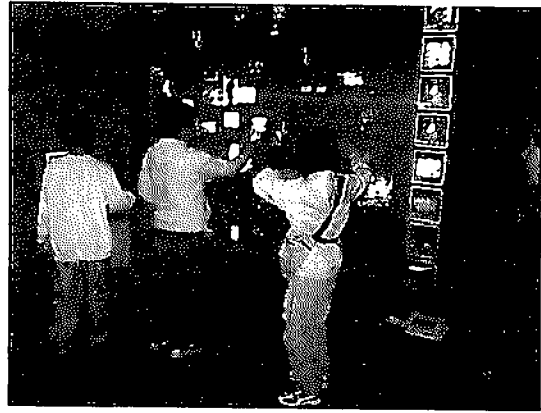
今回の見学地については、1期「奈良公園」2期「平城宮跡」3期「市井」のいずれとも異なる重要な要素がある。それは、どのパビリオンも「プレゼンテーション」を大きく意識している、ということである。生徒たちが、どの程度その妙諦を読み取れたかは定かでないが、展示や説明・実演(要するにプレゼンテーションの総体である)を「受け手として」実体験することで、自分たちのこれからの発表技術を向上させるヒントになれば、という期待もあった。

見学地によって手法は異なるが、VTRなどの映像が導入としてあったり、説明や実演のみならず生徒自ら体験する「参加型」の工夫がされている、という点では共通しており、上記の視点から考えた場合に、どのコースを選択していたとしても大きな遜色はなかったといえる。

見学の前日には学年集会をし、パワーポイントを用いて「関西学術研究都市」の概説をした。この地区は校区とも重なっており、実際にここから通学している生徒もいるし、見学施設についても行ったことがある生徒はけっこう多い。しかし、今回見学地もできるだけ多く設定することで、この地区を総体として捉えた位置づけで俯瞰させる意図があるため、前日のレクチャーは、この立場を補完する意味でも必要であった。



三輪そうめん山本ならやま「麺ゆう館」



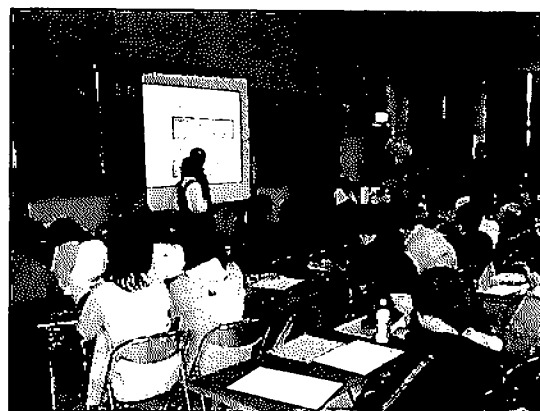
A T R

(3) 宿泊行事

「総合学習・奈良」の日程に宿泊活動を配置することは、一つ上の学年が3期にすでに行った実績がある。吉野郡下北山村でのFWを計画したため、必然的に泊を伴わざるをえなかった面もある。これに対し本学年では、4期を通じて、ことさら遠隔地に焦点を当てた企画はしていない（3期に、「4組」が日帰りで洞川にてFWを行っているのが、最も遠い）。

ところで、後述するが「総合学習・奈良」の学習目標は、いわゆる「HR・道徳活動」におけるねらいとリンクする面が濃厚にある。この学年では、生徒同士の結束を深め、クラスを超えた人間関係を育成するため、自分たちで行事を作りあげていくことに挑戦したい、との声があがり、その中で「宿泊行事」を行うことが検討されてきた。一見「総合学習」とは別の次元の話ではあるが、その本来の目的から大きく逸脱したものではない。そこで、学校からさほど離れるわけではないが、かえって時間を有効に使えるメリットが生かせることから、「学年宿泊行事」の側面も加味した目標を立てたうえで、この「4期」に宿泊活動を取り入れた。

「行事实行委員会」を組織し、「生活班」を作って役割分担したり、晩はレクリエーションを行ったりし、事前から当日にいたるまで、生徒たちが学年行事を自ら創造する場面や時間を別にとったわけであるが、本稿はそういった面の実践報告の場ではない。宿舎に到着後、「総合学習」の活動として行ったことは、各自「学研都市」のレポートを作成し提出すること、翌日の発表準備（機器の設定・予行、役割分担の確認など）である。



2 配布シート類

今期も5クラス共通のシートは少ない。発表準備期間においては、まず各クラスでさらに小チームに分かれ、プレゼンテーションのシナリオを考えた。その後、クラス全体で20～25分に納まるように練習し、互いに批評しあって試行錯誤した。こういった学習の流れを整理できるようなシートを作ったクラスもある。

「学術研究都市」の見学レポートは、5コースの引率者がそれぞれの様式で作った用紙に書き込ませて、提出させた。いずれも形式としては自由記述である。ただしこれに先立ち、出発前に一度各コース別に集まり、見学地で注意するポイントを示す時間をとった。

最終日、学年全体で共通に配布した書き込み式シートは、次のものである。

(1) 「総合学習・奈良」発表会を見るシート（相互評価）

項目は、発表要旨・質問事項・良かったところ・改善するとよいところ・総合評価（4段階）である。

自クラスの発表以外の、4クラスすべてについて、これらのメモを取らせながら発表会を聴かせた。このシートは提出させてから集約し、各クラスへフィードバックすることにより、向後また別の場面でプレゼンテーションの機会があった際、参考になるようにする。

(2) 4期の活動を終えて（振り返り、自己評価）

今期のテーマは「発表」であるから、まずは次の4項目を立て、そのそれぞれに対して4段階で自己評価させた。

〈月曜～金曜に行った、班および学年の話し合いや作業について（学研都市の見学は除く）〉

- 自分の班の発表を作り上げる作業の時に、人の話をじっくりと集中してきくことができましたか？
- 自分の班の発表を作り上げる作業の時に、観察したものや人の話に基づいて、じっくりと考えることができましたか？
- 自分の班で調べたことや考えたことを、発表会においてうまく伝えることができましたか？
- 自分の班の発表を作り上げる作業の時に、他のメンバーと協力したり、班の活動に貢献したりすることができましたか？

自由記述は、今期の各日程の活動を振り返らせ、「思うところ」「考えるところ」「反省すべきところ」「自分をほめたいところ」などについて書かせた。

さらに、これで1期から4期の活動をすべて終えることになるので、4期を概括して、

- 印象に残った活動とその理由
- うまくいかなかった活動とその理由
- 「総合学習・奈良」の改善点提案

の各項目について記させた。これらのメモは、自分や各期で所属したグループ活動についての反省や評価につながるのみならず、今後総合学習を運営していくうえで、教師が留意しなければならない点を知り、授業構成を改良していくための、貴重な資料となろう。

3 参考資料

資料1：2組（担当武田） 12/11の「見学のポイント」

京阪奈学研都市を探訪する —「セキスイ・三輪そうめん」見学班—

- 諸連絡
- (1) 出欠確認
 - (2) 本日の日程確認
 - (3) バスでの点呼
 - (4) <三輪そうめん>見学代 600円徴収

■見学先で「何を観るのか」

〈セキスイ〉で観察する視点

- Q 何の展示を、どんな目的で、どのようにしているか？
具体的にどんな「工夫」や「配慮」がなされているか？
- Q 展示の目的は達成されていると思うか？
- Q 自分が展示担当者なら、どのように改善しようと思うか？
- Q どんな展示が印象に残ったか？ その理由は何か？

※注意 ・写真撮影は出来ない

・AB組（リーダー…青海）とC組（リーダー…三宅）に分かれて見学する

〈三輪そうめん〉で観察する視点

- (1) ビデオを見て、Q 制作者は何をわかってもらおうとしているのか？
Q その目的はうまく達成されていると思うか？
改善する点はなかったか？
- (2) 実演の説明を聞いて、Q わかりやすいかどうか？
Q それはなぜだと思うか？
- (3) 展示物について、Q 何の展示を、どんな目的で、どのようにしているか？
Q その目的は達成されていると思うか？
Q 自分が展示担当者なら、どのように改善しようと思うか？
Q どんな展示が印象に残ったか？ その理由は何か？
- (4) 実際にやってみて、Q 「見ているだけ」と「実際にやってみる」とはどんな点で、どんなことが違っていると思うか？

※ いずれも宿舎到着後に「見学レポート」を記入するので、よく「メモ」をとっておくこと

4 実践の評価

プレゼンテーションの条件として教師サイドからはめた枠は、制限時間だけである。発表の形式については生徒たちの自由な発想の飛翔に任せている。ただしどのクラスも、その発表の目的は何か・どのように取材し情報を収集したのか・結論はどうだったのか・学べたこと（考察）は何か、という説明の流れは明確にさせるよう留意した。また、クラス全員が何らかの形で必ず発表に参画すること、口頭発表だけではなく、何か感覚的な工夫を加えること、の2点については、暗黙のうちに了解されていたと思われる。

1組・3組の発表は、セクションに分けてのユニット的な考え方に立った性格のもので、2組・5組は、パートに分けながらもクラス全体のテーマの骨格を感じさせる内容になっていた。4組はクラス全体を統一した形式で進めた。

クラス	—発表のメディア—
1組	画用紙・模造紙・パワーポイント・ワード（写真添付）…グループごとの形式
2組	各チームの調査結果を、1つのパワーポイントにまとめ、順に発表していく
3組	人形劇・模造紙・OHP・PC画像…グループごとの形式
4組	〇×クイズ（フロア参加型）
5組	寸劇にまとめ、要所に調査結果をパワーポイントで説明、レプリカ（小道具）もあり

すべて手作業のものから、コンピュータを有効に活用するもの、演出に重きを置いたものなど、期せずして、考える限りのすべての発表方法が出そろった感がある。これらの案は、担当教師が相談し振り分けて変化をつけたのではなく、自然発生的にこうなった。聴取者に分かりやすく、興味を持ってもらえるよう、各クラスまたはグループで、発表の内容に応じた工夫を凝らした結果である。「指示・命令をする」のではなく、生徒たちのアイデアを「支援する」だけで、「空っぽの器」がまさに「おもちゃ箱」のようなこれだけの多様性に満たされたことについては、総合学習の一つの可能性を強く感じた。

発表が目前に迫ったからであろう、事後の振り返りを読んでも、4期の活動ではグループの協体制が今まで以上にしっかりとれた、という意見が多い。もちろん、2期からのいろいろな形でのコミュニケーションや共同作業の集大成は、全てが「発表」に反映できたわけではない。しかし、プロセスを重視する総合学習において、2期から4期に向けてベクトルが凝集していく緊張感が、最も持てた一週間であったと思われる。なお、3期と同様準備に際しては、コンピュータなど機材の借用に奔走させられた。

発表会では、各クラスのリーダーが中心となり、会場づくりや運営・司会進行がなされた。発表自体には当然のことながら、どのクラスについてもいろいろと反省は残るが、その点は相互評価によるフィードバックを行い、今後の機会に生かせばよい。声の大きさや抑揚、文字や画像の見やすさ、といった基本的な条件から、内容のわかりやすさや発想といった高度な面まで、あらゆる要素について適切にわれわれが指導できたわけではない。生徒の自覚に基づいた改善が、徐々に実現されることを期待する。なお、プレゼンテーションの観点別評価基準については、詳細なものを「研究紀要第44集（1年1期報告）」に所収している。

パワーポイントはプレゼンテーション・ツールとして昨今定番化した感があり、教育現場にも急速に浸透している。その効果的な利用法については、本来時間をかけて指導し、実際に経験させる必要があるが、あえてこれも今回は単なる出発点とした。

発表会場を、校内のよく知っている場所ではなく、未知の施設としたことにより、準備や予行の成果が円滑に実行できなかった面ももちろんある。その意味でも今回の実践は、より「対応の方法を学ぶ」傾向が強調されている。生徒たちにとって、この点は苛酷な条件であったかもしれない。実際、使用させてもらったホールは、スクリーンや音響設備・会場の求心性といった面で、使い慣れた本校の大教室や多目的ホールに一籌を輸する。

4期の最後に宿泊行事を行ったことは、それまでの活動の締めくくりに点でいうと、効果的であったと考えられる。生徒たちにも一定の達成感が生まれ、これから新たな行事や学校生活を営んでいくための自信をつけた生徒もいるようである。単純に「楽しかった」という感想も多い。ただし、友人と寝食を共にし、「宿泊行事を楽しむ」側面に流れ、肝心の発表会において集中力を継続できない原因(寝不足や疲れ)を作る結果にもなったことは残念である。5クラスの合計が3時間を超える発表会なので、ただでさえ訴求力を維持するのがなかなか難しい企画であった。「総合学習」に宿泊活動を組み入れる方向性やその配置については、ここ2年間の実態に照らし、今後も議論が必要であろう。

完成度そのものを評価することが目的ではなかったが、生徒たちの残したFDやCD-ROM上のデータ、模造紙や画用紙などの作品は、一回の短い発表で終わらせてしまうには惜しい出来ばえのものが多かった。もう一度掲示するなど、もっとゆっくり閲覧できる機会があれば、と思う。

V 生徒評価の方法

「総合学習・奈良」の評価についての会議決定は、

「1年・2年の評価方針を以下のようにし、具体的な評価活動は学年に任せる。」

(1) 評価の5観点を設定し、観点ごとに評価する(総合評価はしない)

(2) 評価はA B C Dの4段階で行う

A : たいへんよくできた

B : よくできた

C : もう少し努力が必要であった

D : もっと努力が必要であった

(3) 「自己評価」+「相互評価」を中心として、教師が評価する

(4) 通知表とは別に、各期の評価票を印刷して生徒に手渡す

となっていた(詳しくは、昨年度紀要参照)。

ところで、総合的学習は、生徒自らが学ぶ学習であり、通常の教科学習のような形で教師は教えない。問題に対して、どう取り組んだか、その学習の状況・姿勢・態度を見なければならぬ。したがって具体的には、次のような点から評価することが求められる。

○ 生徒自らが何を学んだか見てとる

○ 生徒の多様な活動を受容し、認め、いろいろな観点から評価する

○ 学習の対象の中に、生徒が価値を感じとる力、各自の考え、美しさやよさを看取することを大切に

○ 活動への参加意欲と参加状況の評価する

また、学習の結果のよしあしを見るのではなく、結果を導き出していく学習過程の評価が重視される。すなわち、「評価は、目的追求—評価—調整という単位での目標追求活動における部分活動であって、追求活動の実績と目標との関係をチェックし、調整のためにフィードバック情報を提供するものである」(『教育評価』続有恒、'69年)。そして、この自己調整の過程には、大きく二つの面、フィードバック(振りかえり)とフィードフォワード(見通し)がある。

2期から4期にかけては、評価をまさにこの考え方に即して運用した。われわれは、昨年度の紀要

においても「評価のキャッチボール」の重要性を強調したつもりであるが、そもそも形成的評価の手だてとしてポートフォリオ方式を導入した方針に副い、2期の自己評価と計画書の提出→教師の助言書き込み→軌道修正→3期の実践→自己評価と報告書の提出→…といったファイルのやりとりが実行できた。これは、各期を独立させて全く別々の活動内容にするプログラムでは、実現できないことである。

こういった流れのなかで、数値的な細かい評価に拘泥する必要性はどんどん薄くなっていった。5クラスのそれぞれで実践の内容も大きく異なり、公平な基準が設定できるわけでもない。逆に「教師の評価」は、具体的な文章によるアドバイスや励まし、観察を各自に示すことで充実した。「相互評価」についても、2期と3期では事実上考えにくかった。ただしグループ活動においては、この間日常的に議論や分業作業をしながら、意識せずともコミュニケーションの内部で互いに評価をしあっている。4期の発表会では、お互いに発表のよいところ・改善すべき点を書くことができた。しかし、これにしても、今回で完結する「到達度評価」として使用することはあえてせず、今後のプレゼンテーションの機会に生かせるよう、フィードフォワードの材料と位置づけ、文章による相互評価を重視した。したがって結果的に、数値的な評価としては、どの期も1期と同様、「自己評価」をして内省させることに統一した。

生徒の「評価能力」の未熟さということについては、1期の自己評価の際にはかなり感じとれたものの、回を重ねるごとにその訓練もできつつある。性急に評価の「正確さ」を求めるのではなく、これをも学習活動の通過点として、長い目で見てやる度量が必要であろう。

VI 次年度への課題

昨年度指摘した課題について、どの程度克服でき、研究が進んだかを述べ、来年度以降に展望をつなげたい。

まず、実践についての裁量であるが、今年度も担当者（学年団）にほとんど任されていたのが実情である。「総合学習・奈良」は始まってこれで2年になるが、当該担当者の恣意的な判断や好悪、また、時間や場所などの外在的条件に制約され規定される中で活動が選び取られてきた面が強い。しかし学年の負担感・消耗感を緩和するため、来年度以降の「総合学習・奈良」については、教育課程委員会から大枠の提案があるとも聞く。それにしても、比較検討なしにこれに従うのではなく、2年間の実績の報告をよく吟味した上で、定食メニューとしてどのようなものが理想的なのか、いろいろな観点から十分に議論することが望ましい。

授業担当者が担任および副担任で構成されていることは、体制としてよい。今年度は打ち合わせの時間も持ち時間数に勘定され、校時内にそのコマを指定された。講師時間数の削減とからんで、来年度はカウントがなくなったが、会議時間は引き続き確保される。定期的な会合は必要で、本学年のように一年間通した計画でなく、一期ずつを全く独立させる方式を採るとしたらなおさらであろう。

生徒評価に関わっては、未だにすっきりとしたコンセンサスを得られない状態が続いており、「課題総合学習」の理念がなかなか担当者以外には根付かないことを示している。いま一度、教育課程審議会答申による「総合的な学習の時間」の評価に関する記述に、「この時間の趣旨、ねらい等の特質が生かされるよう、教科のように試験の成績によって数値的に評価することはせず、活動や学習の過程、報告書や作品、発表や討論などに見られる学習の状況や成果などについて、生徒のよい点、学習に対する意欲や態度、進歩の状況などを踏まえて適切に評価する」とあることの、真意に立ち返って考えなければならない。今回3つの期については、教師が生徒の自己評価に目を通し、コメントをつけて

返却するやりとりが、継続してごく自然に行えた。教育目標が「方向目標」に加重される「オープンエンド」の学習においては、評価方法について引き続き研究を深める必要がある。

短期集中方式の問題点と各期の継続性に関して、この学年は一つの解決策を示したといえる。あたかも通年の学習のように連続的なプログラムを組むことで、モザイク的な「一週間行事」から脱却させ、生徒の「成長」を支援し「変化」を捉えることが可能にできたからである。なお、各期は一度始まってしまうと、途中で計画や路線を変更することが困難であるから、5日間を通した教師や生徒の動きを周到に計画し、それに必要な施設や道具を事前に用意しておく配慮が今後とも重要であろう。

1・2年、いわゆる低学年では、「HR・道徳活動」が豊富に保障されており、その中で「全校レクリエーション」や「学年行事」の企画、学園祭に向けての取り組みを行っている。これらも「総合」的な側面を強く持つので、「総合学習」週間を含めると、授業時間が減少するなか、年間を通じてかかる学習形態に費やす時間が、教科学習で使う時間に比して肥大している感も否めない。近年、小学校でも総合的な学習が広く取り入れられるようになった。その段階でかなり充実した活動を行ってきた生徒も多い。中等教育学校における理念と方法論を明確にし、屋上屋を架するのでない、小学校とは差異化された本校なりの総合学習を確立することがこれからの急務であろう。

VII おわりに

総合学習で得られる達成感は、具体的に次の5つにまとめられるという。

第一に、大きなプロジェクトをやり遂げたこと自体がもたらす達成感。一連の学習プロセスを体験すること自体が、大きな自信に結びつく。第二に、協同的な学習活動に何らかの貢献をしていると実感できること。それが参加感を生み、必要とされているという自尊感情につながる。第三に、プロジェクト学習が、彼らの視野を広げる経験になる。新しい知識を手に入れたり、スキルを獲得したりすることは、世界が違って見えてくることである。第四に、テーマを深く追究するなかで、自分の能力の限界と可能性を自覚したり、自分自身の存在に気づくこと。それは、自分の持つスキルの自覚から精神態度にまで及ぶ。第五に、自分が知ることとそれを相手に伝えることの間にある大きなギャップを認識すること。そこに、コミュニケーションや表現方法への気づきのきっかけがある。

一方、総合学習を指導する教師には「学びのデザイナー」としての性格が必要であり、生徒による獲得型の学びに寄り添う教師の資質として、次の3つのものが挙げられている。

第一に、ディスカッション・ディベートはもちろん、身体表現をも含む様々な表現技法を身につけ、生徒にも指導できる「表現者」としての資質。第二に、自主的に学ぶことの喜びと楽しさを自らが経験し、それを生徒にも伝えられる「学習者」としての資質。第三に、生徒の自主的・主体的な学びを有形無形に励ます「援助者（ファシリテーター）」としての資質である（『総合学習に展望はあるか』渡部淳、'02年）。

学習者の主体性を育むため探究的学習に向かわせ、体験を重視し、実践力をつけさせる、という目標のもと「総合学習」の2年間を実践してきたが、生徒たちが上記のような達成感を少しでも感じられていたら、3年における「総合教科・環境学」でも、新たなステップが踏めるにちがいない。われわれ担当者が優秀な「デザイナー」として、彼らの取り組みを強め、問題解決の姿勢を後押ししてきたかは心許ないが、今回の総合学習での経験を通し、学習プロセスを自由にデザインする創意を、教科学習の指導においてもさらに活かしていくヒントが得られたかもしれない。

総合的な学習〈環境学〉を実施して (2002年度)

勝山元照・野上朋子
松田正昭・吉川裕之

I はじめに

総合的な学習「環境学」がスタートして14年目になるが、昨年度までは環境問題に関連事項が多い教科の教員が担当するという形で行われてきた。13年前に理科2名・社会科・保健体育科の教員4名でスタートし、しばらくの間は3教科が中心での担当が続いた。1997年からは、理科が1名減り、代わって家庭科や技術科の教員が加わるようになった。2000年には国語科の教員も担当した。いずれにしても4名の教員が、教科の枠を超えて協力したり、あるいは教科の特性を生かした形で分担してきた。しかし、4年前から4年生において総合的な学習「世界学」が始まり、4年生で行われていた環境学は3年生で扱うことになった。また、昨年度からは1, 2年生で短期集中型(※詳細は本研究紀要別報告参照)ではあるが総合的な学習「奈良」がスタートした。これは担任団が中心に担当するが、世界学は英語科・社会科・国語科・数学科などの教員が担当している。本校全体が新しいカリキュラムへ移行し、それぞれの教科教育での負担が増大している中、総合的な学習へ複数の教師を出さなければならないなど教科の過負担が課題になってきている。

元来、環境学で取り扱う「種々の環境問題」や「環境に関する内容」、あるいは世界学で取り扱う「世界の中の日本」や「世界理解」という問題は、関係教科はもちろんではあるが、その教科に限定するものではなく、人の生活の中で、あるいは人と人とのつながりの中で考える問題でもある。そういう意味でも、様々な角度から、様々な発想からアプローチできるようにと考え、昨年度からは、決められた教科で分担するのではなく、個人のレベルでの担当制をとった。前年度のうちに、総合的な学習に興味・関心がある、あるいは担当してもよいと考えている教員が、教科の義務としてではなく、個人として名乗りを上げ登録しておく希望登録制をとることにした。それに関する問題点は後述するが、今年度は社会科・理科・保健体育科・創作科・国語科などから15名が登録を行い、その中から担任学年や教科の持ち時間等を考慮した教員が担当となった。ちなみに今年度は結果的に従来と同じ社会科・理科・保健体育科・創作科からの4名である。

II 2002年度〈環境学〉の概要

今年度も環境学が開設以来引き継がれているフィールドワーク活動を中心に据えた。自らの興味・関心のあることがらについてテーマを設定し、実際に現場へ行っての観察や聞き取り調査を元に、様々な角度からのアプローチで展開し、まとめるというものである。主体的な、自主的な活動を通じて様々な環境に関する諸問題を感じ取り、これからの生活の様々な場面で、それを生かせる能力の育成をねらいとしている。それだけに、環境学の中核であり、6月に始まり1月の発表会まで半年以上をそれにかけることになる。開設当初から1995年度までは夏休み以降にFWを行っていた。しかし、平日授業の時間だけでは現地へ赴いての調査には不十分である。そこで1996年度からは夏休みを有効に活用するためにも夏休みまでにFWに取りかけられるように日程を組んだ。

2002年度環境学 年間予定表

担当者：勝山、松田、吉川、野上

回	日付	内 容
1	4月19日	ビデオ鑑賞「風力発電」／オリエンテーション「環境学」って？
2	4月26日	岩井川FWオリエンテーション（説明、係り決め）
	5月3日	憲法記念の日
3	5月10日	FWオリエンテーション①② ※岩井川FWが雨天順延のため
	5月17日	全校レクレーション
4	5月24日	講義①②③ ※岩井川FWが雨天順延のため
5	5月31日	講義①②③④
5	6月7日	岩井川FW
6	6月14日	岩井川FWまとめ
7	6月21日	FWテーマ検討 班調整&班決定
8	6月28日	FW班決定→班活動
9	7月5日	FW（夏休み計画）
	7月12日	半日授業
	7～8月	夏季休業
	9月6日	アカデミックガイダンス
10	9月13日	FW
	9月20日	学園祭
11	9月27日	FW
12	10月4日	FW中間報告会
	10月11日	I期期末考査
13	10月18日	FW
14	10月25日	FW
15	11月1日	FWプレゼンテーション用オリエンテーション
16	11月8日	FW
17	11月15日	FW
	11月22日	公開研究会
18	11月29日	FW
19	12月6日	琵琶湖博物館見学（Ⅱ期中間考査最終日）
	12月13日	アカデミックガイダンス
	12月20日	家庭学習
20	1月10日	FW発表会（分科会）
21	1月17日	FW発表会（最終発表会）
22	1月24日	ごみ調査オリエンテーション&ごみ調査
23	1月31日	ごみ調査まとめ（壁新聞作り）
	2月7日	入検
	2月14日	スキー行事
24	2月21日	外部講師による講演会「南極観測隊から見た環境問題」&まとめ&アンケート
	2月28日	卒業式
	3月7日	Ⅱ期期末考査

導入部分では、化学的な指標を使ったり、自らの目で観察する岩井川フィールドワークを行った（※本校研究紀要第43集ⅡP 1～2参照）。続いて担当教員による講義があり、それと並行するようにFWをスタートした。それ以外としては、後半には校内ゴミ調査、外部講師による講演会などを行った。

全体の流れは2001度とほぼ同様であり、今年度は各班のFWのテーマや活動の実際、あるいは講義内容などについてのみ記載し、詳細については割愛するので本校研究紀要第44集を参考にしてもらいたい。

Ⅲ FWレポートのまとめ

◇A1班「お茶」

食環境というとらえ方で、いつもよく飲んでいるお茶に焦点を当てて調査。日本茶や世界のお茶の歴史に始まり、お茶の種類、市販されているお茶、そしてお茶の効能へと続く。ここで、身体への影響について述べている。また、環境という視点では農薬についても調べられているが、突っ込んだところまでは追求されていないのは少し残念である。街頭や販売店でのアンケートやJAアンテナショップへの聞き取り調査など、FWとしてはよく活動しているが、レポートは、調べたものを受け売りのように書いている。もう少し自分たちの意見や考察も交えながらまとめて欲しかった。

〈訪問先・取材先〉

奈良ファミリー、デイリーヤマザキ、サークルK、am/pm、ダイコク薬局、無印良品、三笠コココーラ、JAアンテナショップ

◇A2班「騒音」

人間がうるさいと感ずること、すなわち「騒音」に興味を示したことがテーマ設定の理由。騒音計を用いて、まず身近なところで、校内の騒音を測定。また、教員に模擬授業をしてもらっての声の測定も面白い。騒音に関して校内でアンケートを行い、それを受けて駅や街頭でもアンケート調査をしている。騒音は好ましくないものだが、慣れによって気にならなくなってしまうことが判明した。次に、騒音による事件や環境問題を調査したが、インターネットなどによる情報収集に止まり、実際、騒音が問題になりそうな住宅などでのFWには及ばなかったのは残念である。レポートは、全体的には自分たちの意見・考察等を交えながらまとめている。

〈訪問先・取材先〉

アンケート協力：近鉄奈良駅利用者、三条通歩行者、ゲームセンター利用者、近鉄奈良駅駅員、近鉄奈良駅近隣店員、本校前期生生徒

◇A3班「清涼飲料水・炭酸飲料水」

食環境という視点から、みんながよく口にする清涼飲料水について調べ始めたが、途中から炭酸飲料が加わり、さらに乳飲料へとテーマも変化している。一貫性がないと捉えるか、発展性があると捉えるかは難しいところである。ヤクルト工場での乳飲料の製造過程での衛生管理や乳飲料から容器を用いた水浄化実験など収穫もあったようだが、レポートのまとめ方、FWの進め方など、少し雑なところは否定できない。全体として班員にまとまりがなかったことにも起因する。

〈訪問先・取材先〉

ヤクルト工場京都本社、三笠コココーラボトリング

◇A 4班「田舎と都会」

行ってみたいのは田舎、しかし住むとなると都会と田舎のどちらがいいのだろうかという疑問から、このテーマに決定した。都会と田舎の定義は難しいが、田舎として東吉野村、都会として東大阪市の鶴橋をそれぞれFW先とし、アンケート調査や実地調査を行った。どちらにも長所・短所があり、住めば都の言葉通り、現地の人にとっては今の環境がよいということが分かったようだ。両者を比較する中で、森林や農業についても調査。そこで田畑や家畜などから多く排出されるメタンガスが温室効果ガスであることも分かった。本筋からは離れているが、環境問題という視点からは予定外の収穫であったようだ。

〈訪問先・取材先〉

東吉野村、東大阪市、三条通り

◇B 1班「猿沢池の亀」

あまりに身近すぎて見過ごしてしまいがちな猿沢池と、そこに生息するカメに焦点を当てて調べてみよう、と始まったプロジェクト。しかし、カメを「環境」に結び付けにくく、広く浅くの調査になってしまったようだ。レポートは、猿沢池の歴史的経緯や実態をはじめ、その池に生息するカメ・他の生物の種類や生息数の変化をまとめている。また、カメの住む環境がどのようなものを調べるために、8種の水について水質調査を実施し比較している。最後のまとめでは、班員1人ひとりが「人とカメが共存できる理想の池」を考え、スケッチを提示している。これは、班員が放課後遅くまで残り、真剣に話し合いを進める中で辿り着いたものである。各人が人間とカメ両方の立場から環境を考え、言葉では表せない自分の思いを詰め込んだスケッチに仕上がっている点を高く評価したい。

〈訪問先・取材先〉

猿沢池、奈良教育大学附属小学校、興福寺、猿沢池近辺の住民、観光客、本校前期課程生徒

◇B 2班「捨てられるペット」

捨てられたペットの行方を、保健所を訪問したり、里親の方々にインタビューすることで調査している。とてもしっかりした班で、それぞれの訪問先で得られた情報を確実にまとめ、次に活かしながら活動を進めることができた。さらに、動物虐待や動物由来感染症などの衛生上の問題から、動物に関する法律や基準を丁寧に読み、まとめることもした。これらの活動を通して、自分が以前に持っていたイメージと実態との相違やペットを飼う人の意識の低さを指摘し、ペットを命あるものとして尊重し、愛護するべきであることを訴えている。残念なのは、最後のアンケート調査に対するまとめがなく、協力して下さった方へ還元できていない。そこまで指導が行き届かなかったことに担当者自らも反省している。

〈訪問先・取材先〉

奈良市奈良保健所、奈良県庁、ペットショップ「ワンダーランド」西大寺店、里親の方々、本校前期課程生徒

◇B 3班「髪の毛」

最初の章立ての段階で、各章に格好良く決まったタイトルがついていたのはこの班だけではなかろうか。とてもユニークな女子生徒が中心になって活動していた。テーマは、周りの環境が身

体へ及ぼす影響の一つとして、誰もが身近な「髪の毛」への影響を取り上げている。髪の毛の構造をまとめた後、染色、日常生活、酸性雨が髪の毛に悪い影響を与えるのかについて、聞き取り調査や実験を行い、検討している。色んな方面から髪へ及ぼす影響を丁寧に調べることができた点はよかったが、まとまりがなく、頭の中で整理しにくい。最後に図式化したまとめがあると分かりやすかったかもしれない。また、ちょうど本校生徒会の取り組みで染色やパーマメントが問題になっていたのも、そのことと結び付け、全校生徒に調査報告するなど積極的な活動ができたらよかったのにな、と残念に思う。

〈訪問先・取材先〉

カネボウ株式会社、ホーユー株式会社、尼辻マルゼン薬局、上北薬局、ウサギ薬局、キリン堂、東洋薬局、山田薬局、本校生徒

◇B4班「シックハウス症候群について」

最近よく話題になりつつも、あまり詳しく知られていない「シックハウス症候群」を、「歴史」「原因」「症状」の観点で取り上げている。「歴史」は、新聞記事を用いて発見から現在に至るまでをまとめている。「原因」では原因物質の物性や用途を、「症状」では発症した時の症状と予防策を調べている。建設されたばかりの本校新棟についても調査し、自分達の分析も加えながら上手くまとまっているが、レポートの目立ちにくい位置にあるのがもったいない。皆にとってすぐ身近で問題提示しやすいフィールドだったのだから、本校新棟を中心にレポートを構成してもよかっただろう。この班ほど環境学を楽しんでいた班はないだろう。また、調べものは「とりあえずインターネットで」という班が多い中、図書室で借りた本を山積みして、必死に本を読んでいる姿が印象的だった。全校の皆に知ってもらいたいと積極的に取り組んだが、全校生徒の前で発表できなかったのは無念である。

〈訪問先・取材先〉

シックハウスを考える会、大和ハウス研究所、本校生徒・3年生保護者・教員

◇C1班「Personal Computer」

Personal Computer はWindowsの発売、インターネットの普及に伴い、爆発的に販売台数を伸ばした。多くの電子部品を組み込み、高価であるにも関わらず、その買い替えのサイクルは、電気製品としては異常に早く、多くのPersonal Computerが「ゴミ」として処理されている現実に着目した。調査はPersonal Computerの普及率、土に還る部品の開発といった、直接「ゴミ」に関わるものに留まらず、普及に伴う電力消費量増大の問題、省エネ法、グリーン購入法、PCグリーンラベル制度といった法整備の課題、最新の医療用ロボットの調査など、Personal Computerをめぐる環境の問題を総合的に捉え、部品リサイクルへの提言で締めくくった。Personal Computerを自ら分解し、部品を調査したり、県外へ医療ロボットを見学に行くなど、積極的な取り組みを行った。また発表も、Power Pointを駆使すると同時に実物を見せるなど、わかりやすくまとめあげており、非常に優秀な研究であった。

〈訪問先・取材先〉

医療法人医誠会 医誠会病院、ヤマダ電機

◇C2班「マイナスイオン」

電気製品を始め、マイナスイオンを発生するとうたった商品が非常に多く出回っている。マイナスイオンについては、効能は記されているが、実際の効果は不明である。目に見えないマイナスイオンの実態を調査し、その効果を実証しようと取り上げた。スポーツショップでマイナスイオン商品について取材したり、実際に着用してみる取り組みを行うと同時に、マイナスイオン発生機能のついた電気製品について調査したが、効果を実証することはできず、また、アンケートや資料での調査を含めて、販売されているマイナスイオングッズでは、「マイナスイオン効果」は期待できないと結論付けた。人体の、特に精神面への効果・影響を実証することは難しいが、何らかのアイデアを出していく必要はあったと思われる。

〈訪問先・取材先〉

スポーツショップ・ミツハシ

◇C3班「日焼けと日焼け止め」

「小麦色の肌」や「美白」。時代によって好みは変わるが、思春期の生徒にとって、日焼けは化粧品にも似た興味深いテーマである。日焼けが引き起こす影響、日焼け止めの薬剤効果など、サッカー部、野球部、テニス部の生徒が身近な問題として取り上げた。まず校内アンケート、続いて街頭アンケートを行い、日焼けに対するイメージや取り組みについて調査した。結果としては、女子の方が圧倒的に関心が高く、また日に焼けないよう努力している姿が浮かび上がった。そこで、紫外線が及ぼす影響と日焼け止め剤の成分や効能を詳しく調べ、発売会社5社に日焼け止め剤について同様の質問をし、回答の集計を行った。最終発表ではそれらのデータとともに、日焼け止めの選び方、塗り方のポイントを提案した。

〈訪問先・取材先〉

キリン堂高畑店

◇C4班「自転車」

本校では、ほとんどの生徒が電車・バスを乗り継いで登校している。奈良という景観を大切にす観光都市でありながら、毎日目にする駅前の不法駐輪に、問題意識を持った。不法駐輪の現地調査を行い、不法駐輪の原因や、引き起こされる害について分析するとともに、不法駐輪をなくす取り組みを行っているNPOを尋ね、これからの奈良にふさわしい交通対策について意見をまとめた。最初の訪問先で丁寧な資料を入手できたため、それ以上の取り組みが、不法駐輪の実数調査のみに終わってしまったことは残念である。身近な問題だけに、自分たちができる環境保全への提起ができればなおよかった。

〈訪問先・取材先〉

サンガ車座

◇D1班「健康食品」

食環境の視点から健康食品についてインターネットによる調査を行っているが、健康食品の中でもよく耳にする、日常不足がちな栄養素を補うサプリメントに焦点を当てている。メリットだけでなくデメリットにも触れられているが、総合的に見て、正しい使い方をすれば補助食品には十分なり得ると結論づけている。班員が各々違うサプリメントの摂取実験（1～3ヶ月）を行っ

ているのは面白いが、期間が短いこともあり、その効果が顕著に現れたケースは残念ながらなかったようだ。FWとしては、インターネットや資料等によるものが多く、少し残念である。

〈訪問先・取材先〉

キリン堂薬局、ローソン、ファミリーマート

◇D2班「世界から見た日本の環境」

日本、ドイツ、ニュージーランド、韓国、オーストラリア、シンガポールそしてイギリスと、各国の事情をインターネットにより調査。各国が抱える環境問題や環境対策、あるいは自然環境や生活事情など、様々な角度からアプローチされている。しかし、必ずしも各国共通の項目で調べられておらず、また、比較できるような形ではまとめられていないのが残念である。関西国際空港で、外国人を含む旅行者約70人にアンケートを行っているが、簡単な内容が多く、テーマからすれば、母数の数、内容ともう少し充実させ、世界から見た日本の環境をもっと突っ込んだ形で調査してもよかったのではないかな。

〈訪問先・取材先〉

海外旅行者（関西国際空港にて）、ドイツ総領事館、英国総領事館、関西国際空港株式会社サービスセンター

◇D3班「紙」

紙ができるまで、紙のリサイクル、世界の紙、紙すき、アンケートという流れで取り組んでいる。最初のところでは、紙の歴史に始まり、紙の原料や製造工程などについて述べられている。リサイクルのところでは、紙の分類と再生品という形でまとめられているが、リサイクル品は再生紙だけでなく、畑や農園、建築資材、牧場などにも利用されていることを知ることができた。また、木津町のリサイクル研修ステーションで紙すきを体験。アンケートでは、「紙のよさとは」をポエム風に募集するなど趣向を凝らしているのも面白い。全体的に考察しながらのアプローチに欠けている点が少し残念である。

〈訪問先・取材先〉

奈良テレビ、木津リサイクル研修ステーション

◇D4班「電池のリサイクルについて」

前半は電池の歴史、電池の種類などについて説明している。インターネットや書物などから得た情報で、もう少し自分たちの考察や感じたことなどを盛り込んでもよかった。次のセクションでは、再生資源利用促進法やリサイクルに関することが調べられているが、ここもやはり調査資料などをまとめた形となっている。後半はリサイクルの必要性とリサイクルの現状や問題点について、考察や意見を交えながらうまくまとめている。

〈訪問先・取材先〉

日本リサイクルセンター株式会社、電池工業会

IV 講義について

今年度の担当教員による講義は、特に共通テーマを設定せず、それぞれの教科特性や個人の興味・関心のある内容から講義を行った。概要は以下に示すとおりである。なお、授業に使用したプリントは資料

■ 勝山担当

江戸時代におけるリサイクルの仕組みを取り上げ、リサイクルが時代の要請の中から生まれた「歴史的なしくみ」だということを、生徒に考えさせようとした。

平安時代、屎尿は、京の都人にとって厄介者であった。ひとびとは特定の場所を決めて、高下駄をはいて用を足し、屎尿は垂れ流し状態になっていた。屎尿が肥料として有効に利用されるようになったのは、中世に入ってからのことである。江戸をはじめとする各城下町は、屎尿・残飯・塵芥等に対するリサイクルの仕組みは整備されていた。屎尿は近郊農村の百姓に売却され、肥料として利用された。棟割長屋の大家が店子に「家賃無料、ただし糞尿はかなわず当長屋の便所にて足すべし」といった条件を提示している場合もあった。残飯も家畜や鶏・犬の餌として、無駄なく消費された。金属類をはじめ、布や紙は貴重品であり、徹底した再利用が図られていた。寄生虫や伝染病の問題はあったものの、資源の再利用に関するこうした知恵は、高度経済成長期までの日本には、生活に根付いていた習慣があった。

■ 野上担当

この講義の前後に「岩井川の調査」があり、そこで用いるパックテストの中に「pH」がある。「pH」という単語を聞いたことがない生徒はいないだろうが、「pH」が何を表すものかを知っている生徒も少ないだろう。「pH」のことをある程度知った上で調査結果をまとめ、分析してもらいたいと考え、本講義では「pH」について取り上げることにした。しかし、pHの理論に重きを置くと「理科」にシフトしてしまうので、出来るだけ実験を中心に、使う液体も薬品庫にあるものでなく、ジュースや食酢などの身近なものにして「環境学」らしさを出した。また、蒸留水や水道水など、いろいろな「水」のpHを測定することで、「本来中性であるはずの純粋な水は、空気中に放置することで二酸化炭素が溶け込んでしまい酸性になる」ことや、「水道水は中性になるように調製されている」こと、「酸性雨は大気中の二酸化炭素が十分に溶け込んだ時に示すpH5.6以下の雨のことをいう」ことを確認した。

■ 松田担当

環境問題と言えば兎角「～汚染」や「～問題」などに偏りがちで、事実大切などころではあるのでその問題については避けられない。しかし、あまりの衝撃に、ともすれば伏し目がちになることもある。そこで昨年度同様、肩肘張らず楽しく取り組めることも環境問題を考える上で必要と考え、美しいものを見て感動し、それを大切にすることも環境学というコンセプトで授業を展開。スライド写真を使って北欧の自然の美しさの素晴らしさを伝え、それにまつわる様々な話を紹介した。その中でノルウェーのリサイクル事情や環境問題取り組み先進国であることにも触れた。今年度は昨年度使用した北欧の写真に加え、クリーンなエネルギーで近年注目されている風力発電にかかわる写真や話題も提供。さらに簡単な写真撮影技術にも触れた。

■ 吉川担当

私たちが生活を営むためには、エネルギーが必要である。自然界に溢れるエネルギーを、どのように生活に役立てるか。先人たちは水車・風車を発明し、粉を引き、水を汲み上げる動力として用いる工夫を重ねた。現在、水車・風車は巨大化し、創り出される回転運動は、電気を生み出す力となった。電気は遠く離れた地域にまでエネルギーを送る事を可能にし、私たちの生活を支えている。「電気エネ

ルギーをどのように生活に役立っているか」という内容は技術の授業の中で取り上げている。しかし生活を便利にし、一見排気ガスなどの公害が出ないように見える電気も、発電過程や発電所の建設過程に多くの問題点を抱えている現実がある。日本の三大発電方法の長所・短所及び環境面の視点を、概念的な知識だけではなく、データを交えながら講義を行った。

V 講演会まとめ

講師：川村泰史氏（元南極観測隊員、奈良女子大学事務職員）

日時・場所：2003年2月21日（金）5、6限、多目的ホールにて

題目：南極観測隊から見た環境問題

講演内容：

以前に1年間、南極観測隊員として活動されていた川村氏から、南極の様子や隊員として南極で生活した時の体験記を話していただいた。

「南極はどんな形をしているのか」から話は始まった。日本から南極まで移動するのに、観測船「しらせ」に乗って1ヶ月かかることや、昭和基地からは雪上車で移動をすることを聞いた。また、観測隊員が南極で何をしているのかを具体的に教えていただいた。南極では次のような調査がされているようだ。

- ・ 雪や空気のサンプリング
- ・ 雪の下にある氷を掘り出し、その氷に含まれる空気や炭素量から昔の地球環境を調べる
- ・ 30km上空のオゾンを測定し、オゾンがどのくらい無くなっているのかを確認する
- ・ オーロラ、ペンギン、コケの観測（昭和基地）
- ・ 地震の間隔、大陸移動がどの程度起こっているかの測定

話だけでなく、南極で着ていた服を見せていただいたり、スライド写真で、南極の雪面や昭和基地の様子、川村氏らの調査風景から、南極で見られる動物や美しいオーロラなども見せていただいた。写真の1枚に、空が赤色に染まりとても美しいものがあったが、実はフロンが化学反応をし、オゾンホールができる直前の様子だと聞いた時の衝撃は大きかった。

最後、昭和基地で出たゴミの山が写ったスライドを目の前に、「観測も大事だけど、必ずゴミや隊員の排泄物が出てしまう。これらの処理をどうするかが大きな問題」と問題提示されて、講演は終わった。

VI アンケート結果とその検証

環境学を1年間学び終えた生徒に対し、アンケートを実施した。環境学におけるアンケートは、授業を行う側が課題を見つけ出したり、展開の成否を判断する材料でもあるが、学んできた生徒が自らを振り返る、いわば自己の学習検証の意味合いが強い。本年は、特にその意味を深めるため、昨年までの「はい、ふつう、いいえ」の3段階の回答方式を、「はい、←、→、いいえ」の4段階に変更した。

「ふつう」をなくすことで、各自が肯定か否定かを判断する機会を与え、授業者側もよりはっきりと傾向を掴み取ることができた。また、環境学の中心をなすFWに関しては例年よりも丁寧に項目を作成してみた。記述方式で回答を求めた項目も、新たに「この一年で環境に対する行動面で変化したことがありましたか？」という項目を設け、知識から行動への変化を読み取ろうとした。以下にアンケートの項目と結果を示す。

1. 岩井川の調査について

はい ← → いいえ

①観察・実験やまとめに積極的に参加することができましたか？	23	67	22	1
②まとめの壁新聞には積極的に関わりましたか？	34	45	32	4
③川の調査をやったことで川や水について何か役立ちましたか？	6	31	57	20

2. フィールドワークについて

A. 班編成とテーマ決定

はい ← → いいえ

①希望テーマに基づいて、班のメンバーを決める方法はよかったですか？	39	44	20	12
②決定したテーマを選んで良かったですか？	42	46	16	10
③テーマを決定する際に、「目次づくり」は役立ちましたか？	22	44	22	21

B. フィールドワークの取り組み

はい ← → いいえ

①インターネットはよく利用しましたか？	88	20	7	0
②現場訪問は役立ちましたか？	53	35	9	16
③予め思っていた仮説と調査内容がずれたことはありませんでしたか？	23	48	34	11
④調査で生じた疑問を、班のメンバーに相談したことはありますか？	36	40	25	14

C. プレゼンテーション

はい ← → いいえ

①発表のため、プロットや絵コンテを作成しましたか？	30	39	11	25
②パワーポイント、エクセルなど情報ソフトを、発表に利用しましたか？	95	11	6	4
③当日の発表に積極的に関わりましたか？	55	35	15	8
④発表の準備をするなかで、調べなおすことはありましたか？	30	48	22	12
⑤他の生徒による投票による評価は、妥当なものでしたか？	32	51	26	7

D. レポート作成

はい ← → いいえ

①積極的にレポート作成に関わりましたか？	51	38	17	9
②レポートを作成する中で、テーマをさらに深く考えるようになりましたか？	30	40	34	12
③レポート作成する中で、データ再確認の必要性を感じましたか？	36	50	21	8
④班のメンバーと協力して作成できましたか？	39	35	32	10

3. 校内ゴミ調べについて

はい ← → いいえ

①積極的に調査できましたか？	48	35	26	2
②まとめの壁新聞には積極的に関わりましたか？	38	34	28	11
③調査したことでゴミについて意識できるようになりましたか？	15	51	32	15

4. 講演会について

はい ← → いいえ

①講演の内容は理解できましたか？	39	48	23	4
②講演は面白かったですか？	56	33	18	7

5. 講義について

はい ← → いいえ

①講義の内容は理解できましたか？	23	55	32	6
②講義の内容は面白かったですか？	22	41	41	12

6. 見学会（琵琶湖博物館）について

はい ← → いいえ

①積極的に見学することができましたか？	56	37	21	1
②博物館を見学してよかったと思いますか？	46	36	23	10

7. 環境学を終えて

はい ← → いいえ

①この一年で環境に対する考え方に变化したことがありましたか？	25	46	29	16
--------------------------------	----	----	----	----

②それは何ですか？具合的に書いてください。

- ・ 人間がいる環境問題は尽きないが、少しでも改善しようという気持ちがあれば、ある程度までは解決できる。だから、日常生活の仲のほんの些細なことでも、地球全体の問題になるということに気付いた。
- ・ ペットボトルにお茶を入れて持ち運ぶのは、あまりよくないことだと思った。
- ・ メディアの言う事は鵜呑みにしてはいけないのだと改めて思った。半分嘘だと思って受け止めなければならない。
- ・ 壁紙や接着剤のCMやニュースがあったら、知らないうちじーっと見るようになっていました。
- ・ 川や路上のゴミが、奈良もひどいなあと最近あらためて考えます。
- ・ 例えば道を歩いているとする。以前の私は自分の靴だけしか見ていなかった。しかし、現在の私は無意識の間にひっそりと咲く草花や散らばるゴミ、広がる空、放置された自転車を見て歩いている。これらを見る度に環境の事を考える。大きな変化、それは視野が広がったことではないだろうか。
- ・ 育毛剤について調べて、育毛剤は性的障壁を生むものが多く、お父さんにも育毛剤はやめてほしいなあと思いました。
- ・ みんなが努力さえすれば、環境は守られると思っていたが、政府の決定や大企業との対立など、難しいことが分かって、以前よりも環境保護の大変さがわかった。
- ・ 環境保護のためには、多少の犠牲も必要であるということ。
- ・ 外国の環境について調べて、僕の調べた国は環境への意識がとて高く、日本も見習うべきだと思った。
- ・ 冷蔵庫を見るだけで罪悪感がある。
- ・ ゴミ調査の壁新聞を見たら、ゴミがすごく多いことに気付きました。もう少しゴミを減らすことに努力しなければいけないと思いました。
- ・ もともと環境という概念には興味があり、また家庭でも実践してきた。しかし、3年の環境学をした事で、単に「こうすればいいと言われているから」ではなく、本当に良いのか悪いのか、自分の目で確認することができた。要するに「知っている」から「説明できる」までレベルが上がったといえる。
- ・ マイナスイオングッズを買ってもムダかなと思った。
- ・ 私が思っていた以上に地球の環境は悪くなっている。
- ・ 今まで考えていたことがそれなりに正しかったんだと確認したような授業だった。

③この一年で環境に対する行動面で変化したことがありましたか？

21

32

34

28

④それは何ですか？具体的に書いてください。

- ・ シックハウス防止策を我が家で実施。
- ・ 炭酸水の二酸化炭素が、環境に影響を与えていることを知って、最近あまり炭酸水を飲まなくなりました。
- ・ 環境の作文コンクールに応募しました。内容に、岩井川のFWのことを組み込んでみました。
- ・ 窓の換気を積極的にするようになった。
- ・ 意識を高めて分別するようにしている。塩化ビニルのものはたくさんあるけど、面倒くさくはらずがんばってます。

- ・ 友達がポイ捨てしていたら、拾って返すようにしている。
- ・ 車にあまり乗らないようにしようと思い、下校時はバスをやめました。
- ・ シャンプー・リンスは使いすぎると毛母細胞を殺してしまう事を知り、量を減らしています。
- ・ タバコを道に捨てる人を見ると、本人に聞こえるように文句を言う。
- ・ 紙の無駄使いが減った気がする。
- ・ 元々環境に対しては気をつけて行動していたので、大きな変化はありませんでした。
- ・ エコ製品を買うようになった。
- ・ エネルギー、水のムダ使いをやめた。
- ・ 買い物をする時に、包装を気にするようになりました。
- ・ ちょっと前にパソコンを買いかえることになった時、お店にいろいろ見について、省エネのやつとかあったけど、結局は機能で選んだ。心では思っているけど、実行するのはむずかしい。
- ・ コンビニでペットボトルを捨てる時にラベルは燃えるゴミへと分別している。
- ・ アステルパームの入ったジュースを飲まないようにした。
- ・ 思っただけであまり変化はない。
- ・ ペットボトルを水筒代わりに使うことはなくなった。

⑤班編成、PCの利用、AV機器の利用などについて

- ・ 同じテーマを希望する人が集まったので、みんなやる気があってとても良い班でした。
- ・ 班編成について、人数が多くてもそのままでもいいと思う。
- ・ 班編成は、好きなテーマで集まると、人数が違ったりしていろいろややこしいので、しっかりと人数を決めてほしいです。
- ・ パワーポイントやビデオは楽しく、人を注目させるのには効果的で、使用することによって発表が良くなると思いましたが、本番PCが動かなくなった場合のことをしっかり考えておかななくてはならないと実感しました。
- ・ PCに結構詳しくなりました。パワーポイントとか、今までに使ったことのないものを使いこなすようになったので、良かったと思います。
- ・ VTR編集が難しかった。けど、やっぱりおもしろかった。去年、VTRを作ったときは、一シーンずつ順番に撮るとかしかできなかったけど、今回、編集の仕方とか声の入れ方とか、新しいことがわかったから、来年の学園祭に繋がると思います。
- ・ インターネットは、資料を集められるが、情報がごちゃごちゃな時がある。
- ・ AV機器、PC共に本校の設備は充実していると思う。
- ・ 人数が多すぎたせいか、全体的に皆が班長さんに頼っている面が目立っていたと思う。
- ・ 全員がAV機器の使い方を知っておかないと、ぎりぎりになって慌てることになる。

⑥来年度以降の環境学について

- ・ 最初のテーマ選びが重要なので、来年環境学をする人は、ずっと調べたくなるようなテーマを選んでいってください。
- ・ 今回のテーマは“環境”とほとんど関わりがなかったので来年からはもっと“環境”を意識したテーマにしたほうがいいと思う。
- ・ タイムリーなテーマを、その度選んで欲しい。
- ・ 「猿沢池の亀」のように、今までにないような題材で環境と結びつけて調べてみてほしい。
- ・ 早いうちに構成を作らないと、後の方で大変です。まとめや考察をしっかり伝えることがボ

イントなので、計画表をきっちりと作っておきましょう。

- ・ 現場に足を運ぶのは大切ですよ。
- ・ ちょっとしたデータも最後まで取っておいた方がいいですよ。
- ・ 中間報告会をなくすか、もっと早くした方がいいと思った。
- ・ 1月に入ってすぐ発表は辛いと思う。
- ・ 来年の環境学の人には、パワーポイントだけではなく、いろんな手法を凝らした発表を期待しています。
- ・ 図書室に環境学役に役立つような本をもうちょっと増やしてほしいです。
- ・ 今までの資料は全て書庫から出して自由に調べることができたらと思う。
- ・ 班での行動が多かったけど、時々ゴミ調査など全員での授業もあって楽しかったので、来年もするといいと思います。
- ・ 講演会はすごくおもしろくて、またしてほしいと思いました。環境学には講演会が必要ですよ！
- ・ もっといろいろな人の講義が聞きたいです。
- ・ 大きなグループごとにテーマを決めて、それに対して賛成・反対にわかれてディベートあるいは、そのテーマに対して各班がプレゼンテーションを行った方がおもしろいと思う。
- ・ 川の調査はすずしい時にやった方がいいと思う。
- ・ 岩井川調査はやらなくていいと思う。
- ・ 班ごとのフィールドワークでは、サボる人もいるので、個人に課題を与えてもいいかと思う。

VII 今後の課題

アンケート結果が示すようにFWに関しては、いずれの項目に関しても概ね肯定的であり、大きく否定的な結果は表れていない。FWの基盤になる班編成やテーマ決定に関しても大半が肯定的であり、レポート作成に関しても概ね良好な結果が得られ、今後にも生かされることとなろう。インターネット利用の項目では、情報収集に、あるいはプレゼンテーション（パワーポイントが主流）にかなりな割合のものが利用していることがわかる。現代はインターネット、パソコン時代であり、本校では今年度より総合教育棟が新設され、コンピューター機器が充実しただけに利用度は必然的に高くなる。近年の課題である、有効なパソコンの利用という点については、プレゼンテーションでは概ね有効な利用であったが、レポートに関しては、収集した情報をそのまま掲載していることも少なくはなかった。そういった意味でもパソコンの利用方法に関して、特に収集した情報の使い方について、丁寧な指導が必要となる。

次に、講演会・見学会と本校教師が行った講義とを比較すると、内容の理解の傾向は似ているが、興味の間では講演会・見学会の方が積極的な肯定意見が目立つ。外部講師への期待は記述の結果からも出ており、これからの環境学展開の一つの方向性ともいえよう。また、ここ数年は様々な教科で環境問題を取り扱った内容がカリキュラムに取り入れられているが、環境学と連携されたものではない。今までに環境学を担当した教員もかなりな数に上っており、担当者4人以外の教師による講義を取り入れたり、他の教科との連携も検討する価値はある。

今年度は、前年度とほぼ同様の内容で年間カリキュラムを組んだ。担当者の半数が交代したが、2年続けての内容だっただけに、新しい担当者も含め比較的負担は軽かったように思う。環境学だけではなく世界学も同じではあるが、総合的学習を担当するにはかなりな負担感がある。年度末になれば

次年度の持ち手がなかなか調整つかない年もある。今年度から採用した先述の希望登録制は、多数の教科から15名ほどが登録し、一見環境学担当希望者が充実しているように思える。しかし、世界学への登録を兼ねている教員も複数であり、実際、次年度の担当を決める年度末には、自教科の担当が優先されたり、世界学の担当との兼ね合いなどから、調整に手間取った。教科の授業だけではなし得ない幅広いアプローチができ、内容論的にも、技術論的にも有効な手段である総合的学習を続けていくためにも、手を抜いて楽にするのではなく、内容もあり、なおかつ負担感の少ないカリキュラムを作成することも重要である。

<環境学>

2002.5

「京奈和自動車道」の奈良通過について考える

I. 国土交通省は、京都・奈良・和歌山を結ぶ総延長約 120 km に及ぶ高速道路（京奈和自動車道）建設を計画しており、京都府では城陽～木津区間がすでに開通しています。

<資料1>

しかし、世界遺産・平城宮跡を含む奈良市内では、ルート計画すらできていません。そこで国土交通省は、以下の2案を中心に調査を進めています。

<資料2>

① 平城宮跡の地下 50m をトンネルで通過させる。（文化財への影響が心配）

② 平城宮跡をさけて、地上を通過させる。（立ち退き問題、景観破壊などが心配）

「木簡学会」などの学会は、たとえ地下通過であろうと、地下水脈に影響がでるなら木簡はダメになってしまう、との理由から反対しています。

<資料3>

II. これに対し、奈良市民には以下のような意見があります。

- A. 奈良は道路事情が極めて悪いのだから、京奈和自動車道建設を優先すべきだ。多少の文化財への影響はしょうがない。
- B. 世界遺産の平城宮跡通過は避けるべきだが、道路事情が極めて悪いのだから、他のルートならかまわない。
- C. 文化財保存や景観保存を優先し、京奈和自動車道建設は、奈良市の中心部を迂回するルートも含めて慎重に検討すべきだ。
- D. 今時、高速道路建設など税金の無駄使いだ。奈良市には高速道路はいらない。奈良市（昔からの中心部）は、脱自動車都市をめざすべきだ。

III. どの意見を支持しますか。なぜですか？

→ 班で意見をまとめ、発表しなさい。

<班> 6人で構成する。司会係、発表係2名、板書係、質問係2名を選ぶ。

<司会係> 各自の意見を述べてもらい、話し合う。班としての意見をまとめる。まとまらない場合は、多数決で決める。

<板書係> 班の結論を3行以内で板書する。

<発表係> 話し合った内容を3分以内で紹介する。

<質問係> 発表を終えた班に対し、質問する。

1. pHとは

・・・水溶液の酸性やアルカリ性の程度を示す数値。水溶液中の水素イオン H^+ の濃度から算出できる。水素イオン濃度と水酸化物イオン OH^- の濃度にはある関係があり（積が 0.00000000000001 になる）、水素イオン濃度が水酸化物イオン濃度より大きいものを酸性の溶液とし、逆に水酸化物イオン濃度の大きいものをアルカリ性の溶液としている。

pH	液性	水素イオン濃度 (mol/l)	水酸化物イオンの濃度 (mol/l)
0	酸性 ↑ ↓	1	0.00000000000001
1		0.1	0.0000000000001
2		0.01	0.000000000001
3		0.001	0.00000000001
4		0.0001	0.0000000001
5		0.00001	0.000000001
6	弱	0.000001	0.0000001
7	中性	0.0000001	0.0000001
8	アルカリ性 ↑ ↓	0.00000001	0.000001
9		0.000000001	0.00001
10		0.0000000001	0.0001
11		0.00000000001	0.001
12		0.000000000001	0.01
13		0.0000000000001	0.1
14	弱	0.0000000000001	1

★ 次の水溶液のpHを調べてみよう。

- ・しょうゆ；
- ・酢；
- ・牛乳
- ・コーラ；
- ・せっけん水；
- ・オレンジジュース；
- ・りんごジュース；

2. 水のpH

・・・一般に、純粋な水は中性（pH=7）とされている。

1) 蒸留水

意見；
pH；
考察；

2) 水道水

意見；
pH；
考察；

水道法の規定；

3) 沸騰させた水道水

意見；
BTB溶液（酸性なら黄、中性なら緑、アルカリ性なら青）；
考察；

4) 二酸化窒素を溶かした蒸留水

意見；
pH；
考察；

NORWAYの達人

☆NORWAYってどんな国？

★北欧3ヶ国のひとつ (SWEDEN, DENMARK)

スカンディナヴィア半島の大西洋側にあり南北1,750kmの細長い国。ちなみに日本は2,000km。

北端の町ノルホップ (北緯72°) ~
南端の町サンズネス (北緯58°)

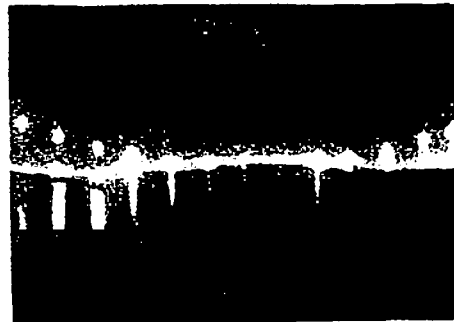
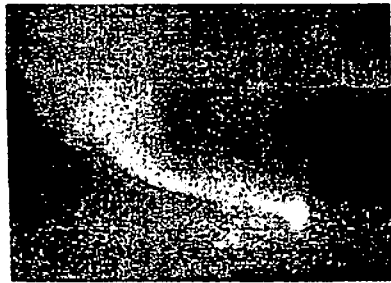


★フィヨルドの国：約一万年前の氷河期に氷河の流出により削り取られた地形に、解氷などによって海水が入りこんでできた複雑な地形がフィヨルド。特に南部、ニュージーランド南島、カナダ西岸、アラスカ、グリーンランドにも見られるよ。長いものはなんと200kmにも及ぶ。もっとも深いところでは深度1,300kmのところも。

★オーロラの国：国土の北半分が北極圏 (北緯66.33度) にあり、その大部分でオーロラ (下左写真) が見られる。

また、夏には白夜 (夕方のような薄明かりが真夜中も残る) やミッドナイトサン (転がる太陽：下右写真) が見られる。反対に真冬には日照時間が0 (ホーテナイト) のところもある。

★オーロラ：太陽風に乗って飛んできた太陽から放出されている荷電粒子が、地球の磁力により両極付近に吸い寄せられ、大気中の酸素や窒素の粒子と衝突し、発光して見られる。磁力の強い日で曇さなければ100%見られる。



★環境・福祉を考えている国：環境政策

①環境灯台制度=企業内に環境問題チームを発足させ、継続的に取り組ませるのがねらい、中小企業の努力を評価。

②環境関連法=容器税 (リサイクル率が悪ければ課税)、廃棄物対策、エネルギー政策など
※大企業に対しては汚染監視委員会が行政指導をする

☆NORWAYのリサイクルあれこれ

★リサイクルとは → 資源などの再利用
→ 使えるものはフルに活用しようという発想
例) ペットボトル → 再利用 → 別の商品 (服、プラスチック製品など) → ゴミ
→ 再使用 (リユース) → 長く使用 → ゴミ
★目的: ゴミになるのを遅らせる、減らす、大切に使う

★ノルウェーのペットボトル&ガラスビン

◎デポジット制= 価格の中に容器代が含まれていて、容器を返却すれば容器代は戻ってくるシステム。1クローネ (約15円) → リユース (10以上)

★その他のリサイクル品 (made from 再生紙)

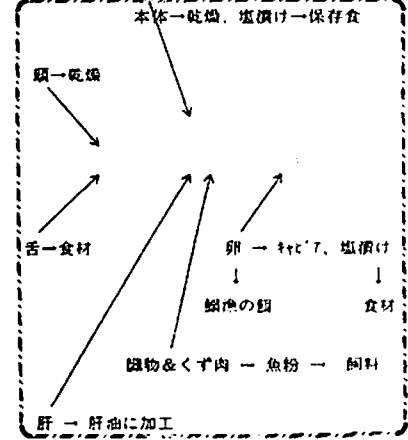
品名	N.Q.M.	日	1冊の重量 (g)
小学生用ノート	4	6.0	150~200
コピーフィルター	12	18.0	100~200
メモ用紙 (100シート)	8	12.0	100~150
トイレットペーパー	-	-	-

★鱈漁とロールプ

毎年2~4月にロールプ (船を横付けできる宿) に寝泊まりしながら漁をする。メキシコ湾流 (暖流) のお陰でロゼン諸島近海はフィッシュが大量発生し一大漁場となる。



★鱈の行方



環境学 「写真で語る」

～これであなたもカメラマン！～

★校内のお気に入り

★メタセコイヤ…セコイヤに似たすぎ科の落葉高木。化石としてだけ存在するものと思われていたが、第二次大戦後、中国でこれの一種が原生しているのが発見され、日本にも入り、「アケボノスギ」と名付けられた。

★風力発電

クリーンなエネルギーとして注目を浴びている。現在国内では、発電事業を中心に実験施設も含め 210 基を越す。しかし、風が常に吹く立地条件など何処にでも設置できるものではない。特に日本は風が常に吹く海岸線は国立や国定公園が多く、景観上の問題などもある。それ以外にも鳥衝突問題や騒音、航空法の塗色問題などもある。

★今回撮影の国産発電

◎草津市鳥丸半島（琵琶湖）「水生植物公園みずの森」内：1,500kw、「水生植物公園みずの森」の使用電力に利用、余電力を関西電力に売電。高さ 60m、ローター部直径 70 m、地上高 95m。
鳥丸半島周辺には我が国有数の 6.3ha の蓮の群生地やヨシ原もあるが、いずれも減少傾向にある。

◎京都府伊根町太鼓山：6 基の風車、一時間に 4,500kW、年間 850 万 kW の発電。伊根町全域と弥栄町合わせた 2,800 世帯の電気需要をまかなえる。高さ 50m、ローター部直径 50m、地上高 75m。

★朝焼けと夕焼け

朝焼けのときは天気は崩れる … 乾燥した空気が東へ抜けて湿った空気が接近
夕焼けの時は次の日も晴れ … 乾燥した空気が西に残っていて大気が安定している

★フィルター

トワイライトレッド = 夕暮れ（朝焼け）の空の赤味を強調
トワイライトブルー = 夕暮れ（朝焼け）の空の青味を強調

その他：レッドエンハンサー、ブルーエンハンサー、グリーンエンハンサーなど

★絞り優先とシャッタースピード優先

★絞りとは：入ってくる光の量の調整（人の目でいう虹彩の役目）と焦点距離（=ピント）が合う範囲を決めるもの。f 値が大きいというのは焦点距離が大きく、その分絞り環は小さく入ってくる光の量は少ない。

★シャッタースピードとは：シャッターを切る早さ。1/2000 秒 1/1000 秒 1/500 秒 1/250 秒 1/125 秒 1/60 秒 1/30 秒 1/15 秒 1/8 秒 1/4 秒 1/2 秒 1 秒 ∞（シャッターボタンを押している間開放している）がある。1/60 秒より低速は手ぶれするので三脚が必要。

★絞り優先：①絞り値を小さくする（絞り環が開く）と入光量が増えるので、速いシャッタースピードで撮影可能。その代わりにピントの合う距離が短くなる。手ぶれを防ぎたいとき。あるものにピントを合わせ、周りをぼかしたいときなど。

②絞り値を大きくする（絞り環が狭まる）と入光量は減るため低速のシャッタースピードになるが、ピントを広い範囲で合わせることができる。前景も背景もピントをしっかりと合わせたいとき。

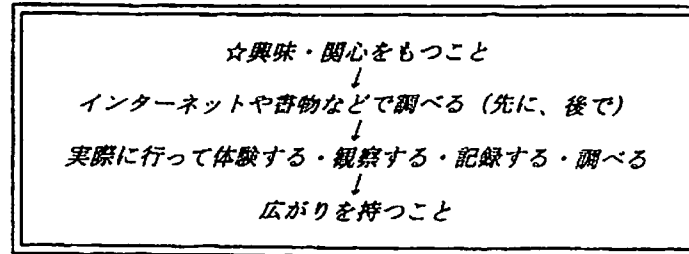
★シャッタースピード優先：

①動きのあるものを撮影したいときは高速のシャッタースピードにしたほうがいいが、絞りは開放に近い値となり、焦点距離が狭くなる。
②三脚などで固定してぶれを防ぎ、低速シャッターにすれば、絞り値を大きくすることができ、焦点距離を広くとることができる。夕方など光量が少なくなるときにも撮影可能。

★バルブ撮影：夜景などを撮影するときに使用する。カメラを三脚に固定し、リリースと呼ばれるコードを利用してシャッターを切る。ボタンを押している間はシャッターは開いたままになっている。

★雲の種類

気象観測では、雲を基本形によって巻雲、巻積雲、巻層雲、高積雲、高層雲、乱層雲、層積雲、層雲、積雲、積乱雲の十種に分類する。これは 1956 年に世界気象機関が発行した「国際雲図帳改訂版」を基準にしたもので、空に浮かぶ雲はすべてこの中の一つに分類される。



私の生活環境 ～エネルギーの利用～

1. エネルギーって何だ？～自然界に溢れるエネルギー～

2. 人間はどのようにエネルギーを利用してきたか？～エネルギー史をひもとく～

3. エネルギーは変換できる！？

4. 発電の原理をのぞいてみると？～発電所の仕組みをごく簡単に～

5. 3つの発電方法の特徴とは？～三大発電の長所と短所～

		発電量	コスト	環境
水力発電	長所	・調節できる	・原料代が無料	
	短所	・非常に小さい	・設置に莫大な出費	・設置時の環境破壊 (森林・河川) ・設置場所の制限
火力発電	長所	・大きい	・設置が手軽	
	短所	・調整できない	・原料費が大きい	・排気ガスによる大気汚染 ・原料の枯渇
原子力発電	長所	・非常に大きい	・総合的には一番安く発電できる	
	短所	・調整できない	・設置に出費 ・原料費がかかる	・事故が起こったときの影響 ・放射性廃棄物の処理

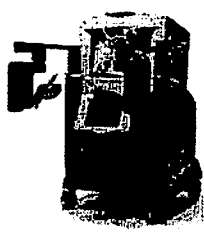

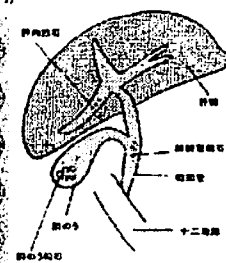
6. 新たに注目を集めている発電方法とは？～クリーンなエネルギーを求めて～

7. じゃあ環境ってな～んだ？

C-1班 テーマ Personal Computer	
班長 裏 遼太	副班長 和泉 悠利子 会計係 樫木 亨
メンバー 伝宝 有美 梶山 久貴	
* 私たちは Personal Computer について調べてきました。これから記すのは、発表内容の補足です。発表を聞きながら、参考にしてください。	
● 環境法	
<p><法律> グリーン購入法</p> <p>正式名称 (「国等による環境物品等の調達に関する法律」)</p> <p>目的 国等による環境物品等の調達の推進、情報提供その他の環境物品 (注1) 等への需要の転換を促進するために必要な事項を定め、環境への負荷の少ない持続的発展が可能な社会の構築を図る。</p> <p>(注1) 環境物品とは、次の基準を満たすもの事である。</p> <p>A. 再生プラスチックが40%以上使用されている。</p> <p>B. 間伐材などの木材が使用されていること。</p> <p>C. 古紙配合率が50%以上であること。</p>	<p>管轄 環境省</p> <p>対象 官公庁・地方自治体</p> <p>内容 官公庁や地方自治体が環境物品の購入時に関係してくる。</p>
<p><法律> 省エネ法</p> <p>正式名称 (「エネルギーの使用の合理化に関する法律」)</p> <p>目的 燃料資源の有効利用。</p> <p>管轄 経済産業省</p> <p>対象</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第一種エネルギー管理指定工場 (電力1,200万kwh以上) 政令指定工場であり、約3,500工場存在する。 ・第二種エネルギー管理指定工場 (電力600万kwh以上) 新規創設工場であり、約9,000工場存在する。 <p>措置 合理化の進捗が目標値に著しく達しない場合には、措置がとられる場合がある。その過程は次の通りである。</p> <p>合理化計画作成指示→勧告→公表→命令→罰則 (罰金) (注2)</p> <p>(注2) 罰則は内容に合わせて変わるが、最高でも100万円以下の罰金、または一年以下の懲役刑に処せられる。</p> <p>罰則の対象となる行為は、虚偽申告、業務停止命令違反、秘密の漏洩、規定違反である。</p>	
<p><協定> 国際エネルギースタンププログラム</p> <p>目的 省エネルギーを目指す。</p> <p>管轄 EPA・アメリカ環境保護庁</p> <p>対象 製造者</p> <p>内容 省エネ製品の基準を決める。</p> <p>適用範囲 日本と、アメリカの政府の合意で出来た取り決めだから、日米間でのみ有効である</p>	
<p><制度> PCグリーンラベル制度</p> <p>目的 パソコンのリサイクル</p> <p>管轄 JETA・社団法人電子情報技術産業協会</p> <p>対象 製造者、購入者</p> <p>内容 同協会で定めた基準での製造と、後処理。</p> <p>対象物品 パソコン本体、キーボード、CRTディスプレイ</p> <p>再利用率 2001年度で、75%。2005年度には、60%を目指す。</p>	

- Windows 95 とは
Windows 95; Microsoft が製造したパソコンの基本となるOS (注3)。画面上に表示されるウィンドウやアイコンをマウスで操作することで、複雑な処理を簡単にを行うことができるようになっています。
(注3) operating system の略語。パソコンなどのコンピュータを操作するために必要な機能をまとめたソフトウェア。パソコン本体や周辺機器の管理を行い、ユーザーがワープロなどのアプリケーションソフト (注4) を利用する際に、使いやすい環境を提供します。
(注4) application soft のこと。ワープロや表計算、通信などのような、パソコンを使って作業をするためのプログラム、ソフトウェア。OSの上で作業するソフトウェアはアプリケーション (応用) ソフトといいます。
- Internet とは
Internet; 複数のコンピューター-ネットワークを相互に接続して、全体として一つのネットワークとして機能するようにしたもの。アメリカ国防省の高等研究計画局の支援を受けたアルパネット (arpanet) から発展した地球規模のネットワーク。通信回線を介して、世界各地の個人や組織のコンピューターがつながっている。
- 生分解性プラスチック
今回、富士通が開発した自然型パソコンに採用されたプラスチックは、今から紹介するプラスチックと同じ物であると考えられる。
製品名 B10POL (バイオボール)
種別 微生物産生系
組成 β-ヒドロキシ酪酸 (3HB) + β-ヒドロキシ酪酸 (3HV) の共重合ポリエステル
主要原料 植物澱粉=グルコース (飼料用とうもろこし等) を栄養源に、水素細菌「アルカリゲネス・ユートロファス」が産生。
価格 1,400円~2,000円/kg

簡単に言うと、細菌がプラスチックを分解して水+二酸化炭素に分解する。
- 手術支援ロボット「ZEUS」
今回私達は東淀川にある、医誠会病院へ手術支援ロボットのZEUSを見に行きました。ZEUSは現在、大阪大学、東北大学、医誠会病院にしかありません。日本の病院では、この3病院だけが所有しています。日本での実例はまだ少ないので、欧米での実績を述べてみました。
海外での稼働台数: 米国20台、欧州10~12台、その他5~6台
海外での症例数: 約400例 (胸部300例以上、腹部約100例)

左が「ZEUS」、中央が「ZEUS」の操作免許、右が肝臓の中にある胆のうの復式図。
「ZEUS」を操作するにはアメリカでの研修が必要であり、操作技師は免許を取得しなければ「ZEUS」を操作することは出来ない。
胆のうの摘出手術は、「ZEUS」が最も得意とする手術で、従来の手術より早く手術後も切開部が術後に治る。胆のうの大きさは70立方cm位が、標準的な大きさといわれている。

以上が、発表の補足です。

D2 班		テーマ 世界から見た日本の環境																																																																																																																																
班長 天野雅之		副班長 松島由佳		会計係 柘田和晃																																																																																																																														
メンバー 松岡位典		山本真也		楠本直 平井知子																																																																																																																														
<p>この「世界から見た日本の環境」というテーマを選んだ理由は、日本でワールドカップが開催されるなど、世界と関わるが多くなってきているので、私達も世界へ目を向けていく必要があると感じたからです。</p> <p>～日本データ～</p> <ul style="list-style-type: none"> ●日本(日本国) <ul style="list-style-type: none"> 人口 : 約1億2千6百万人 面積 : 約37万8千(平方km) 人口密度: 約340人 ★1.寒が発達しているが、様々な公害も発生している。しかし世界有数の長寿国である。 ●イギリス(グレートブリテンおよび北部アイルランド連合王国) <ul style="list-style-type: none"> 人口 : 約6000万人 面積 : 約24万3千(平方km) 人口密度: 約245人 ★環境に気がつかっていて、CO2取引にも参加。産業革命を起こした国である。 ●ドイツ(ドイツ連邦共和国) <ul style="list-style-type: none"> 人口 : 約8200万人 面積 : 約35万7千(平方km) 人口密度: 約230人 ★一人一人の環境への意識が高く、ガラスリサイクルシステムも普及している。 <p>～資料(ドイツ)～</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">環境対策</th> <th rowspan="2">現在の税額</th> <th colspan="5">環境税額</th> </tr> <tr> <th>(第1段階) 1999/4/1</th> <th>(第2段階) 2000/1/1</th> <th>(第3段階) 2001/1/1</th> <th>(第4段階) 2002/1/1</th> <th>(第5段階) 2003/1/1</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>石油税</td> <td>88</td> <td>+6</td> <td>+6</td> <td>+6</td> <td>+3</td> <td>+3</td> </tr> <tr> <td>ガソリン</td> <td>ペニヒ/ℓ</td> <td>ペニヒ/ℓ</td> <td>ペニヒ/ℓ</td> <td>ペニヒ/ℓ</td> <td>セント/ℓ</td> <td>セント/ℓ</td> </tr> <tr> <td>石油税</td> <td>62</td> <td>+6</td> <td>+6</td> <td>+6</td> <td>+3</td> <td>+3</td> </tr> <tr> <td>ディーゼル</td> <td>ペニヒ/ℓ</td> <td>ペニヒ/ℓ</td> <td>ペニヒ/ℓ</td> <td>ペニヒ/ℓ</td> <td>セント/ℓ</td> <td>セント/ℓ</td> </tr> <tr> <td>電気料金増徴(増徴)</td> <td>8</td> <td>+4</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>ペニヒ/ℓ</td> <td>ペニヒ/ℓ</td> <td>ペニヒ/ℓ</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>天然ガス税</td> <td>0.36</td> <td>+0.32</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>ペニヒ/kWh</td> <td>ペニヒ/kWh</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>液化ガス税</td> <td>5</td> <td>+2.5</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>ペニヒ/kWh</td> <td>ペニヒ/kWh</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>電力税</td> <td>-</td> <td>+2</td> <td>0.5</td> <td>0.5</td> <td>0.26</td> <td>0.26</td> </tr> <tr> <td>(原税)</td> <td>ペニヒ/kWh</td> <td>ペニヒ/kWh</td> <td>ペニヒ/kWh</td> <td>セント/kWh</td> <td>セント/kWh</td> <td>セント/kWh</td> </tr> <tr> <td>自動車税</td> <td>-</td> <td>85ユーロ</td> <td>172ユーロ</td> <td>224ユーロ</td> <td>143ユーロ</td> <td>172ユーロ</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>5,100円</td> <td>1万円</td> <td>1.3万円</td> <td>1.7万円</td> <td>2万円</td> </tr> <tr> <td>年GDP増減(前GDP%)</td> <td>20.3%</td> <td>19.5%</td> <td>19.3%</td> <td>19.1%</td> <td>19.0%</td> <td>18.8%</td> </tr> <tr> <td>経路率(対前年比, %)</td> <td></td> <td>-0.8%</td> <td>-0.2%</td> <td>-0.2%</td> <td>-0.1%</td> <td>-0.2%</td> </tr> </tbody> </table>							環境対策	現在の税額	環境税額					(第1段階) 1999/4/1	(第2段階) 2000/1/1	(第3段階) 2001/1/1	(第4段階) 2002/1/1	(第5段階) 2003/1/1	石油税	88	+6	+6	+6	+3	+3	ガソリン	ペニヒ/ℓ	ペニヒ/ℓ	ペニヒ/ℓ	ペニヒ/ℓ	セント/ℓ	セント/ℓ	石油税	62	+6	+6	+6	+3	+3	ディーゼル	ペニヒ/ℓ	ペニヒ/ℓ	ペニヒ/ℓ	ペニヒ/ℓ	セント/ℓ	セント/ℓ	電気料金増徴(増徴)	8	+4	-	-	-	-	ペニヒ/ℓ	ペニヒ/ℓ	ペニヒ/ℓ	-	-	-	-	天然ガス税	0.36	+0.32	-	-	-	-	ペニヒ/kWh	ペニヒ/kWh	-	-	-	-	-	液化ガス税	5	+2.5	-	-	-	-	ペニヒ/kWh	ペニヒ/kWh	-	-	-	-	-	電力税	-	+2	0.5	0.5	0.26	0.26	(原税)	ペニヒ/kWh	ペニヒ/kWh	ペニヒ/kWh	セント/kWh	セント/kWh	セント/kWh	自動車税	-	85ユーロ	172ユーロ	224ユーロ	143ユーロ	172ユーロ			5,100円	1万円	1.3万円	1.7万円	2万円	年GDP増減(前GDP%)	20.3%	19.5%	19.3%	19.1%	19.0%	18.8%	経路率(対前年比, %)		-0.8%	-0.2%	-0.2%	-0.1%	-0.2%
環境対策	現在の税額	環境税額																																																																																																																																
		(第1段階) 1999/4/1	(第2段階) 2000/1/1	(第3段階) 2001/1/1	(第4段階) 2002/1/1	(第5段階) 2003/1/1																																																																																																																												
石油税	88	+6	+6	+6	+3	+3																																																																																																																												
ガソリン	ペニヒ/ℓ	ペニヒ/ℓ	ペニヒ/ℓ	ペニヒ/ℓ	セント/ℓ	セント/ℓ																																																																																																																												
石油税	62	+6	+6	+6	+3	+3																																																																																																																												
ディーゼル	ペニヒ/ℓ	ペニヒ/ℓ	ペニヒ/ℓ	ペニヒ/ℓ	セント/ℓ	セント/ℓ																																																																																																																												
電気料金増徴(増徴)	8	+4	-	-	-	-																																																																																																																												
ペニヒ/ℓ	ペニヒ/ℓ	ペニヒ/ℓ	-	-	-	-																																																																																																																												
天然ガス税	0.36	+0.32	-	-	-	-																																																																																																																												
ペニヒ/kWh	ペニヒ/kWh	-	-	-	-	-																																																																																																																												
液化ガス税	5	+2.5	-	-	-	-																																																																																																																												
ペニヒ/kWh	ペニヒ/kWh	-	-	-	-	-																																																																																																																												
電力税	-	+2	0.5	0.5	0.26	0.26																																																																																																																												
(原税)	ペニヒ/kWh	ペニヒ/kWh	ペニヒ/kWh	セント/kWh	セント/kWh	セント/kWh																																																																																																																												
自動車税	-	85ユーロ	172ユーロ	224ユーロ	143ユーロ	172ユーロ																																																																																																																												
		5,100円	1万円	1.3万円	1.7万円	2万円																																																																																																																												
年GDP増減(前GDP%)	20.3%	19.5%	19.3%	19.1%	19.0%	18.8%																																																																																																																												
経路率(対前年比, %)		-0.8%	-0.2%	-0.2%	-0.1%	-0.2%																																																																																																																												

環境税
一覧

(1ペニヒ = 1,666...円)

ソーラー発電: 総発電量

風力発電の伸び(単位:メガワット)

～アンケート結果～

Q1、高くてもエコ製品を買うべきだと思うか。
 Q2、実際にそうしているか。
 Q3、環境保護のために生活のレベルを下げるべきか。
 Q4、実際にそうできるか。
 Q5、環境保護のために高い税金をかけるのはいい事だと思うか。

本校の結果

Q	YES	多分	YES	多分	N O	N O
Q 1	17%	54%	21%	8%		
Q 2	6%	20%	40%	35%		
Q 3	17%	39%	31%	14%		
Q 4	9%	28%	53%	40%		
Q 5	7%	22%	41%	31%		

ドイツでの結果

Q	YES	多分	YES	多分	N O	N O
Q 1,2	10%	51%	29%	10%		
Q 3,4	8%	37%	36%	19%		
Q 5	9%	49%	33%	9%		

日本も「環境先進国」へ

2002年度 世界学実践報告

落葉典雄・鮫島京一・南 美佐江
横弥直浩・吉田 隆

I はじめに

世界学創設から4年目を迎え、試行錯誤してきた授業構成については、一定の基本的合意が形成されつつある。すなわち、I期については、参加型の授業と講義型の授業の融合によって生徒の問題意識形成に資する授業構成をし、II期においては、それぞれの問題意識を基にグループによる自主的な活動を支援するように授業構成するというものである。

今後、総合学習のカリキュラム評価から、世界学そのものの文節的接合を問題として再構築する動きが生来するまでは、2001年度に作成された年間計画を、各年度の生徒の状況に応じて、部分的に刷新・再構成を行いながら継続されていくものと考えている。その意味から言うと、2002年度の世界学は2001年度に作成された授業構成を基本的に継承して実施したものである。

II 2002年度世界学の概要

1 取り組みのねらい

- (1) 世界には多様な文化や価値観が存在することを理解するため、世界は「相互依存関係」によって成り立っていることを理解する。
- (2) 世界と自分との関わりの中で、問題を見つける・追究する・行動できる人間を育てる。ローカルからグローバルに物事を捉え、さらにグローバルからローカルに見つめ直し行動できることを目指している。

2 年間計画

2002年度の年間計画作成に当たっては、2001年度のユニット制を継承している。(詳細については、『研究紀要』第44集を参照のこと。)

学期	授業日	ユニット	授業内容
I期	4月16日	1	オリエンテーション、クラス分け、アンケート
	4月23日		プレフィールドワーク「奈良市内で世界を見つけよう」
	4月30日		FW発表会
	5月7日		討論会
	5月14日		バルンガ
	5月21日		貿易ゲーム
	5月28日		討論会
	6月11日		2
	6月18日	出店授業2	
	6月25日	出店授業3	
	7月2日	出店授業4	
	7月9日	出店授業5	
	9月10日	3	ニュースファイル作成
	9月17日		ニュースファイル発表会、レポート「国境を越える」
	10月1日	4	I期のまとめ、自己評価、ダイヤモンドランキング

Ⅱ期	10月22日	5	FW発表会、グループ分け
	10月29日		FWテーマ設定
	11月12日		FWテーマ設定検討会
	11月19日		FW（調査活動）
	11月26日		FW（調査検討）
	1月14日		FW（再調査）
	1月21日		FW（発表準備）
	1月28日		FW（発表準備）
	2月18日		FW（発表会）
	2月25日		6
	3月4日	まとめ・評価	

Ⅲ 出店授業について

1 2002年度出店授業一覧

担当者	教科	授業内容
落葉典雄	地歴科	フィリピンスタデーツアー
鮫島京一	公民科	ウチかソトか、それが問題である－日本の文化的特性を考える
南美佐江	英語科	Let's dance!－Danceで世界を感じてみよう
横弥直浩	数学科	数学で世界学？
吉田隆	国語科	在日外国人からみた日本

2 出店授業の具体例

2002年度の出店授業は、上記一覧表のとおり、5人の担当教員がそれぞれの専門分野や得意分野を開講する形の講義を行った。出店授業は2001年度から世界学に取り入れられた講義形態である。「フィリピンスタデーツアー」と「数学で世界学？」については、『研究紀要』第44集に詳述されているので、ここではそれ以外の2つの実践について紹介する。2002年度の出店授業の共通テーマは、「国境を越える」である。

(1) 「Let's dance!－Danceで世界を感じてみよう」

○ 授業目標

- ① 異文化交流に必要なものは言葉だけではないことに気づかせ、それ以上に大切なものは何かを考えさせる。
- ② 世界各地のダンスを通して異文化を体験させる。
- ③ 国境を越えたダンスの歴史をヒントに、異文化理解について考えさせる。

○ 授業の展開

① 表情だけで気持ちを表現/言葉だけで気持ちを表現

- ・5人ずつのグループで、円になって座る。
- ・ひとり1枚ずつ、台詞の書いた紙を配布。他の生徒には見せない。
- ・教師が状況設定を説明。
- ・右隣の生徒からの質問に、順番に「表情だけ」で与えられた台詞を表現。

例) 試験を終えて帰宅すると、家族が「今日のテストどうだった？」と尋ねる。それに対して：「バッチリや!」、「んー、まずまずかな。」、「ちょっと心配・・・」、「もう最悪や!」、「なんでそんなこと聞くの?ほっといて!」を表情だけで表現し伝える。

② 同じ台詞を、違う気持ちで表現

例) 「もう最悪や!」の表情で「んー、まずまずかな。」を表現する。

- ③ 「表情だけ」「言葉だけ」で、どれだけ気持ちが伝わったか、話し合う。
- ④ 身体で気持ちを表現
 - ・教師が①のグループの一人に台詞を与え、その生徒はグループのメンバーにジェスチャーで伝える。
 - 例)「いいにおい!どこかな?あつ、むこうでパーベキューしてる!」
- ⑤ どれだけ伝わったか。伝えられないのはどんなことか話し合う。
- ⑥ ダンスの原点は、気持ちをジェスチャーで表現する事である。
- ⑦ 国境を越えたダンスの歴史(講義)
 - ・ギリシャの神に捧げる踊りをルーツとする西洋の踊り
 - ・ヒンズーの神に捧げる踊りをルーツとする東洋の踊り
- ⑧ 踊ってみる(実技)
 - ・カタック(北インドの踊り):ヒンズー寺院での語り(カター)から発展したもの。北から進入・支配をした回教徒の王がヒンズーの踊りを認め重んじたため、ペルシャの影響を受けた形で今に残っている。
- ⑨ サンバ(ブラジルの踊り):独立に際し、国のアイデンティティーとなった踊り
- ⑩ 課題:「国境を越える」ために自分が今もっているもの、これから身につけたいものについて、考えをまとめる。

(2) 「在日外国人からみた日本」

○ 授業目標

- ① 在日外国人として日本に暮らしている人の話を聞いて、「国境を越える」ことによって経験する異文化体験を知る。
- ② 多様な価値観を共有するにはどのような対応が必要なのかを考える。

○ 授業のコンセプト

1999年、2000年度ともに講師を招いて外国の事情を聞く機会を持ってきたが、2001年度は年間計画に入れることができなかった。その反省から、在日外国人の講演会を何らかの形で開けないかと考え、出店授業の中に位置づけることにした。財団法人なら・シルクロード博記念国際交流財団と社団法人まちづくり国際交流センターの協力を得て、講演会が実現した。

講師は、徐全揚さん(中国)と萩原フミワキさん(インドネシア)である。徐さんは、全5回の出店授業の4回分を担当してもらい、萩原さんには残りの1回分を担当してもらった。萩原さんの講演会には、栗田栄さん(シャープ株式会社就職中にインドネシア駐在2年・まちづくりセンターボランティア)と西川みゆきさん(まちづくりセンター職員・国際関係担当)の二人の協力も得ることができた。

○ 授業展開

- ① 講演会を聞く(45分)。
- ② 質疑応答の時間を取る(30分)。
- ③ 感想をまとめる(20分)。

○ 講演の要旨

徐全揚さん(中国)の話

中国の地図をもとに中国についての基礎知識講義のあと、徐さんの生育歴が語られ、日本

と中国の歴史認識の違いは教育によるものであると指摘。反日感情には世代差が歴然としていて、若者層には日本に対する親和感がある。

次に、日本に来て感じたこととして、日本人の対人関係のあり方が希薄であることや、自己主張をしない日本人の価値観からくる中国人留学生の躓きなどが挙げられた。

さらに、日本に来て不思議に思うこととして、宗教の問題や家族関係のあり方などが指摘された。また、花粉症など体調の変化はストレスから発生しているのではないかということ、中国と日本を行き来する自分の体験から話された。

萩原フミワキさん（インドネシア）の話

インドネシアと日本の気候や文化の違いから、宗教に対する捉え方の違いに疑問が投げかけられた。また、日本へのあこがれから来日してみて感じるのは、人間関係が疎遠であることや豊かさを感じられない日本での生活実感について話された。

インドネシアに駐在されていた栗田さんからは、インドネシアの魅力について「混沌の中で許される気楽さと多様性の中の統一」という観点から話された。

IV フィールドワークについて

(1) FW一覧

組	テーマ	FW先	
い組	墓	神戸モスク／近隣の寺院と教会	
	音楽国境を越える	ユニセフ	
	フェアトレード	フェアトレードショップ・サマサマ／ナタラージャ	
	映画「字幕」	専門学校／字幕翻訳者	
	世界の都市	奈良市役所	
	ゴーヤチャンプルの旅	沖縄料理店	
	現代の食	マクドナルド／モスバーガー	
	国のイメージ	今井町まちづくりセンター	
ろ組	鶏と世界	大和肉鶏協同組合	
	金魚	郡山金魚資料館／大和郡山市役所／郡山城ホール	
	世界の刑務所	奈良少年刑務所	
	チュニジアがやってきた	橿原ロイヤルホテル	
	日本酒と世界の酒・料理	春鹿酒造	
	赤膚焼	赤膚山元窯／赤膚焼窯元楽斎	
	は組	大豆	
	教育	留学生／ALT／教科書会社（光村書籍他）／附小	
	ライフ・スタイル	街頭インタビュー／留学生	
	あいさつ		ネットワークいこま日本語の会／留学生
			奈良国際研修館／ならファミリー&フレンド
	建築	春日大社／東大寺／興福寺／奈良国立文化財研究所	
	麺	RAHOTSU インタビュー／三輪そうめん工場	
	環境	大使館アンケート（中国、フランス、ドイツ等）	
	アニメ	奈良女子大／奈良教育大学留学生	
に組	昔話（鬼）	音声館／奈良町物語館	
	昔話の生い立ち	図書館／本校教員	
	割り箸	下市町上北製箸所	

	茶と陶器の関係	お茶販売店／赤膚焼販売店
	異文化交流（奈良漬け）	東大寺周辺／森奈良漬け店
ほ組	アイメイク	カネボウ／資生堂／ノエビア／ならファミリー&フレンド
	ミッキー	極楽坊幼稚園／奈良女子学・天ヶ瀬正博先生
	外来魚	立教大学・濁川孝志先生ホームページ／琵琶湖
	金魚	奈良公園周辺アンケート
	車	ラビット車取扱専門店
	発酵食品	フードショップ中村屋／いそかわ／馬の目／小麦粉 Bistort Le CLAIR／チャイニーズキッチン

(2) FW発表会について

2002年度のFW発表会は、年間計画（Ⅱ－2）にあるとおり2回実施している。例年は、1グループの発表を20分程度とし、各担当者ごとの発表会を行っているが、今回は、アフガニスタンから来日された女性教員の方に発表会を参観してもらう機会を設けることができたので、2回発表会を開くことになった。そこで、2/18の発表会は例年どおり各担当者ごとに行い、2/25の発表会はアフガニスタンの方にも理解してもらえるグループの発表を2グループ抜擢して、全体で共有する形を取った。全体での発表を行ったのは、「い組・フェアトレード」と「は組・あいさつ」の2グループであった。

「フェアトレード」の発表について簡単に述べると、フェアトレードとは、支援したい国で作られる製品を日本の適正価格で買い取り、差額を国際支援費として利用する仕組みのことである。支援目的ではあるが、ビジネスなので希望の品を継続的に注文でき、金銭的援助だけでなく、仕事を通して自立の意志を持ってもらう狙いがある。アフガニスタン研修員の方からも積極的に支持する発言があった。最終的に、フェアトレードの発表は本校食堂に商品を並べて販売することになった。

「あいさつ」の発表では、7カ国の人々にインタビューした結果をもとに、日本人の傾向としてアイコンタクトとボディタッチは少なく、遠まわしな表現になりがちなのが報告された。この発表を聞いていたアフガニスタン研修員の方から、現地のあいさつの仕方を実地に教えてもらうことになり、国によって人の関係も多様で異なることを生徒たちは体験した。

V 評価について

世界学の評価について概観しておくとして、1989年に始まった奈良学、1990年に始まった環境学の評価方法を継承する形で、通年の評価をABCの3段階で行ってきた。世界学創設3年目に生徒のアンケート調査をもとにして、各期ごとの4段階評価に改めた。その経緯については、2002年度研究開発報告書に詳述されているので参照されたい。

2002年度の評価方法は、2001年度の評価方法を継承している。ここでは、2002年度の評価方法について具体的に記述しておく。

(1) I期の評価について

I期の評価は、出店授業のレポート・ニュースファイル・レポート「国境を越える」・自己評価票の4点の提出物で行った。また、生徒への通知表について、以下のポイントを担当者で合意して、授業で生徒に連絡した。

① 授業の目標を確認し、評価の観点を知らせる

* 「人の移動」をテーマとして、仕事のため、観光旅行のため、難民となったため、国境を越

えることになり、発生したさまざまな問題を捉える。その時の観点は以下の4項目である。

- ・「世界」について、興味・関心を持ち、知識を拡げようとする
- ・「世界」について、問題意識を持ち、それについて調べる
- ・「世界」について、いろんな意見を総合し、自分の意見を持つ
- ・「世界」について、自分の意見を基に行動に移す態度を持つ

② 評価は、4段階（A B C D）で行う

* 4段階にした理由は、3段階だとBの幅が広すぎて、努力している度合いを明らかにできないからである。

③ 評価基準について知らせる

* 4段階の捉え方として以下のことを生徒に周知した。

A…大変頑張っている。よく調べ、人の意見も聞きながら、自分の主張もしっかりとしている。

B…頑張っている。自分の意見は持っている。

C…もう少し頑張っただけ。 「世界」に興味を示しつつあるが、自分からいろんな問題意識を持ってほしい。

D…もっと頑張っただけ。 提出物が出ない、授業中は寝ているなど、「世界」にももう少し興味を持つべきである。

④ 自分の評価を確認し、不満、不明、説明の必要な者は、担当教員に申し出る

(2) FWの評価について

FWについての評価は、FWのテーマに向かって活動したグループの評価と、そのグループ内の個人の評価の両面からする必要がある。つまりグループとしては明確な課題に向かって成果が見えるくらい頑張った生徒もいるが、そのグループの中にはあまり活動をしない生徒もいる。グループ全体としての評価とそれに取り組む個人の評価は別に見る必要がある。

グループをひとまとめに評価することはできるが、そのテーマに取り組む個人の活動については、メンバーでしか見えないところもある。そこでFWの評価を次のようにした。

① 第一段階（個々の生徒が、グループの発表を評価する：絶対評価・「評価シート・その1」）

ア 他の班の発表をきいて、次の各項目について、それぞれA～Dの4段階で評価する。

(a) 調査に対する評価

(b) 発表に対する評価

(c) 考察に対する評価

* その際、A～D評価の配分はなく、絶対評価とする。

イ 3つの項目(a)～(c)には細目（評価の視点）を設けている。評価は、細目ごとにしてもよいし、3つの項目ごとにしてもよいことにする。

ただ、必要なのは3つの項目(a)～(c)についてA～Dの4段階評価をすることにある。

② 第二段階（班として、グループの発表を評価する：相対評価・「評価シート・その2」）

ウ 班で話し合いをし、3つの項目(a)～(c)ごとにA～Dの4段階評価をする。

エ そのとき、A～Dの4段階評価は相対評価とし、次のように決める。

【クラスが4班のとき】

- ・ 自班以外は3班あるので、A, B, C, Dのどれか1つをつける。
- ・ ただしA～Dのどれか1つを省くことになる。

【クラスが5班のとき】

- ・ 自班以外は4班あるので、A、B、C、Dのどれか1つをつける。

【クラスが6班のとき】

- ・ 自班以外は5班あるので、A、B、C、Dのどれか1つをつける。
- ・ ただしA～Dのどれか1つが重複することになる。

【クラスが7班のとき】

- ・ 自班以外は6班あるので、A、B、C、Dのどれか1つをつける。
- ・ ただしA～Dのどれか2つが重複することになる。

③ 第三段階（グループの評価を点数化する・「評価シート・その3」）

各班に他の班からなされた評価（「評価シート・その2」）を渡し、また教師が評価したものも渡し、自らの班の評価について話し合う。

その後、A～Dの点数について告げる。

【クラスが4班のとき】

A：8点、B：7点、C：6点、D：4点

【クラスが5班のとき】

A：7点、B：6点、C：5点、D：3点

【クラスが6班のとき】

A：6点、B：5点、C：4点、D：3点

【クラスが7班のとき】

A：5点、B：4点、C：3点、D：2点

④ 第四段階（個人点をグループ内で協議する）

グループの中で、（グループの点数）×（メンバー人数）＝（持ち点）を、自由に配分する。リーダーがメンバーの意向をふまえつつ、配分する。このとき、グループ内で各個人の活動を話し合うことになり、お互いが活動を評価することになる。

(3) 学年末の評価について

Ⅱ期の評価は、FWの個人点・自己評価票・レポート（V資料参照）の3点にて行った。その上で、Ⅰ期とⅡ期の総合評価を行って、通年の評価を出した。

VI 今後の課題と展望

2001年度の世界学から「文節的接合」という概念に基づいて、カリキュラムの構造化（ユニット制の導入）・評価基準の明確化・「出店授業」の導入などを取り入れた。2002年度もほぼ前年度の実践を継承してきたわけだが、新カリキュラムのもとになる学習指導要領に対する学力低下批判が起り、総合的な学習の時間が今後どのような方向性を持つのかを注目していかなければならない。

ただし、本校では10年以上の実践を行ってきた経験がある。この実績をもとに総合学習が生徒にもたらした教育的効果について明らかにし、大学附属学校として研究的使命を果たすときであると考えらる。

2002年度からはじまった「総合奈良（1・2年）」に加え、1999年度に改変された「環境学（3年）」「世界学（4年）」によって培われた「学力」と、教科学習によって培われた「学力」は、どのようにリンクし、どのような違いがあるのかを提言していかなければならない。

現段階で少なくとも言えることは、生徒は「学び方」を身につけて調査や分析・考察・発表の力を

つけてきたことである。それとともに、総合学習を担当してきた教員相互の研鑽によって、教科の枠組みを超えて教員間で他教科の実状が共有されてきたことは大きな成果と言えるであろう。

特に、「世界学」の担当者間で評価についての研修が深まり、その議論の中から、自然科学的なアプローチと人文社会科学的なアプローチの二つのパラダイムが存在し、それぞれのパラダイムによって教科の特性が決定されていることの共通認識が生まれてきた。この共通認識が「文節的接合」という概念と結びつくとき、新しい教育展望が開かれると確信している。

今後の課題は、「世界学」の共通理解を学校全体の認識に広げ、他の総合学習や教科学習に敷衍していくことである。

Ⅶ 資料

生徒作成（レポート）

タイトル：文化と移動

キーワード：変動する見方

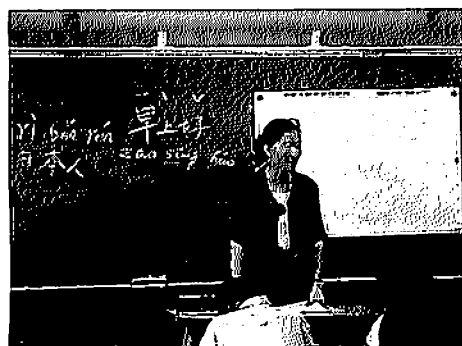
結論から言うと、人や物が移動するということは、価値観の変動だと思う。例を挙げると、AがBにおもしろいと思ったものを送ったとき、受け取ったBはそれについておもしろいと思うかどうかはBの価値観によってすべて変わってしまうということである。人の移動についても同様の感覚ですべて示すことができるはずである。文化についても然りで、実際、今までをみても、まったく形態の異なる文化が存在していることをみても明らかである。

つまり、人や物の移動により、個々の世界に新しい情報が入りし、その世界の文化が長所を取り入れ、短所を解消しながら形成され、価値観が様々な方向へ進化していく。

人や物が移動することにより、個々の世界の文化や価値観が形成され、次の人や物の移動をそれが引き起こしていく。これがすべての世界において唯一普遍の動きだと思う。

人や物が移動するということは、価値観の変動、それに伴う文化の形成を引き起こすことだと思う。

出店授業風景



評価資料 1

【 組】[番号：] [名前：] 「世界学」 2003.10.01

「世界学」 自己評価票

「世界学」の授業もⅠ期の最後となりました。
世界学の授業を振り返り、今あなた自身を自己評価しましょう。
ただし、これは反省文を書くものではありません。

自己評価をA, B, C, D (Aが良い方) で表すと・・・

自己評価を上の方の□のようにした理由を200字程度で説明しなさい。

→

200字

評価資料 2

世界学FW発表評価シート（その1・個人用）

（ ）組（ ）班 氏名（ ）

相互評価集計

発表した班（ ）班

項目	評価の観点	A～Dをつける	A～Dをつける
(a)調査について	問題意識やテーマ設定がしっかりしている。		
	テーマに対するFWは適切か？		
	調査活動はじゅうぶん行われていたか？		
(b)発表について	資料は適切かつ整理されていたか？		
	内容がよく伝わったか？		
	班のメンバーの分担と協力はできていたか？		
(c)考察について	考察がしっかりしているか？ (調べたことの羅列ではないか、など)		

○報告についての主なコメント

相互評価集計

発表した班（ ）班

項目	評価の観点	A～Dをつける	A～Dをつける
(a)調査について	問題意識やテーマ設定がしっかりしている。		
	テーマに対するFWは適切か？		
	調査活動はじゅうぶん行われていたか？		
(b)発表について	資料は適切かつ整理されていたか？		
	内容がよく伝わったか？		
	班のメンバーの分担と協力はできていたか？		
(c)考察について	考察がしっかりしているか？ (調べたことの羅列ではないか、など)		

○報告についての主なコメント

評価資料3

世界学FW報告評価シート（その2・グループ用）

（ ）組（ ）班 メンバー：

相互評価集計

発表した班（ ）

項目	評価の観点	メモ欄	A~Dをつける
(a)調査について	問題意識・テーマ設定がしっかりしているか？	A	
		B	
		C	
		D	
	問題意識やテーマに対するFWは適切か？	A	
		B	
		C	
		D	
	調査活動はじゅうぶん行われていたか？	A	
		B	
		C	
		D	
(b)発表について	資料は適切かつ整理されていたか？	A	
		B	
		C	
		D	
	内容がよく伝わったか？	A	
		B	
		C	
		D	
	班のメンバーの分担と協力はできていたか？	A	
		B	
		C	
		D	
(c)考察について	考察がしっかりしているか？ (調べたことの羅列ではないか、など)	A	
		B	
		C	
		D	

○評価を下すにあたって考えたこと・話し合ったこと

評価資料 4

世界学 FW 発表評価シート (その3・集計表)

○各班から下された自らの班の発表に対する評価を記入しよう。

自分の班	評価項目	1班	2班	3班	4班	5班	6班	教師	項目の計	総計
班	(a)調査について(他の班による評価)									
	点数									
	(b)発表について(他の班による評価)									
	点数									
	(c)考察について(他の班による評価)									
	点数									

○各班から寄せられた評価やコメントについてどう考えるか？

○下の表に、自分の班のメンバーの名前を書こう。

名前	個人点	個人点についてのコメント

Global Classroom 2003 in Shetland 報告

南 美佐江・平 田 健 治

0. これまでの経緯

0.1. 概要

1997年の第1回グローバル・クラスルーム（以下GC）以来、毎年、パートナー・スクールがホスト校となりフォーラムを開催してきた。このカンファランスの特徴は、単に、狭義の文化交流に止まらず、地球規模の問題を高校生が議論し、それを解決していくために提言をまとめること、期間中だけでなく、カンファランスが開かれる1年前から各学校でそのテーマについて調査し、議論を深めるなど、恒常的な交流を可能にしていること、スチューデント・コーディネーターなど、生徒自身が積極的に運営にかかわり、生徒主体の交流であること、などが挙げられる。

GC期間中は、各校の高校生が、事前に準備し討論してきたことを発表したり、分科会にわかれて議論してテーマを深めあつたりするほか、体験学習やスポーツ、キャンプなどを通して、親善と交流を拓げる。また、それぞれの文化を音楽や絵画などによって紹介しあつて、異文化への理解と寛容の精神や態度を育てることが期待されている。

これまでのテーマは以下の通りである。

年 度	開催国	テーマ
1997年	スコットランド	環境、教育、雇用、社会や個人が抱える問題
1998年	スウェーデン	民主主義、地域の発展、平等、環境
1999年	南アフリカ	偏見、若者の失業、人権文化
2000年	日本	伝統とテクノロジー、人間関係、教育
2001年	ドイツ	異文化共生、人類の脅威、芸術科目の重要性
2002年	チェコ	健康、メディア、ジェンダー

0.2. Global Classroom 2nd round に向けて

一昨年、チェコのズリンで開かれたGCで当初の参加校が一回りしたことになる。2002年の1月頃から、GC 2nd round のあり方や運営方法が、各学校やコーディネーターの間で活発に議論されてきた。2002年チェコで開かれたGCで、これまでの実績を評価し、これからもグローバル・クラスルーム・パートナーシップ（以下GCP）を継続・発展させていくことが合意された。

さらに、2002年11月、スウェーデンのオンゲでコーディネーター会議が開かれ、その場で、基本的に従来の枠組みを踏襲すること、1st round と同じ順番でそれぞれのパートナー・スクールがGCを開催していくことが合意された。

今回のカンファランスの特徴として、GC公式ウェブページが改めて立ち上がり、ウェブ上で事前にディスカッションや情報交換がされたこと、従来のプレゼンテーション→ディスカッションの繰り返しではなく、参加者全体が参加して意見を交換するフォーラム形式が導入されたことなどがあげられよう。

1. 英語授業における取り組み

例年通り、4、5年の英語授業はGCと関連付け、授業での実践がGCでの活動にそのまま生かせるように配慮した。例年GCで取り上げられるトピックについての知識を広げると共に、ディスカッション、ディベートの機会を多く持った。

年間シラバス表挿入

		Themes	Topics	Activities	
2002年度	I期 前半	Friends and Family	Personality Traits	Quiz/性格クイズのあとペアでの会話練習 Discussion/personality profileを見て	
			Time for a Change	Listening/自分を変えた出来事について Writing/自分のいいところ、悪いところ	
			Different Families	Listening/様々な家庭 Debate/18歳で家を出るべきである	
			Family Rules	Writing/自分の家庭のルール	
			Upside-Down Families	Reading/親と子の関係について考える Discussion/良い親とは？	
	I期 後半	Education and Learning	Our School vs. Other Schools	Reading/Listening/アメリカ、オーストラリアの学校 Writing/自分たちの教育環境 Discussion/LSメンバーを迎えて教育比較	
			How to Improve Education	Discussion/日本の教育改善 Reading/Discussion/4人の意見への賛否 Discussion/教科以外に必要なもの Reading/学校週5日制 Writing/教育への提言	
			Test Anxiety	[教育実習生による授業]	
			Learning Strategy	Writing/学習方法についてアドバイス Listening/学習方法と問題点	
			Learning Alternatives	Reading/Home Schooling Debate/home schoolingの是非	
			Health	My Best Time of Day	Reading/4人の意見を読んで、自分を振り返る Reading/Discussion/情報をもとに、学習計画を立てる
	II期 前半	Interpersonal Communication	Managing Stress	Listening/Role Play/ストレス解消法 Writing/健康法	
			Insomnia	Reading/睡眠法	
			Conversational Styles	Reading/Discussion/良い話者、良くない話者 Writing/文化による違い	
		II期 後半	Values	Small Talk	Discussion/スムーズな会話の方法 Listening/様々なsmall talk
				Personal Information	Role Play/個人的なニュースに対応 Reading/より良い話者になるために
				Fond Memories & Regrets	Writing/私のvalues Reading/Listening/様々な人の持つvalues
				Personal Values	Listening/Writing/友人
2003年度	I期 前半	Crimes and Laws	Values in Relationship	Listening/Discussion/結婚	
			Family Values	Listening/Writing/家庭	
			Global Values	Reading/Discussion/環境問題	
			Crimes and Criminals	Vocabulary Building Reading/銃規制	
			Gun Control	Discussion/"Guns and You" "Guns and Films" "Guns and Kids"	
	I期 後半	Life and Death	Guilty or Not Guilty	Listening/Debate/ある裁判を巡って	
			The Criminal Court System	Rapid Reading/刑事裁判の流れを図式化してみる	
		Life Imprisonment or Death Penalty	Data Reading/Debate/死刑制度は廃止すべきか		

2. GC2003 カンファランス

2.1. 日程

6月7日(土)	2130	アバディーン到着、この日はアバディーン泊
6月8日(日)	1300	集合、乗船
	1515	歓迎レセプション
6月9日(月)	0700	ラーウィック到着
	0800	船上にて朝食
	0900	開会式(アンダーソン高校)
	1100	ラーウィック散策
	1330	ラーニングスクール4プレゼンテーション
	2230	「ノローナ」号にてベルゲン(ノルウェイ)へ
6月10日(火)	900-1100	フィヨルド見学
	1200-1430	ベルゲン散策
	1500	出航
6月11日(水)	0100	ラーウィック到着
	1130	フォーラム: Globalization プレゼンテーション
	1245	昼食
	1330	ディスカッション
6月12日(木)	0900	ディスカッション: Crime and Punishment
	1400	スポーツ交流
6月13日(金)	0900	アイランド・アドベンチャー Fair Isle/ Foula/ Papa Stour/ Skerries/ Fetlar/ Unst/ Yell/ Whalsay
6月14日(土)		アイランド・アドベンチャー
		交流行事
6月15日(日)		シェットランド散策
6月16日(月)	0930	フォーラム: Values and Citizenship
	1730	ダンスと音楽
6月17日(火)	0900	アイランドアドベンチャービデオ鑑賞
	1900	アバディーンに向けて出向

アイスブレイカーキャンプの代替として、ベルゲンへの船旅が企画された。快適な環境で、参加者同士が互いに知り合うよい機会となったが、ホスト校にとっては費用的にかなりの負担になったのではないかと考えられる。

2.2. テーマ

GC2003のテーマは以下の3つ。

- ① グローバリゼーション
- ② 価値観
- ③ 犯罪と暴力

GC2ラウンド目の第一回主催国の決定が遅れたため、テーマも例年よりも半年遅れ(11月末)の決定となった。しかし、4年次の当初から授業で扱ってきた様々なテーマと関連が多く、参加生徒の負担にはならなかったようである。

2.2.1. グローバリゼーション

① 参加生徒の取り組み

一言で「グローバリゼーション」と言っても意味の広すぎる言葉なので、「日本が世界に向けて行っていること」に焦点を当て、11の項目(JICA、NGO、ODA、企業の取り組み、留学、平和、医療、等)について発表した。データを多く集め、パワーポイントでグラフや写真を見せながらの発表で、世界における日本の位置づけを表現するように努力した。

② 当日

地元のカレッジのホールにて。各校からのプレゼンはグローバリゼーションの影響を各国それぞれの視点からとらえたもので、興味深かった。そのあと、AHSのヘイ氏が議長となり、全体での討議となった。「将来、権力を握るのは？」との問いかけに、若者たちから力強い意見が聞けたのは頼もしく感じたが、討議の時間が短く、まとまったディスカッションにならなかったのは残念であった。

2.2.2. 価値観

① 参加生徒の取り組み

このテーマでは、GC2003の新しい企画として、ウェブページを使つてのディスカッションが始まった。様々な価値観についての活発な議論のやりとりがあつた後、カンファランスでは次の5つのトピックについての発表、討論に絞られることとなった。

- 1) 市民としての積極的活動
- 2) 野心 vs. 謙虚さ
- 3) 家族・地域社会の精神
- 4) 伝統
- 5) 受容・許容・平等

メンバーは2人一組になって、各トピックについてリサーチを行い、ウェブ上でのディスカッションにも積極的に参加した。また、以上5つの観点を織り込んだ寸劇を準備し、現代日本の価値観を表現しようとした。

② 当日

このテーマの発表形態については、主催校からの連絡が二転三転し、結局シェットランドに着いてからも日本グループで集まって準備をせねばならず、前日になってようやく仕上げる事ができた。用意してきた寸劇も発表する時間を与えられず、日本の生徒たちには不満が残った。

ウェブマスターの2名(GCのOB)からe-discussionの経過報告のあと、上記の5つのトピ

ックについて、各校の代表から短いスピーチ。スコットランド教育省のジョンストン氏の議長で全体でのディスカッションが行われた。時間が足りず議論がし尽くせなかったところもあるが、ジョンストン氏の巧みな議長ぶりで出席者の満足するディスカッションになった。このテーマを来年の会議に持ち越すこと、各校でまとめた資料で今回発表し尽くせなかったものは、ウェブマスターがとりまとめ公表すること、が決まった。

2.2.3. 犯罪と暴力

① 参加生徒の取り組み

日本の高校生を取り巻く様々な事件についてリサーチし、本校の発表を「出会い系サイト犯罪」に決定した。発表はニュース番組仕立ての寸劇。本校生徒対象のアンケートを実施したり、携帯電話の会社へインタビューに出向いたりして情報を集め、今の日本特有の現象とも言える「出会い系サイト」を紹介し、問題の解決策にも言及した。

② 当日

このテーマは、従来通りのプレゼン→ディスカッションの形式で進められた。寸劇やビデオで、各国における犯罪、裁判、処罰の様子が示され、問題点や解決策が提示された。その後、小グループに分かれてのディスカッション。日本の最近の事件や死刑制度にも関心が寄せられた。時間が短く、参加者が議論し尽くせなかったのは残念だった。

3. グローバル・クラスルーム参加者アンケート（抜粋）

3.1. フォーラムについて

A. Globalization

① プレゼンテーション、ディスカッションの準備で工夫したこと、うまくいったこと、苦労したこと

- ・ 他の国に日本の現状を知ってもらいたかった。とにかく金持ちの国だと思われていたり、人的支援（ボランティアなど）をしない等と思われているが、実際は違っていたり、実行が困難であることを知ってもらいたかった。
- ・ なるべく視覚に訴えるようにした。データを多く取り入れた。ディスカッションは、自分の意見をまとめるように努めた。プレゼンは最終的には完成状態に持っていきよかったです。
- ・ パワーポイントを使ってグラフや写真を見せながら発表することで、よりよく伝わった。
- ・ ディスカッションの練習では、当日質問されそうなことを中心にしたが、日常会話とは違って、自分の言いたいことを伝えるのに苦労した。
- ・ 11の内容を示したことで世界の中の日本の位置づけをはっきり表せたと思う。
- ・ 事前にディスカッションを一番多くしたテーマだったので、自分自身の見解も深まり、さまざまな事象を多面的に見られるようになった。
- ・ 特に「平和」の項目で、日本の政府側の意見ではなく、私達一般の国民の意見を聞いてもらえるように工夫したのが良かったと思う。

② 当日の感想

- ・ 一番初めのフォーラムだったので、どんな場所でののか、他の国はどんなことをするのか、と少し緊張したけれど、小さなところで安心した。シェットランドの発表は、今考えたばかりなのじゃないかと思うほど短かった。ディスカッションでは、まず聞き取りに困った。

みんなとても早口だし、次から次へ話すので、意味を考えているうちに自分の意見をまとめる暇がなかったり、やっと考えがまとまって言おうとしたときには、話がどんどん流れていてぜんぜん聞いていなかったり、思った以上に大変だった。日本に話が振られたときにも、そのことにさえ気づかなかった。

- ・ プレゼンは成功したと思う。多くの人からほめられた。ディスカッションは、最初であるせいもあって、何を言っているのかほとんどわからなかった。せっかく準備していったのに会話に参加できなかったことが非常に悔しい。英語能力を高める必要があると確信した。
- ・ ディスカッションの形式が想像とまったく違っていて驚いた。授業中でも自分から手を挙げて発言することの少ない私たちには、最もやりにくい形式だった。最初のディスカッションで緊張していたというのものもあるかもしれないが、何か発言したかった、と後悔している。
- ・ どの国も色々な視点から Globalization について考えていた。日本の製品が話題にのぼることも多く、日本という国を客観的に見ることができた良い機会だった。発表も大成功だったと思う。全ての場において言えたことだけれども、意見交換の時間などでは、他の国のメンバーが自分の意見をしっかり持っていることに驚いた。日本の事を詳しく聞かれて答えられない自分が恥ずかしかった。
- ・ うまいタイミングを見つけて手を挙げるができなかった。非常に悔しい。→何かを思いついたら、すぐ手を挙げるべし！
- ・ グローバリゼーションの話は、アメリカの存在を無視してはできないと思った。
- ・ ディスカッションがチェア対参加者全員で、一つの話題について全員で考えることができるという長所はあるが、意見を言う機会と人数が大幅に減るといふ短所がある。このフォーラム自体はGCで今後何をしていくべきかを話し合うことができなくて良かったと思う。

B. Crime, Violence, and Punishment

① プレゼンテーション、ディスカッションの準備で工夫したこと、うまくいったこと、苦労したこと

- ・ まず、どんな犯罪を話題とするかにもものすごく時間をかけた。みんなで、今日本で大きく取り上げられている犯罪を出して行って何度も話し合った。その甲斐あって、「出会い系サイト」という日本にしかない、ものすごく興味深いプレゼンが出来たと思う。ニュース風にしたというのも工夫した点の一つだと思う。
- ・ 準備当初から取り組んだテーマで、スムーズにいった。
- ・ 見て楽しめるようなものになるように工夫した。出会い系サイト、特に携帯電話を使ったものは、まだ日本にしかないだろう、しかし、そのうちにきっと海外でも起こる問題ではないかと思い選んだ。このスクリプトの英訳をするのが何よりも大変な仕事だった。難しい単語ばかりで、硬い話だったから。その分、本番はかっこよく決められたので満足はできた。資料もいろいろ持っていったけど使わなかった。使う時間もなかったが、使える雰囲気でもなかった。
- ・ プレゼンは劇形式にした。データや画像、ビデオを多く取り入れた。ディスカッションのためにはデータを多く準備してさまざまなテーマで話し合った。プレゼンは余裕を持って仕上げられた。
- ・ ビデオ撮影やパワーポイント作成、せりふ覚えなど、準備は大変だった。

- ・ 実際に携帯電話の会社に行き、犯罪を防ぐ対策としてどのようなことをしているかなどインタビューをした。資料の英訳が大変だった。
- ・ テーマが具体的で、身近なものだったので、やりやすかった。しかし、使う単語は難しいものが多く、授業で扱われなかったら、厳しかったと思う。

② 当日の感想

- ・ ディスカッションで私のグループでは、ずっと death penalty の話だった。GCの中で死刑を行っているのは日本だけなので、いろいろ聞かれた。周りの人たちに「death penalty の代わりに何があるのですか？」と聞いても、みんな「知らない」と言った。
- ・ ドイツの発表形式がとてもおもしろかった。実際にその場で「こんな場面ではあなたならどうしますか？」と言ったような、みんなが参加出来る形のプレゼンになっていて、見ていて退屈しなかった。私達の発表も、とても評判がよかった。問題を提示するだけではなく、じゃあどうやったら解決するか？という案を示したのが良かったのではないと思う。
- ・ プレゼンを劇形式にしたのは、ただ説明するだけよりも聴衆に対してはるかに効果的だと思う。他の国はパワーポイント等の使い方が上手だと思った。
- ・ 少人数のディスカッションで十分に発言でき、各国のことをいろいろ知ることができた。時間が短かったのが残念。

C. Values and Citizenship

① プレゼンテーション、ディスカッションの準備で工夫したこと、うまくいったこと、苦労したこと

- ・ なんとと言っても、私たちが日本で準備したものがほとんど使えなかったことが残念だった。自分が調べてきたことの4分の1も発表できなかった。一組ずつに質問されると聞いていたので、されるだろうと思われる質問も前日から考えていたけれど、結局されなかった。
- ・ 劇は、わかりやすく面白くした。予定の変更で、結局発表は出来なかったけれど、日本人の価値観を劇でわかりやすく発表しようという試みはよかったと思う。発表出来なかったのが本当に残念。
- ・ 急な変更のため、あせって資料だけ集めて、プレゼンの文章は飛行機の中で作った。今思うとかなりぎりぎりだった。校内でアンケートをとって作成したグラフがあまり役に立たなくて残念。
- ・ 最後までプレゼンの形式が曖昧だったのがよくなかった。2人で調べて発表内容を考えるのは、少ない時間の中では大変だった。最も苦労したテーマだった。また、それぞれのテーマも抽象的で、何を発表すればいいのかわかりにくかった。
- ・ 実質的に家で作業をすることが多く、パートナーとはe-mailでやり取りをした。外国人労働者を扱ったが広範囲でデータも多く、ひとつのプレゼンにまとめるのは大変だった。構成、内容も一人で考えることが多くかなりきつかったが、全体のディスカッションは参考になった。プレゼンは自分の考えを多く出すようにした。英・日対訳の本を借りるなどして、ディスカッションに備えた。
- ・ 2人で資料を集めたり英訳したり、大変だった。校内の生徒にアンケートをとって、結果を取り入れた。

② 当日の感想

- ・ web master が今までのネット上でのディスカッションをうまくまとめていて感心した。同じくらいの年齢の人たちとは思えなかった。
- ・ 発表形式などが大幅に変わったけれど、どうにか間に合って無事に終わることが出来た。あんなに大勢の前で、しかも英語で話すのは本当に緊張したけれど、いい経験になったと思う。内容全てを理解することは出来なかったけれど、他の国の意見がたくさん聞けて興味深かった。
- ・ 全体のディスカッションで発言でき、他の国の人ともデータを交換できてよかった。このように発言できたのは、事前のデータ収集と、ディスカッションを重ねたおかげだと思う。
- ・ 大人数でのディスカッションだったが、席が近くの人と話す機会を設けていて、全体の場でも意見を言いやすくなり、良かったと思う。このフォーラムのトピックを来年も続けることになったのは良いと思う。

3.2. Field Trip について

① ベルゲン旅行について

- ・ ベルゲンでの観光よりも、船の上でのアイスブレイカーや、部屋の人と話すほうが楽しかった。3時間しかないというのも、せっかく行ったのにもったいないと思った。
- ・ フェリーでいろんな人と話す機会が多くもてたのはよかったが、実際に街を見て回る時間が少なすぎた。
- ・ 景色がとてもきれいなところだった。ただ、来た意味がないと思った。
- ・ 部屋のメンバーがそれぞれみんな違う国の人達だったので、仲良くなる良い機会だった。船も、色々な娯楽施設があって過ごしやすかった。
- ・ あまり良い活動とは言えない。GCは観光旅行ではないから。

② Island Adventure について

- ・ 小さなグループだったので全員と仲良くなれたし、島もきれいだったので、一番楽しかった。やっぱり、小さなグループのほうが友達になりやすくていいと思う。ほぼ一日、何をすると決めていない中で時間が過ぎるので、いろんな話もできたし、冗談も言えるようになったし、遊びでも本気で笑ってばかりいた。一気に友達が増えた。
- ・ 自分たちでストーリーを考えてビデオを制作したり、みんなで協力してご飯の用意をしたりすることで、他の国のメンバーともすごく仲良くなれた良い旅だった。小さいグループに分かれて観光することで、自分の意見も言いやすいし、友達を作りやすかった。
- ・ みんなと交流するのによい機会だった。歴史にも触れることができてよかった。
- ・ 友達ができる一番いい機会だった。英語のレベルの高さに苦戦したが、英語が一番上達した一日だった。

③ 島内観光について

- ・ とにかく歩いた一日だった。海岸はものすごくきれいだったけれど、せっかくの日曜日だったので、ホストと過ごす時間にした方が良かったのではないかと思う。
- ・ 聞いていた以上にハードで疲れたが、シェットランドらしさを味わうことができた。

④ その他

- ・ フィールド・トリップが多すぎると思う。この分ディスカッションにまわせればよかった。ま

た、ホストとの時間にも。

- ・ 観光等とても楽しかったが、そのためにディスカッションの時間が短くなるのなら、なくてもよかった。
- ・ シェットランドの自然には感動した。
- ・ プログラムが多すぎて窮屈になり、ホストと過ごす時間がなくなってしまった。予算を使いすぎて、参加者に配るはずだったTシャツなどの予算がなくなったりした。

3.3. その他のイベントについて

① Music and Dance について

- ・ 大きな会場で出来たので踊りの面でも困ることはなかった。ホストの人も見に来てくれていてとてもうれしかった。伝統的な踊りをいくつか紹介していた国もあったので、その時になって、やっぱり私達も盆踊りなどの昔から親しまれている踊りを一つ入れておけば良かったと思った。
- ・ 曲の編集などかなり時間がかかって大変だった。でもいいものができてよかった。日本の古風なものをやるのではなく今の日本の音楽や踊りを紹介したかったからそれが伝わっていたら嬉しい。
- ・ 他の国のパフォーマンスを見るのもとても楽しく、盛り上がった。音楽やダンスは国を越えて楽しめるのですばらしいと思う。
- ・ 伝統的なものをしないので不安だったが、好評だった。

3.4. グローバル・クラスルームをよりよいものにするために

① 改善すべき点

- ・ フォーラムの時間が少なかった。GCの本来の目的は交流だけでなく話し合いにあるので、増やしたほうがいい。自分たちがしてきたものをすべて出し切れないうまま終わってしまうのは、いやだ。
- ・ もう少しゆとりのあるスケジュールでも良かったのではないかと思う。色んなところに行ったりする事が出来てももちろん楽しかったけれど、あまりにもホストと過ごす時間が短すぎた。また、プレゼンをしてもその後のディスカッションの時間が十分にとれていなかったのも、もっとゆっくり話し合う時間を持ってもいいと思う。また、文化紹介を個人個人でやるのではなく、Music and Dance のように時間をとってやったら、もっとお互いの国をよく知ることが出来て良いと思う。
- ・ 参加校の中にアメリカがないと、global といえない気がする。アメリカがないから話せることもあるが、いないと広がらない話もある。アジアの国がもう少しあってもいいと思う。
- ・ スケジュール、発表形式を急に变えるのはフェアじゃないと思う。英語をうまく話せる人にはどうってことのないことでも、私たちにはすごく大変なことだった。
- ・ 発表形式などの変更の連絡が遅いことが良くなかったと思う。せっかく用意していたのにむこうでそれを発表できず無駄になったものが数々あった。そういう点を改善していくべきだと思う。あと、国によって取り組みの姿勢がちがうのは良くないと思う。
- ・ フォーラムのある日は、他の予定を入れずに集中してやるべき。
- ・ 各国ともしっかりと充実した発表を準備してくるべき。

- ・ ディスカッションを少人数に。
- ・ 特に Globalization では、テーマが広すぎて十分討論できなかった。テーマを絞ったほうが準備もしやすい。
- ・ 各国の Culture 紹介をすべき。3つのフォーラム+文化紹介でより互いの国を知ることができたと思う。
- ・ 情報伝達を早く。(プレゼン、ディスカッションの形態)
- ・ 学校間のコミュニケーションをもっと密にする。Webを有効に使うことで解消できる問題。
- ・ 時間厳守。

② 残すべき点

- ・ アイランド・アドベンチャーのような、少人数で一日過ごすと言うイベントは、友達を作ったり交流したりするうえで、とてもいいプログラムだったと思う。
- ・ 少人数でディスカッションしたのは意見が言いやすくよかったと思う。これからもそういう場はあるべきだ。
- ・ テーマを3つにすること。
- ・ Music & Dance、各パーティー、スポーツ交流
- ・ Music & Dance! どうでもいように思われるかも知れないが、かなり大事。異文化共存の時代の僕たちの社会の理想像を見たようだった。

3.5. グローバル・クラスルームに参加したことで、自分の役に立っていること、今後役に立つと思われること

- ・ 日本文化をもっと学ばなければいけないと思った。現地に行くと、日本の文化は外国の文化とは違うものだ実感する。その中で自己を保つためには、日本人としての心のかかりつさせておくべきである。流されているのが交流ではない。
- ・ 日本は唯一アジアからの参加国であり、文化も考え方も違う点がたくさんあって、それを実際に肌で感じ学べたことはとても意義のあることだと思う。
- ・ 実際に使える英語をもっと学びたいと思った。この5年間何してきたんだろうと自信をなくしたくらい、自分の英語力のなさが嫌になった。また、いろんな国のメンバーの意見を聞くことで、一つの点から物を見るのじゃダメだと思った。視野が少し広がった。
- ・ 視野が広がったこと。日本にいるときから、たくさんのディスカッションをする中で、自分の考えが一般的だと思っていたことがひっくり返って驚くと同時に、そんな意見もあるのだと考えの幅が広がった。
- ・ プレゼンやディスカッションの準備を通じて知識も増え、他の国のプレゼンを見て、いかに聴衆をひきつけるか、上手なプレゼンの方法などを学べた。
- ・ やり遂げることができたと言う達成感から、自信を持つことができた。
- ・ 日本人は、私も含め特に、一人前になるように努めなければいけないと思う。現地では多くの人々が私たちを助けやさしくしてくれた。やさしくされるばかりであることが、少し不満に感じられる。対等に話し合える日が来るように、自立する必要がある。
- ・ 積極的であること。
- ・ 将来を考えるよい機会となった。GCに参加して、世界はひとつであることを改めて感じた。その世界のために自分ができることを探したい。絶対に世界に貢献したいと思った。

- ・ 他国の人と友達になって、「異」と「同」を知った。育つ環境が違うから価値観も常識も異なる。一方で、ユーモアや踊りを楽しむ感覚は同じなのだ。この両面を知ったことで、国際社会の中で人間関係をどう築いていくかということをもっと学べた。
- ・ 「国」という枠組み、肌の色、文化や言葉の違いを越えて、理解し協力し合うことの大切さを学んだ。
- ・ 責任を持つことの大切さを痛感した。

然レドモ今卒ニ困ニ於此ニ。(史記)

《然れども今卒に此に困しむ。》

《しかしながら今、結局ここで苦しんでいる。》

然レドモ制ニ於宦寺ニ、竟ニ不レ能ハ有レ為ス。(十八史略)

(十八史略)

《然れども宦寺に制せられて、竟に為す有る能はず。》

《しかしながら、宦官に制約されて結局は何もすることができなかつた。》

5 「すでニ」と眺む字

既ニ・已ニ もはや。すでに。……した上。

現に……した。……してから。

月既ニ不レ解セ飲ヲ影徒ニ隨ニ我身ニ。(李白・月下独酌)

《月既に飲を解せず 影徒らに我が身に隨ふ》

《だが月はなにしろ酒を飲むことの境地を解せず、影法師はただむなくわが身につきまとうだけである。》

既ニ得テ隴復望蜀ヲ。(十八史略)

《既に隴を得て復た蜀を望む。》

《隴の地を手にいれてしまふとさらにまた蜀の地がほしくなる。》

6 二字の熟語

(1) 然ラバ則チ (しかラバすなはチ)

「そうだとすれば」

用テ此ヲ觀ル之ニ、然ラバ則チ人之性惡ナルコト明ラカ矣。

(荀子)

《此を用て之を観るに、然らば則ち人の性は悪なること明らかなり。》

《以上のことから考えると、それならば人の本性が悪であることは明かである。》

(2) 然ル後ニ・而ル後ニ (しかルのちニ)

「……してはじめて……してこそ」

世ニ有ニ伯樂一、然ル後ニ有ニ千里馬一。(韓愈・雜説)

《世に伯樂有りて、然る後に千里の馬有り。》

《世の中に名馬を見分ける名人がいてはじめて、一日に千里も走る名馬が世の中に現われるのである。》

(3) 於テ是ニ (ここニおいテ)

「そこで・このときに」

於テ是ニ項王乃欲ス三東ノカタ渡ニ烏江一。(史記)

《是に於て項王乃ち東のかた烏江を渡らんと欲す。》

《そこで項王は東に向かつて烏江で(長江を)渡ろうとした。》

(4) 是ヲ以テ (こゝヲもつテ)

「こゝいうわけで」

吾得テ罪答ヲ常ニ痛メ。今母之力不レ能ハ使ム痛ム。是ヲ以テ泣ク。(説苑)

《吾罪を得て答うたるに常に痛めり。今母の力痛めしむる能はず。是を以て泣く。》

《私は悪いことをすると母上に鞭で打たれましたが、いつも痛く感じました。ところが今、いつものように痛く感じませんでした。(母上がお衰えになったことを思い) こゝいうわけで泣いたのです。》

《酒を飲む量が少しであっても簡単に酔っばらつてしまい、そしてまた（この人が）みんなの中では最も年長者である。》

3 「また」と読む字

(1) 亦 (また) ……「モまた」というあだ名がある。

「…もまた、同様に」

(2) 復 (また) ……「またまた」というあだ名がある。

「もう一度、二度、再び」

(3) 又 (また) ……「さらまた」というあだ名がある。

「さらに、その上」

(1)の例文

不_レ欺_カ人_者ハ、人_モ亦_不二_欺ヘテ欺_カ一_。 (言志晩録)

《人を欺かざる者は、人も亦敢へて欺かず。》

《人をだますことの無い人は、相手の人もまた自分と同じようになりませんでした。》

(2)の例文

壮士能_ク復_タ飲_ム乎。(史記)

《壮士能く復た飲むか。》

《壮士よもう一度飲むことができるか。》

(3)の例文

過_{チテ}而_不レ改_メ、而_{シテ}又_久レシクヌ之_ヲ。(左伝)

《過ちて改めず、而して又之を久しうす。》

《過失を犯しても改めることなく、その上さらに長く犯す。》

4 「つひに」と読む字

(1) 遂 (かくて・その結果)

② そのまま

(2) 終_ニ・卒_ニ・竟_ニ 結局・とうとう・最後まで

(1)の①の例文

乃_チ放_レ馬_ヲ而_随ヒレ之_ニ、遂_ニ得_レタリ道_ヲ。(韓非子)

《乃ち馬を放ちて之に随ひ、遂に道を得たり。》

《そこで馬を放してそのあとからついて行った結果、道を見つけたことができた。》

(1)の②の例文

先世避_ケ秦_時ノ乱_ヲ、率_ニ妻子邑人_ヲ、来_ニ此_ノ絶

境_ニ一、不_二復_タ出_テ一焉。遂_ニ与_ニ外人_一間隔_{セリ}。

《先世秦時の乱を避け、妻子邑人を率ゐて、此の絶境に來たり、復

た出でず。遂に外人と間隔せり。》

《先祖が秦の時代の混乱を避け、妻子や村人を引き連れてこの人里

離れた土地にやつてきて、二度と外に出ませんでした。そのまま外

部の世界の人達と行き来が途絶えてしまったのです。》

(2)の例文

惑_{ヒテ}而_不レ從_ハレ師_ニ、其_ノ為_レ惑_ヒ也、終_ニ不_レ解_ケ矣。

《惑ひて師に従はずんば、其の惑ひ為るや、終に解けず。》

《思い惑っているのに、師について学ばなければ、その惑いは最後

まで解決しない。》

(3) 乃チ ① そこで ② かえって

③ なんと(思いがけず)・意外にも

④ やつと・わずかに ⑤ ……こそ

①の例文

堯ノ子丹朱ハ不肖ナリ。乃チ薦ム舜ヲ於天ニ。 (十八史略)

《堯の子丹朱は不肖なり。乃ち舜を天に薦む。》

《帝王堯の子の丹朱はすぐれた人物ではなかった。そこで(堯帝は)舜を天子として推薦した。》

②の例文

当ニ改メ過レ自新ス。乃チ益驕溢ス。 (史記)

《当に過ちを改め自新すべきに、乃ち益驕溢す。》

《過ちを改め直すのが当然であるのに、かえってますます勝手気ままになった。》

③の例文

至レ拜スルニ大将ヲ。乃チ韓信也。一軍皆驚ク。 (史記)

《大将を拜するに至れば乃ち韓信なり。一軍皆驚く。》

《いよいよ大将が任命されると、なんと思いがけずも韓信であった。全軍の人々は皆驚いた。》

④の例文

平明、漢軍乃チ覺レ之ヲ。 (史記)

《平明、漢軍乃ち之を覚る。》

《夜明け方、漢軍はやつとこれに気づいた。》

⑤の例文

呂公ノ女ハ乃チ呂后也。 (史記)

《呂公の女は乃ち呂后なり。》

《呂公の娘こそ、つまり呂后である。》

(4) 便チ ① すぐに・たやすく

② ともなおさず・つまり

①の例文

林居ニ水源ニ、便チ得タリ一山ヲ。 (陶淵明・桃花源記)

《林水源に尽き、便ち一山を得たり。》

《林が水源の所で尽きていたかと思うと、そこに山があった。》

②の例文

匡廬ハ便チ是レ逃ルルノ名ヲ地。

《白居易・香廬峰下新卜一山居一草堂初成偶題二東壁一》

《匡廬は便ち是れ名を逃るの地。》

《廬山のあたりはとりもなおさず世間的な名利の念から逃れるのに絶好の地だ。》

(5) 輒チ ① そのたびにいつも

② すぐに・たやすく

①の例文

出デテ望見スレバ、輒チ引キ車ヲ避ケ匿ル。 (十八史略)

《出でて望見すれば、輒ち車を引き避け匿る。》

《出かけて遠くから姿を見れば、そのたびにいつも車を引き返して避け隠れた。》

②の例文

飲ムコト少ナクシテ輒チ醉ヒ、而シテ年又最高シ。

《飲むこと少なくて輒ち酔ひ、而して年又最も高し。》

《飲むこと少なくて輒ち酔ひ、而して年又最も高し。》

《陛下は兵士の大將となることはおできになりませんが、立派に大將の大將とられます。》

而は置き字の例（順接）

読書百遍ニシテ而義自ラ見ハル。（魏志）

《読書百遍にして義自ら見はる。》

《何回も繰り返して読めば意味の分からないところもおのずからわかるのである。》

而は置き字の例（逆接）

心不レ在ラ焉ニ、視レドモ而不レ見ユ、聴ケドモ而不レ聞コエ。（大学）

《心焉に在らざれば、視れども見えず、聴けども聞こえず。》

《放心状態でいれば、目では見えてもそれが何であるか見分けられない。耳では聞いていてもそれが何であるか聞き分けられない。》

2 「すなはち」と詠む字

(1) 則チ・斯チ ……たら（なら）……と

② ……するとき……の場合

①の例文

学ヒテ而不レ思ハ、則チ罔ク、思ヒテ而不レ学バ、則チ殆シ。（論語）

《学びて思はざれば、則ち罔く、思ひて学ばざれば、則ち殆し。》

《学問をして自分で考えなければ、理解できず、考えてもきちんと学問をしないなら、その勉強はあぶなっかしい。》

②の例文

弟子入リテハ、則チ孝、出デテハ、則チ弟。（論語）

《弟子入りては則ち孝、出でては則ち弟。》

《世の若者達は、家庭にあつては父母に孝行を尽くし、社会に出ては目上に対し従順でありたい。》

(2) 即チ

① すぐに

② ともなおさず・つまり

③ ……たら（なら）……と（「則」に同じ）

①の例文

張良出デテ項伯ヲ要ス。項伯即チ入リテ沛公ニ見ユ。（史記）

《張良出でて項伯を要す。項伯即ち入りて沛公に見ゆ。》

《張良は外に出て項伯を無理矢理迎え入れた。項伯はすぐに中に入つて沛公にお目に掛かった。》

②の例文

是レ処ニ旅ニ之道ニシテ、即チ涉ル世ノ之道也。（言志録）

《是れ旅に処するの道にして、即ち世を渉るの道なり。》

《これこそ旅をうまくやつていく方法であり、ともなおさず世の中をうまく生活していく方法でもある。》

③の例文

先シテ人ヲ、後ルレバ二人ノ所ニ制スル。（史記）

《先んずれば即ち人を制し、後るれば即ち人の制する所と為る。》

《人より先に手を下せば、相手を制することができるが、人に後れとやると、人に支配される。》

逆接の仮定

(1) 縱^ヒ……トモ (たとヒ……トモ)

縱^ヒ令^ヒ……トモ (たとヒ……トモ)

假^ヒ令^ヒ……トモ (たとヒ……トモ)

「たとえ……でも」

縱^ヒ君^不ニ 我^ニ驕^ラ一也、吾^豈能^勿レ 畏^ル乎。 (孔子家語)

《たとえ君が私に驕らずとも、吾豈に能く畏るる勿からんや。》

《たとえ君が私に驕りたかぶらないとしても、私としてはどうしておそればからぬでいられようか》

(2) 雖^モ……トモ (……といへども)

「たとえ……でも」

雖^モ二晋^伐ツト一レ 齊^ヲ、楚^必救^レ之^ヲ。 (左伝)

《晋を伐つと雖も、楚必ず之を救はん。》

《晋が齊を伐つても、楚は必ず齊を救うであろう。》

[13] 接続

1 而^ニについて

順接…… (しかシテ・しかウシテ)

置き字として読まない場合は、上の字に「テ・シテ」と送り仮名をつけて順接の意味を反映させます。

逆接…… (しかモ・しかルニ・しかレドモ)

「……でも・しかし・それなのに」

置き字として読まない場合は、上の字に「モ・ドモ」と送り仮名をつけて逆接の意味を反映させます。

而^ヲを讀む例 (順接)

蚌^方出^テ曝^ス。而^{シテ}鵝^啄二其^ノ肉^ヲ。 (戦国策)

《蚌方に出でて曝す。而して鵝其の肉を啄む。》

《どぶ貝がちょうど川から出て日光浴をしていた。そしてそこにしがやってくる。どぶ貝の身をつついた。》

蘇^秦恐^レ去^リ趙^ヲ、而^{シテ}從^テ約^解ク。 (十八史略)

《蘇秦恐れて趙を去り、而して從約解く。》

而^ヲを讀む例 (逆接)

結^レ 廬^在リ二^人境^ニ一。而^モ無^シ二^車馬^ノ喧^シキ一。 (陶淵明・飲酒)

《廬を結びて人境に在り。而も車馬の喧しき無し。》

《いおりを人里の中にかまえて住んでいるが、それでいて(訪問して来る役人の)車や馬のやかましい音もなく静かである。》

而^ルニ 吾^以テ 捕^ル 蛇^ヲ 独^存ス。 (柳宗元・捕蛇者説)

《而るに吾は蛇を捕ふるを以て独り存す。》

《それにもかかわらず、私は蛇を捕まえる仕事のおかげでひとりだけ生きながらえている。》

陛^下 不^レ能^レ 將^レ 兵^ニ、而^{レドモ} 善^ク 將^レ 將^ニ。 (史記)

《陛下は兵に將たる能はず、而れども善く將に將たり。》

王即不レ聴カレ用レ、必ス殺セ之ヲ。(史記)
《王即し鞅を用ふるを聴かずんば、必ず之を殺せ。》
《王様がもし鞅(商鞅)を採用することを承知しないならば、必ず彼を殺しなさい。》

(2) 苟クモ……バ (いやしくモ……ば)
「もし……ならば」

苟クモ無二 恒心一、放辟邪侈、無レ不レ為サ已。(孟子)

《苟くも恒心無ければ、放辟邪侈、為さざる無きのみ。》
《人がもしも一定不変の道徳心がないならば、わがまま勝手にし放題をして、平気なのだ。》

(3) 嚮ニ……バ (さきニ……バ)

嚮ニ吾不レ為ニ斯ノ役一則久已ニ病ミシナラン矣。
「もしも前に……であったならば」

《嚮に吾斯の役を為さずんば則ち久しく已に病みしならん。》
《もしも私が以前からこの(蛇取りの)仕事をしていなかったらおそらくとうの昔から疲れはててしまっていたことでしょう。》

(4) 微ニ……バ (……なかりせば)

微ニ管仲一、吾其被レ髮左レ衽矣。(論語)

《(あの時)もしも管仲がいなかったら、(今ごろ)我々は異民族の風俗にならない、さんばら髪で着物を左前に着ていることであらう。》

使役の形式を用いる

使ニ民ノ衣食有レ余リ、自ラ不レ為サ盗ヲ。(日本外史)

《民の衣食をして余り有らしめば、自ら盗を為さざらん。》
《もしも人民の衣食にゆとりが有るようにしたならば、自然に盗みをしなくなるであらう。》

「今」を用いる

今子食レ我ヲ、是レ逆天帝ノ命ニ也。(戦国策)

《今子我を食らはば、是れ天帝の命に逆らふなり。》
《もしもあなたが私を食べるならば、それは天帝の命令に逆らうことになります。》

否定の運用の場合

不レ入ラ虎穴ニ、不レ得ニ虎子一。(後漢書)

《虎穴に入らずんば、虎子を得ず。》
《危険な虎のすみかに入らなければ、貴重な虎の子を手に入れることはできない。》

文脈から仮定に読む場合

朝ニ聞レカバ道ヲ、夕ニ死ストモ可ナリ矣。(論語)

《朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり。》
《もしも朝に人の踏み行うべき道を聞き、そしてそれを自分のものにできたなら、その夕方には死んでもかまわない。》

2 詠嘆の助字のみを用いる場合

賢ナル哉回也。(論語)

(賢なるかな回や。)

《賢いなあ、顔回は。》

3 感動詞と詠嘆の助字を併用する場合

于嗟徂兮、命之衰タル矣。(十八史略)

(于嗟徂かん、命の衰へたるかな。)

《ああ、あの世へいこう、運命が尽きてしまったなあ。》

疑問・反語の形の詠嘆

(1) 何ソ(其レ)……也。

(何ぞ(其れ)……や。)

夫子、聖者ナル与、何ソ其多能也。(論語)

(夫子は聖者なるか、何ぞ其れ多能なるか。)

《先生は聖人でしょうなあ、なんとまあ多能であることよ。》

(2) 豈ニ非ス……哉。

(豈に……に非ずや。)

豈ニ不……哉。

(豈に……ならずや。)

今又迷ヒテ失フレ道ヲ。豈ニ非ス天ニ哉。(象求)

(今又迷ひて道を失ふ。豈に天に非ずや。)

《今迷つて道を間違えてしまったのは、まことに天命ではなからうか。》

公孫衍・張儀、豈ニ不誠ノ大丈夫ナラ一哉。(孟子)

(公孫衍・張儀は、豈に誠の大丈夫ならずや。)

《公孫衍・張儀はなんとまことの立派な男子と言うものではなからうか。》

(3) 不亦……一乎。

(亦……ずや。)

有リレ朋自リニ遠方一來、不亦樂シカラ一乎。(論語)

(朋有り遠方より来たる、亦樂しからずや。)

《友人がいて遠いところから訪ねてきてくれる、なんと楽しいことではないか。》

[12] 仮定

1 順接の仮定

(1) 如シ……バ

若シ……バ

即シ……バ

(もしも……ならば)

如シ詩不レ成ラ、罰依ニ金谷ノ酒数ニ。

(李白・春夜宴二桃李園一序)

(如し詩成らずんば、罰は金谷の酒数に依らん。)

《もしも詩ができなければ罰として金谷での故事にならつて酒を飲ませることにしよう。》

学若シ無レ成ル、死ストモ不レ還ラ。(村松文三詩)

(学若し成る無くんば、死すとも還らず。)

《学問がもし成しとげられないなら、死んでも帰らない。》

《ていねいにおじぎをして自分の罪を罰せられることをお願いした。》

(3)の例文

願^フ下^ニ為^ニ重盛^ノ一死^センコトヲ 上者、二百余人アリ。

(日本外史)

《重盛の為に死せんことを願ふ者、二百余人あり。》

《重盛の為に命を捨てることを願う者が二百余人あります。》

(4)の例文

冀^フ二復得^一レ 兎^ヲ。(韓非子)

《復た兎を得んことを冀ふ。》

《また兎を手にいれたいと願った。》

先に読む場合

(1) 請^フ……………ヤン(ヤム)。

(請ふ……………せん(せよ)。(

「どうか……………しよう(して下さい)。(」

(2) 願^{ハク}ハ……………ヤン(セム)。

(願はくは……………せん(せよ)。(

「どうか……………したい(して下さい)。(」

(3) 冀^{ハク}ハ……………ヤン(セム)。

(冀はくは……………せん(せよ)。(

「どうか……………したい(して下さい)。(」

「希」「庶」「庶幾」も「こひねがハクハ」と読みます。

(1)の例文

請^フ以^テ劍^ヲ舞^ハン。(史記)

《請ふ劍を以て舞はん。》

《どうか劍舞をさせて下さい。》

(2)の例文

願^{ハク}ハ大王^ヲ急^ギ渡^レ。(史記)

《願はくは大王急ぎ渡れ。》

《どうか大王様、急いで渡って下さい。》

(3)の例文

王庶幾^{ハク}改^メ之^ヲ。予日^ニ望^ム之^ヲ。(孟子)

《王庶幾はくは之を改めよ。予日に之を望む。》

《王様、どうかこれ(ご自分の説)を改めて下さい。私はそのようになることを毎日希望しています。》

[1] 詠嘆

感動詞

嗚呼・嗟乎・嗟夫・于嗟・噫・噫・噫

詠嘆の助字

哉・乎・夫・与・也・矣・耶・也夫・矣乎・矣哉・也歟

1 感動詞のみを用いる場合

嗚呼、滅^ス六^ノ國^ヲ一^ノ者^ハ六^ノ國^也。非^ズ秦^也也。

(杜牧・阿房宮賦)

《嗚呼、六國を滅ぼす者は六國なり。秦に非ざるなり。》

《ああ、六國(韓・魏・趙・燕・斉・楚)を滅ぼすものは六國自身である。秦ではない。》

前半のみの形

脩^レ己^ヲ以^テ安^ニ百姓^ヲ、堯舜^モ其^レ猶^ホ病^レ諸^ヲ。

(論語)

《己を脩めて以て百姓を安んずるは、堯舜も猶ほ諸を病めり。》
《わがを身修めて一般人民を安心させるということは、堯や舜でさえも苦勞されたことなのだ。》

以^ニ管公之賢^ヲ、猶^ホ不^レ能^ハ無^ニ恋^フ權^ヲ之意^一。

(日本外史)

《管公の賢を以てすら、猶ほ權を恋ふの意無きこと能はず。》
《管公ほどの賢人でさえも、なお權力を恋しく思う心がないわけにはいかなかったのである。》

後半のみの形

古人^{乘^レ燭^ヲ夜遊^フ、良^ニ有^レ以^也。況^{シヤ}陽春^{召^レ我^ヲ}}

以^ニ煙景^一、大塊^{仮^レ我^ニ以^ニ文章^一。}

(李白・春夜宴桃李園序)

《古人燭を乗りて夜遊ぶ。良に以有るなり。況んや陽春我を召くに煙景を以てし、大塊我に仮すに文章を以てするをや。》

《昔の人は灯を手にとって夜も遊んだが、まことにもつともなことである。ましてうらかな春が霞たなびく景色で我々をまねき、造花の神が我々に文学の才能を貸し与えている場合はなおさらだ。《この春の夜を楽しもうではないか。》》

富貴^{ナレバ}則^チ親戚^{畏^レ懼^シ之^ヲ、貧賤^{ナレバ}則^チ輕^ニ易^ス之^ヲ。}

況^{シヤ}衆人^乎。(十八史略)

《富貴なれば則ち親戚も之を畏懼し、貧賤なれば則ち之を輕易す。況んや衆人をや。》

《金持ちで身分が高ければ身内の者も私を恐れはばかり、貧乏で位が低ければかにする。まして一般の人はなおさらだ。》

[10] 願望

下から返って眺む場合

(1) 欲^ス……………^シコトヲ^ヲ。(を)欲す。

「……………を望む。」

(2) 請^フ……………^シコトヲ^ヲ。(を)請ふ。

「……………することを(を)願う。」

(3) 願^フ……………^シコトヲ^ヲ。(を)願ふ。

「……………することを願う。」

(4) 冀^フ……………^シコトヲ^ヲ。(を)冀ふ。

「……………することを(を)願う。」

(1)の例文 「希」「庶」「庶幾」も「こひねがフ」と読みます。

胆^{欲^レ大^ナ而^{心^{欲^レ小^ナ}}欲^ス。(唐書)}

《胆は大なることを欲して心は小なることを欲す。》

叩頭^{請^フ罪^ヲ}。(皇朝史略)

《叩頭して罪を請ふ。》

(1) 不^ニ唯^{ダニ} (独リ) ……ノミナラ 又 (亦) ……。

(唯だに(独り) ……のみならず又(亦) ……)
「ただ …… だけでなく(その上) また ……」

(2) 非^ス 唯^{ダニ} (独リ) ……ノミニ 又 (亦) ……。

(唯だに(独り) ……のみに非ず又(亦) ……)
「ただ …… だけでなく(その上) また ……」

(1)の例文

古之立^{テシ} 大事^ヲ 一者^ハ、不^ニ唯^{ダニ} 有^ル 超世之才^ニ、亦

必^ズ 有^リ 堅^ク 不拔^ノ 志^一。(龜錯論)

《古の大事を立てし者は、唯だに超世の才有るのみならず、亦必ず堅忍不拔の志有りき。》

《昔の大事を成就した者は、ただ世にすぐれた才能をもっていたばかりでなく、さらにまた必ずどんなことにも動じない堅い精神を持つていたのである。》

(2)の例文

非^ズ 独^リ 羊^ノ ミニ 一也、治^レ 民^ヲ 亦 猶^ホ 是^ノ 也。(史記)

《独り羊のみに非ざるなり、民を治むるも亦猶ほ是くのごときなり。》

《ただ羊の場合だけではないのである。民を治めるのもまたこれと同様である。》

Aスラ 且^ツ B、 況^ン C乎。

Aスラ 猶^ホ B、 + 況^ン 於^テ C乎。

Aスラ 尚^ホ B、 安^ク Cセン乎。

(Aすら且つB、 況んやCをや。)

(Aすら猶ほB、 + 況んやCに於てをや。)

(Aすら尚ほB、 安くんぞCせんや。)

「AでさえBである。ましてCはなおさら(Bである。) どうしてCしようか。」

典型的な例

死馬^{スラ} 且^ツ 買^フ 之^ヲ、 況^ン 生^{ケル} 者^ヲ 乎。(十八史略)

《死馬すら且つ之を買ふ、況んや生ける者をや。》

《死んだ馬でさえ(高値で)買ったのだから、まして生きている馬ならなおさらだ(高く買う)。》

庸人^{スラ} 尚^ホ 羞^レ 之^ヲ。 況^ン 於^テ 二将相^ニ 一乎。(蒙求)

《庸人すら尚ほ之を羞づ。況んや将相に於てをや。》

《凡人でさえこのことを恥ずかしいと思います。まして大将の身分ならなおさら(恥ずかしく思う)でしょう。》

臣死^{スラ} 且^ツ 不^レ 避^ク。 厄酒^{安^ク シン} 足^レ 辞^{スル} 乎。(史記)

《臣死すら且つ避けず厄酒安くんぞ辞するに足らんや。》

《私は死ぬことさえいとわれない、まして大杯の酒くらいどうして辞退するほどのことがありましようか、辞退などしません。》

1・2併用の例文

直^ダ不^ル百^ナ歩^ナ一^ナ耳^ナ。(孟子)

〈直だ百歩ならざるのみ。〉

《ただ(逃げたのが)百歩になっていないというだけだ。》

秦^ハ独^リ畏^ル馬^ル服^ル君^ニ趙^ノ奢^ノ子^ノ括^ヲ為^レ一^ル將^ヲ耳^ナ。(十八史略)

〈秦は独り馬服君趙奢の子括の將爲るを畏るのみ。〉

《秦はただ馬服君の趙奢の子の趙括が大将となることだけを畏れている。》

1のみ用いた例

此^レ亡^ル秦^ノ之^ノ統^ヲ耳^ナ。(史記)

〈此れ亡秦の統のみ。〉

《こんなことをしては滅亡した秦の二の舞になるだけです。》

非^レ死^セルニ則^チ徙^リ爾^ナ。(柳宗元・捕蛇者説)

〈死せるに非ざれば則ち徙りしのみ。〉

《死んだのでなければ他の土地へ移っただけである。》

苟^{クモ}無^ク二^{ケレバ}恒^心一^ニ、放^散邪^ノ侈^ヲ、無^キレ不^ルレ為^サ已^ナ。(孟子)

〈苟くも恒心無ければ、放散邪侈、為さざる無きのみ。〉

《人がもしも一定不変の道德心がないならば、わがまま勝手にし放題をして平気なのだ。》

2のみ用いた例

無^ク二^{クシテ}恒^心一^ニ有^ル二^ニ恒^心一^者ハ、惟^ダ士^ノミ^ニ為^レ能^クスト。(孟子)

〈恒産無くして恒心有る者は、惟だ士のみ能くすと為す。〉

《一定の財産がなくてつねに不変の道德心を持ち続けられるのは、ただ学問修養のできた士だけが、これをなすことができるのである。》

独^リ臣^ノミ^ニ有^リレ舟^ナ。(史記)

〈独り臣のみ舟有り。〉

《私だけが舟を持っている。》

臣^唯知^ル二^ニ韓^信ノ^ミヲ一^ニ。(史記)

〈臣唯だ独り韓信のみを知る。〉

《私はただ韓信だけを知っていました。》

多^寡ハ唯^ダ命^ノマ^ナナリ。(日本外史)

〈多寡は唯だ命のままなり。〉

《分量はただあなたのおっしゃるとおりにいたします。》

惟^ダ見^ル長^江ノ^天際^ニ流^ルルヲ。(李白・黄鶴樓送孟浩然之廣陵)

〈惟だ見る長江の天際に流るるを〉

《ただ長江が空の果てに流れているのが見えるだけである。》

特殊な限定

自^レリハ非^ズ二^ニザル……………ニ

〔……………でない限りは〕

自^レリハ非^ズ二^ニザル……………ニ、外^ニ寧^ケレバ必^ズ有^リ二^ニ内^ノ愛^ト一^ニ。(左伝)

〈聖人に非ざるよりは、外寧ければ必ず内の愛ひ有り。〉

《聖人でないかぎりは、外に心配がなければ必ず内にもめぐることがある。》

選択

1 寧^ロ A ^{ストモ} 無^{カレ} B ^{スル} (コト)。

不^レ B ^セ。

(寧^ル A ずとも B する (こと) 無^{カレ}。)

B せず。)

「A してもよいが、B してはいけない。B するよりは、A するほうがましである。」

2

与^ニ (其) ^ノ B ^{セン} (也) 寧^ロ A ^{セン}。

不^レ 如^カ A ^{スル} ニ。

孰^ニ 与 ^(若) A ^{スル} ニ。

(其の) B せんよりは

寧^ル A せん。)

A するに如^カ ず。)

「B するよりは A する方がよい。」

1 の例文

寧^ロ 為^ニ 鶏^口 一、無^レ 為^ニ 牛^後 一。(史記)

《寧^ル 鶏^口 と為るとも、牛^後 と為ること無^{カレ}。》

《鶏の口にはなつても、牛の尻にはなるな。》

寧^ロ 死^ス、不^レ 願^ハ 子^孫 有^ニ 此^行 一也。(後漢書)

《寧^ル 死^ス ずとも、子^孫 に此^行 ひ有るを願^ハ はざるなり。》

《いっそ死んでもかまわないが、子孫にこのような行いのあるのを聞くことを願わないのである。》

2 の例文

与^ニ 人^刃 一 我^ヲ、寧^ロ 自^刃 一。(史記)

《人^刃 を刃^{セン} せんよりは、寧^ル 自^刃 せん。》

《人に刃をかけられるよりは、むしろ自刃したほうがよい。》

吾^与 其^ノ 富^ミ 而^レ 畏^レ 人^ヲ、不^レ 若^カ 貧^ニ 而^レ

無^キ 一 屈^ス。(孔子家語)

《吾^レ 其^ノ 富^ミ みて人^ヲ を畏^ル んよりは、貧^ニ にして屈^ク する無^キ に若^カ ず。》

《私は、金持ちではあるが、他人を畏れるよりも、貧乏であっても他人に屈することのない方がましである。》

与^ニ 其^ノ 有^ラ 一 樂^ニ 於^身 一、孰^ニ 若^レ 無^キ 一

憂^ヒ 二 於^其 心^ニ 一。(韓愈・送三李愿帰二盤谷一序)

《其^ノ 身^ニ に樂^ム しみ有^ラ んよりは、其^ノ 心^ニ に憂^ヒ 無^キ に孰^ニ 若^レ ぞ。》

《肉体的に樂しみがあるよりは、精神的に心配がないのとどちらがよいか。(後者の方がよい。》

[8] 限定・累加

限定

1 限定の助字

耳・爾・已・而已(のみ)

「だけ(だ)」

2 限定の副詞

(1) 唯^ダ・惟^ダ・但^ダ・直^ダ・特^ダ・徒^ダ・維^ダ (ただ)

「ただ(だ)」

(2) 独^リ (ひとり)

「ただ(だ)、ひとり(だけ(だ))」

《豈に千里を遠しとせんや。》
《どうして、千里の道のりも遠いと思うだろうか。》

(2) 何ノ……カ之有ラン。
〔何の……か之れ有らん。〕

〔何の……があるうか、何の……もない。〕

何ノ常師カ之レ有ラン。
〔何の常師か之れ有らん。〕

《一定の師がいるわけではない。》

何ノ亡レボシ國敗ルコトカ家ヲ之レ有ラン。
〔何の國を亡ぼし家を敗ることか之れ有らん。〕

《どうして國を亡ぼし、家を破産させるようなことがあるうか、ありはしないのだ。》

[7] 比較・選択

比較

1 「如(若)」を用いる

(1) Bハ不レ如カレAニ。
〔BはAに如かず。〕

〔BはAに及ばない。〕

(2) 莫シレ如クハAニ。
〔Aに如くは莫し。〕

〔Aに及ぶものはない。〕

〔Aに及ぶものはない。Aが一番だ。〕

2 「於(乎・于)」を用いる

(3) AハCニ於Bヨリモ。
〔AはBよりもC(なり)。〕

〔AはBよりもCである。〕

(4) 莫シレCニ於Aヨリ。
〔AよりC(なる)は莫し。〕

〔AよりCなものはない。Aが一番Cだ。〕

(1)の例文

百聞ハ不レ如カニ一見ニ。
〔百聞は一見に如かず。〕

《百回聞くのは一回見るのに及ばない。》

(2)の例文

知レルハ臣莫シレ如クハ君ニ。
〔臣を知るは君に如くは莫し。〕

《臣下のことを知っているのは君主に及ぶものはない。》

(3)の例文

青ハ出ニ於藍ヨリ、而青シニ於藍ヨリモ。
〔青は藍より出でて、藍よりも青し。〕

《青色は藍から作り出されたものであるが、藍よりも青い。》

(4)の例文

天下莫シ三柔ニ弱ナルハ於水ヨリ。
〔天下水より柔、弱なるは莫し。〕

《天下に水より柔らかくて弱々しいものはない。》

《誰が衣服をかけてくれたのか。》

(2) 孰 (いづレカ)

(たれカ)

「どちらが……であるか」
「だれが……か」

創業 守成 孰 難キ。(十八史略)

《創業と守成と孰れか難き。》

《創業と、その事業を守っていくのとはどちらが困難であるか。》

信昌謂 其ノ衆 曰ク、「孰能出 促 援兵者」

(日本外史)

《信昌其の衆に謂ひて曰く、「孰か能く出でて援兵を促す者ぞ。」と。》

《信昌がその部下たちに向かつて言うには、「だれかこの城を脱出して救援の軍隊を頼みに行くことのできる者はいないか。」と。》

(3) 幾 (いく)

「どれくらい(の)」

古来征戦 幾人 回ル。(王翰・涼州詞)

《古来征戦幾人か回る。》

《昔から(西域)に戦いに出て、何人の人が帰って来ただろうか。》

(4) 何以 (なにヲもつテ)

「どのようにして…か、なぜ…か」

王曰 三何ヲ以利ニセシト 吾ガ国ヲ。(孟子)

《王は何を以て吾が国を利せんと曰ふ。》

《王様はどのようにして自分の国に利益をもたらそうかと言う。》

(5) 何為 (なんスレソ)

(なんスル)

「どうして……か」
「どういう……か」

何為レソ 斬ル 二 壮士ヲ。(史記)

《何為れぞ壮士を斬る。》

《どうして壮士を斬首の刑にするのか。》

客 何為ル者ソ。(史記)

《客は何為る者ぞ。》

《客はいったい何者であるか。》

(6) 幾何・幾許 (いくばく)

「どれくらいか。どれほどか。」

浮生 若シ 夢ノ 為レ 歎ビ 幾何ソ。

(李白・春夜宴 桃李園 一序)

《浮生は夢の若し、歎びを為すこと幾何ぞ。》

《水に浮かぶ泡のようににはかない人間の一生は夢のようなもので、楽しい思いをすることはどれほどあるであろうか、あんまりないにちがいない。》

6 反語のみに用いる例

(1)

豈ニ……ンヤ (豈に……んや)

「どうして……か」

豈ニ遠ニ 千里ヲ 一哉。(十八史略)

《胡為れぞ遑遑として何くに之かんと欲する。》
《どういいうわけでそんなにあわててどこに行こうとしているのか。》

(2)の②の例文

沛公安^{クニカ}在^ル。(史記)

《沛公安くにか在る。》

《沛公はどこにいるか。》

4 「いかん」について

(1) 何如・何若

(いかん)

「どのようなか」

状態・様子・程度・真偽、などを問う疑問の字。

(2) 如何・若何・奈何

(いかんセン・いかんソ)

「どうしようか・どうして」

手段・方法・処置、などを問う疑問の字。

(1)の例文

以^テ二十五歩^ヲ一笑^ニ、百歩^ヲ、則^チ何如[。]。(孟子)

《五十歩を以て百歩を笑はば、則ち何如。》

《五十歩逃げた者が百歩逃げた者を臆病者だとあざ笑ったとしたら、どうでしょうか。》

(2)の例文

二世大^{イニ}驚^{キテ}与^ニ群臣^一謀^{リテ}曰^ク、「奈何^{セント}。」(史記)

《二世大いに驚きて群臣と謀りて曰く、「奈何せん。」と。》

《二世皇帝はたいへん驚いて群臣と相談して言った。「どうしようか。」と。》

楚^セ辟^{ニシテ}我^ハ衷^{ナリ}。若何^ソ効^レ辟^ニ。(左伝)

《楚は辟にして我は衷なり。若何ぞ辟に効はん。》

《楚は間違っており、わが国は正しい。どうして間違いに見ならうことがありますでしょうか。》

「如何」が目的語をとる場合

虞^ヤ兮虞^ヤ兮奈^レ若^ヲ何^{セン}。(史記)

《虞や虞や若を奈何せん。》

《虞よ虞よおまえをどうしようか、どうしようもない。》

月白^ク風清^シ。如^ニ此^ノ良夜^ヲ何^{セン}。(蘇軾・後赤壁賦)

《月白く風清し。此の良夜を如何せん。》

《月は白く輝き風はすがすがしく吹いてくる。このよい夜をどのようにして過ごしたらよいだろうか。》

5 その他の疑問・反語の字

(1) 誰

(たが)

「だれの」

《たれか・たれヲか・たれニ》

《だれが…か・だれを…か・だれに…か》

誰^ガ家^ノ玉笛^カ暗^ニ飛^レ声^ヲ。(李白・春夜洛城聞^レ笛)

《誰が家の玉笛か暗に声を飛ばす。》

《いったい誰の家の笛であろうか、どこからともなく聞こえて来るすばらしい音色は。》

誰^カ加^レ衣^ヲ者^ゾ。(韓非子)

《誰か衣を加ふる者ぞ。》

何ソ前ニハ「倨リテ」而後「恭シキ」也。(十八史略)

《何ぞ前には倨りて後には恭しきや。》

《どうして以前は威張っていたのに、後ではうやうやしく変わったのか。》

帝力何ソ有ニ「於我ニ」一哉。(十八史略)

《帝力何ぞ我に有らんや。》

《天子の力がどうして私に及んでいようか、及んでいないのだ。》

3 「何(なんソ)」「安(いづクソ)」

(1) 何・胡・奚・曷

① (なんソ) 「どうして」 《理由》

② (なにヲカ) 「なにを」 《事物》

③ (なんノ) 「どんな」 《様子》

④ (いづレノ) 「いつ、どこで」 《時・場所》

⑤ (いづクニ(カ)) 「どこに」 《場所》

(2) 安・焉・惡(寧・庸・烏)

① (いづクソソ) 「どうして」 《理由》

② (いづクニカ) 「どこに」 《場所》

(1)の①の例文

不レ「有」ニ「佳作」一、何ソ伸ニ「雅懷」一。

(李白・春夜宴「桃李園」序)

《佳作有らば、何ぞ雅懷を伸べん。》

《よい詩ができなければ、どうしてこの風雅な心を表わせようか。》

(2)の①の例文

燕雀安クシ「知」ニ「鴻鵠之志」一哉。(十八史略)

《燕雀安くんぞ鴻鵠の志を知らんや。》

《燕や雀のような小人物は、どうして鴻鵠(大きな鳥)のような大人物の志を知ることができようか、知ることはできない。》

(1)の②の例文

内ニ省ミテ「不」レ「疚シカラ」夫レ何「憂」何「懼」レシ。(論語)

《内に省みて疚しからずんば、夫れ何をか憂へ何をか懼れん。》

《心に反省してやましいところがなければ、いつたい何を心配し何を恐れることがあるうか、心配し恐れることなどない。》

(1)の③の例文

何「意」アリテ「棲」ニ「碧山」ニ。(李白・山中問答)

《何の意ありてか碧山に棲む。》

《どういうつもりで、緑濃い山奥にお住みになるのですか。》

(1)の④の例文

何「処」ヨリ「秋風至」ル、蕭蕭トシテ「送」ルニ「雁群」ヲ。

(劉禹錫・秋風引)

《何れの処よりか秋風至る、蕭蕭として雁群を送る。》

《どこから秋風が吹いて来るのか、ざわざわと吹いて雁の群れを送つて来る。》

何「レ」日「カ」是レ「帰年」ナラン。(杜甫・絶句)

《何れの日か是れ帰年ならん。》

《いつになったら故郷に帰れる日が来るのだろうか。》

(1)の⑤の例文

胡為「乎」遠「遑」ニ「欲」ニ「何」クニ「之」カント。

(陶淵明・歸去來辭)

《農耕の適当な時期を誤らなければ、穀物の収穫は十分に食べ尽くせないほどである。》

不^レレ^ハ違^ハ、二農時^一、穀不^レ可^レ勝^レ食^ニ。 (孟子)

《農時を違へずんば、穀食ふに勝ふべからず。》

《農耕の適当な時期を誤らなければ、穀物の収穫は十分に食べ尽くせないほどである。》

[6] 疑問・反語

1 疑問と反語の見分け方

反語

乃公馬上^ニ得^ニ天下^ヲ。安^クン事^ニ詩書^ヲ。

(十八史略)

《乃公馬上に天下を得たり。安くんぞ詩書を事とせん。》

《おれは馬上で(いくさで戦つて)天下を手にいれた。どうして詩経や書経などの学問を必要としよう。学問では天下は取れない。》

疑問

子夏見^ル曾子^ヲ。曾子曰^ク、「何^ノ肥^也也。」对^{ヘテ}

曰^ク、「戦^ビ勝^{テリ}、故^ニ肥^也也。曾子曰^ク、「何^ノ謂^也也。」

(韓非子)

《子夏曾子を見る。曾子曰く、「何ぞ肥えたるや。」と。对へて曰く、「戦ひ勝てり、故に肥えたり。」と。曾子曰く、「何の謂ひぞや。」と。》

《子夏が曾子に会った。曾子が尋ねて言うには、「どうしてそんなに太ったのですか。」と。答えて言うには、「心の戦いに勝ったから太ったのです。」と。曾子が言うには、「戦いに勝つて太ったとはどういう意味ですか。」と。》

反語の文末は「ン(ヤ)」で結ぶ

帝力何^ノ有^ニ於我^ニ哉。 (十八史略)

《帝力何ぞ我に有らんや。》

《天子の力がどうして私に及んでいようか、及んでいないのだ。》

例外

必^ズ不^レ得^レ已^ム而去^{ラバ}、於^テ斯^ノ三者^ニ、何^ヲ先^ニセシム。

(論語)

《必ず已むを得ずして去らば、斯の三者に於て、何をか先にせん。》
《どうしてもやむを得ず、取り除くとしたら、この三者の中で、どれを第一に取り除きますか。》

2 疑問・反語の終助詞

乎・哉・也・耶・与・邪・歟・夫

(か。や。)

「…であろうか、いやそうではない。」

有^リ下^一言^ニ而^可キ以^テ終身行^フ一^レ之^ヲ者上^乎。(論語)

《一言にして以て終身之行ふべき者有りや。》

《ただ一言で一生活つていくべき教えはあるだろうか。》

君子^モ亦有^ル窮^ス乎。(論語)

《君子も亦窮すること有るか。》

《君子も(小人と同様に)困窮することがあるのか。》

《今仮に二匹の虎が闘つたならば、このなりゆきとして二匹とも
そうって生きてはいないだろう。》(どちらかが死ぬ。)

(2)の③

不_レ尽_クハ……セ。

(尽くは……せず。)

〔全部は……しない。〕

尽_ク不_レ……セ。

(尽く……せず。)

〔すべて……しない。〕

不_レ可_ニカラ 尽_クハ 信_メ。 (日本外史)

〈尽くは信すべからず。〉

《全部が全部は信用することはできない。》

(3)の①

不_レ必_スシモ……セ。

(必ずしも……せず。)

〔必ずしも……するとは限らない。〕〔必ず(きつと)……しない。〕

必_ス不_レ……セ。

(必ず……せず。)

有_ル 徳者、必_ス有_リ 言。有_ル 言者、不_レ必_スシモ 有_ラ 徳。

(論語)

〈徳有る者は、必ず言有り。言有る者は、必ずしも徳有らず。〉

《徳のある人には必ず善言がある。しかし善言を言う人が必ずしも
徳のある人とはいえない。》

(3)の②

不_レ甚_クシクハ……セ。

(甚だしくは……せず。)

〔はなはだしくは……しない。〕

甚_ク不_レ……セ。

(甚だ……しない。)

〔はなはだ……しない。〕

好_レ 読_ム 書_ヲ、不_レ求_メ 甚_クシクハ 解_センコトヲ。

(陶淵明・五柳先生伝)

〈書を読むを好めども、甚だしくは解せんことを求めず。〉

《書物を読むことを好むが、分からないところを無理に理解しよう
とはしない。》

4 その他の否定の形二例

無_クレ Aト 無_クレ Bト

(Aと無くBと無く)

〔AとBとの区別なく、AとBとに関わりなく〕

是_レ 故_ニ 無_クレ 貴_ク、無_クレ 賤_ク、無_クレ 長_ク、無_クレ 少_ク、道_ノ所_ニ 存_スル、

師_ノ所_ニ 存_スル也。(韓愈・師説)

〈是の故に貴と無く賤と無く、長と無く、少と無く、道の存する
所は、師の存する所なり。〉

《こういうわけで、身分が貴かろうが賤しかろうが区別なく、年長
であるが年少であるが関係なく、道を修め身につけている人で
あれば、その人は自分の師とすべき人である。》

不_レ可_ニ カラ 勝_テ……ス。

(勝つて……すべからず。)

不_レ可_レ 勝_ラ 二……スルニ。

〔……しきれないほど多い。〕

不_レ可_レ 違_ハ 二農時_ヲ、一 穀_不可_レ 一 勝_テ 食_フ。

(孟子)

〈農時を違へずんば、穀勝つて食ふべからず。〉

(2)の③

無^シニAト^テ不^レル^ルBセ。 (AとしてBせざるは無し。)

「どんなAでもBしないものはない。」

無^シニAト^テ無^レキ^キB。 (AとしてB無きは無し。)

「どんなAでもBがないことはない。」

無^ッニ草ト^{シテ}不^レル^ルハセ、無^シニ木ト^{シテ}不^レル^ルハ萎^エ。 (詩經)

「草として死せざるは無く、木として萎えざるは無し。」

《どのような草木でも葉の枯れ、枝のしおれないものはない。》

父子君臣夫婦、無^シニ国ト^{シテ}無^キハ一^レ之^レ。 (頼山陽・日本政記)

「父子君臣夫婦は、国として之れ無きは無し。」

《父子、君臣、夫婦の関係というものは、どんな国にもそれがないことはない。》

3 部分否定と全否定

部分否定と全否定に関わる副詞はいくつかありますが、主なもの6種の副詞について説明します。例文は、実際の用例は部分否定のものを挙げ、適宜、それを全否定にするとどうなるかということを紹介します。送りがなについて、次のように分類できます。

(1) 部分否定と全否定で送りがな数が等しいもの

復^タ (部分否定と全否定の書き下し文が同じになります。)

(2) 全否定の送りがなに「ハ」を付け足すと部分否定の送りがなになるもの

常^ニハ・俱^ニハ・尽^クハ

(3) その他
必^ズハ・甚^クハ

(一)内は、部分否定の場合に付け足される送りがなです。この6種以外の副詞はたいてい(2)のタイプです。

(1) 不^レ復^タ……せず。 (復た……せず。)

「二度と……しない」

「またも(今度も)……しない。」

遂^ニ去^{リテ}不^レ復^タ与^ニ言^ハ。 (屈原・漁父辭)

《遂に去りて復た与に言はず。》

《かくてその場を立ち去って、二度と語りあうことはなかった。》

(2)の①

不^レ常^ニハ……せず。 (常には……せず。)

「いつも……するとは限らない。」

「いつも……しない。」

千里馬^ハ常^ニ有^{レドモ}、而伯樂^ハ不^レ常^ニ有^ラ。 (韓愈・雜説)

《千里の馬は常に有れども、伯樂は常には有らず。》

《一日に千里を走る名馬はいつもいるけれども、伯樂(馬のよしあしを見分ける名人)はいつもいるとは限らない。》

(2)の②

不^レ俱^ニハ……せず。 (俱には……せず。)

「一緒には……しない。」

「両方とも……しない。」

今兩虎共^ニ闘^ハ、其^ノ勢^ハ不^レ俱^ニハ生^キ。 (史記・廉頗藺相如伝)

《今兩虎共に闘はば、其の勢ひ俱には生きざらん。》

立^ニ我^ヲ悉^ス民^ヲ一、莫^シレ匪^ニ爾^ガ極^ニ一。(十八史略)

《我が悉民を立つるは、爾が極に匪ざるは莫し。》

《我々人民の暮らしを成り立たせているのは、あなたの最高の徳のおかげでないものはない。》

非^レ不^レ惡^マ寒^キ也。(韓非子)

《寒きを惡まざるに非ざるなり。》

《寒さを憎まないのではない。》

非^レ無^キ萌^ニ藥^ノ生^ス一焉。(孟子)

《萌藥の生ずること無きに非ず。》

《芽生えやひこばえの生ずることがないわけではない。》

(2)の①

不^レ可^カ不^ルニ……セ。一。

「……せざるべからず。」

不^レ能^ハ不^ルニ……セ。一。

「……しないわけにはいかない。」

不^レ得^レ不^ルニ……セ。一。

「……せざるを得ず。」

父母^ノ年^ハ不^ル可^カ不^ル知^ラ也。(論語)

《父母の年は知らざるべからざるなり。》

《父母の年は知っていないなければならぬ。》

雖^モ有^リ篤^ク厚^ク之^ノ人^一、不^レ能^ハ不^ル少^ク衰^ヘ一也。(小学)

《篤厚の人有りと雖も、少衰へざる能はず。》

《よほど人情の厚い人がいても、多少は恩愛が衰えないではいられない。》

牧童折^レ腰^キ、不^レ得^レ不^ル領^セ也。(言志盡錄)

《牧童腰を折れば、領せざるを得ず。》

《牧童でも腰をかがめておじぎをすれば、それに対して会釈をしなわけにはいかない。》

(2)の②

未^ダ嘗^テ不^ルニ……セ。一。

《未だ嘗て……せずんばあらず。》

不^レ三^ニ敢^テ不^ルニ……セ。一。

《敢へて……せずんばあらず。》

未^ダ必^ズ非^ズニ……セ。一。

《未だ必ずしも……に非ずんばあらず。》

「必ずしも……でないとはかぎらない、たぶん……であろう。」

吾^ガ未^ダ嘗^テ不^ルレ見^ル也。(論語)

《吾未だ嘗て見ゆるを得ずんばあらざるなり。》

《私はまだ一度もお目にかからなかつたことはありません。(いつもお目にかかっています。》

不^ルレ敢^テ不^ルレ告^グ也。(孟子)

《敢へて告げずんばあらざるなり。》

《(勇敢に)申し上げないわけにはいきません。》

未^ダ必^ズ非^ズニ……セ。一。

《未だ必ずしも此の人には非ずんばあらず。》

《必ずしもこの人でないとはかぎらない、たぶんこの人だろう。》

「不〇不〇」のいろいろ

返り点・送りがなをつけ、書き下し文にし、現代語訳しなさい。

不 愛 不 懼。(論語) …並列

不 愛 不 懼。

〈愛へず懼れず。〉

《心配することもなく、おそれおののくこともない。》

不 奪 不 墜。(孟子) …否定の連用

不 奪 不 墜。

〈奪はずんば墜かず。〉

《奪い取らなければ満足しない。》

不 為 不 多 矣。(孟子) …二重否定

不 為 不 多 矣。

〈多からずと為さず。〉

《多くないとは言えない。》

否定の連用

返り点・送りがなをつけ、書き下し文にし、現代語訳しなさい。

不 入 虎 穴、不 得 虎 子。(後漢書)

不 入 虎 穴、不 得 虎 子。

〈虎穴に入らずんば、虎子を得ず。〉

《危険な虎のすみかに入らなければ、貴重な虎の子を手に入れることはできない。》

人而無信不知其可也。(論語)

人ニシテ 而無レ 信 不レ 知ラニ 其可キ一也。

〈人にして信無くんば、其の可なるを知らざるなり。〉

《人間であつてもし信義を守らないならば、その人についてよい点は認められない。》

非 礼 勿 視。(論語)

非 礼 勿 視。

〈礼に非ざれば視ること勿かれ。〉

《礼にはずれたことはしないようにすることだ。》

2 二重否定

無レ 不 二 ……セ。 (…せざる(は)無し。)

無レ 非 二 ……ニ。 (…に非ざる(は)無し。)

非 不 二 ……セ。 (…せざるに非ず。)

非 無 二 ……キ。 (…無きに非ず。)

孩提之童も、無レ 不レ 知ラニ 愛一 其親一 也。(孟子)

〈孩提の童も、其の親を愛するを知らざる無し。〉

《はじめて笑うことを知り、だきかかえられる年頃の幼児でも、その親を愛することを知らないものはない。》

[4] 受身

(1) 見^ルレA^セ。 A^{セラル}。 (Aせらる。)

「見」以外に「被」「為」「所」も用いる。

(2) 為^ルニBノ所ト一^レA^{スル}。 (BのAする所と為る。)

「BにAされる。」

(3) A^ニセラル^ル於B^ニ。 (BにAせらる。)

「BにAされる。」

「於」の代わりに「于」や「乎」を用いることもある。

(1) の例文

厚^キ者^ハ為^レ戮^セ、薄^キ者^ハ見^レ疑^ハ。 (韓非子)

〈厚き者は戮せられ、薄き者は疑はる。〉

《ひどい場合は殺され、軽い場合でも疑われる。》

誹^{スル}謗^{スル}者^ハ族^{セラル}、偶^{スル}語^{スル}者^ハ棄^{セラル}市^{セラル}。 (史記)

〈誹謗する者は族せられ、偶語する者は棄市せらる。〉

《政治をそしめる者は、一族皆殺しにされ、二人で話し合うものは死刑にされて市場でさらしものにされる。》

(2) の例文

先^シズレバ即^チ制^シレ人^ヲ、後^ルレバ則^チ為^ルニ人ノ所ト一^レ制^{スル}。 (史記)

〈先ずれば即ち人を制し、後るれば則ち人の制する所と為る。〉

《人より先に手を下せば、相手を制することができるが、人に後れてやると、人に支配される。》

(3) の例文

勞^{スル}心^ヲ者^ハ治^メ人^ヲ、勞^{スル}力^ヲ者^ハ治^メ於^ニ人^ニ。 (孟子)

〈心を勞する者は人を治め、力を勞する者は人に治めらる。〉

《心を使う者は人を治め、力を使うものは人に治められる。》

[5] 否定

1 否定を表す字

不・弗 (ず)

「……しない」

行為・状態の否定。用言が下に来る。

非・匪 (あらず)

「……でない」

事実・内容の否定。体言あるいは体言に準ずる語が下に来る。

無・莫・勿・毋 (なし)

「……がない」

存在の否定。体言あるいは体言に準ずる語が下に来る。

春^ニ眠^レ不^レ覺^エレ曉^ヲ。 (孟浩然・春曉)

〈春眠曉を覺えず〉

《春の眠りは心地よいのでいつ夜が明けたのかわからない。》

無^ニ是非^ノ心^一非^レ人^ニ也。 (孟子)

〈是非の心無きは人に非ざるなり。〉

《是非の心が無いのは人ではない。》

〔蓋ぞ各爾の志を言はざる。〕

《どうしてそれぞれお前たちの抱負を話さないのか、話すが良い。》

(8) 猶・由 なるホ……とシ ちようど……と同じだ 連体形十が、名詞十の

過^{キタルハ} 猶^ホ 不^レルガ 及^バ。(論語)

《過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし。》

《ほどよさを越えたものはほどよさに達しないのと同じである。》

[3] 使役

(1) A^{セシム}。

(Aせしむ。)

〔Aさせる。〕

(2) 使^ムニ B^{ラシテ} A^セ。

(BをしてAせしむ。)

〔BにAさせる。〕

〔使〕以外に「遣」「令」「教」「俾」も用いる。

(3) V^{シテ} B^ニ A^{セシム}。

(BにVしてAせしむ。)

〔BにVしてAさせる。〕

〔V〕は「命」「説」「召」「遣」「教」等の動詞であることが多いが、別に決まっているわけではない。

(1)の例文

初^メ 淮陰^ノ 韓信[、] 家貧^{シテ} 釣^ニ 城下^ニ 有^リ 漂母^一、

見^テ 信^ノ 饑^{エタルヲ} 一飯^{セシム} 信^ニ。(十八史略)

〔初め淮陰の韓信、家貧しく城下に釣す。漂母有り、信の饑ゑたるを見て信に飯せしむ。〕

《最初、淮陰の韓信は、家が貧しく、城下で釣りをしていた。たまたま布を水でさらしている婦人がいて韓信のお腹をすかしていそうな様子を見て、ご飯を食べさせた。》

(2)の例文

使^ムニ 子路^ヲ 問^ハ 津^ヲ 焉。(論語)

〔子路をして津を問はしむ。〕

《子路に渡し場について尋ねさせた。》

(3)の例文

聊^カ 命^ニ 故人^ニ 一書^レ 之^ヲ。(陶淵明・飲酒序)

〔聊か故人に命じて之を書せしむ。〕

《(私は) まずは旧友に頼んでこれを書かせた。》

燕資^シ 之^ニ、以^テ 至^レ 趙^ニ。(十八史略)

〔燕之に資し、以て趙に至らしむ。〕

《燕王は彼(ここ)では蘇秦をさすに資金を与えて、趙に行かせた。》

(2)(3)二通りの訓読が可能な例

次の文を、(2)(3)二通りのタイプの訓読をして、それぞれ返り点・送りがなをつけ、書き下し文にしなさい。

太守即遣人随其往、寻向所誌。(陶淵明・桃花源記)

太守即遣^ム 下人^ヲ 随^ヒ 其^ノ 往^{クニ}、尋^ニ 中向^ノ 所^ヲ 上^レ 誌^シ。

〔太守即ち人をして其の往くに随ひ、向の誌しし所を尋ねしむ。〕

太守即遣^レ 人^ヲ 随^ヒ 其^ノ 往^{クニ}、尋^ニ 向^ノ 所^ヲ 上^レ 誌^シ。

〔太守即ち人を遣はして其の往くに随ひ、向の誌しし所を尋ねしむ。〕

[2] 再読文字

	読み	意味	接続
将・且	まさニ……(ント)す	今にも……しようとする	未然形
当	まさニ……ベシ	当然……すべきである	終止形
応	まさニ……ベシ	きつと……だろう	終止形
須	すべからク……ベシ	せひ……する必要がある	終止形
宜	よろシク……ベシ	……するのが適当だ	終止形
未	いまダ……ず	まだ……しない	未然形
盍	なんゾ……ザル	どうして……しないのか	未然形
猶・由	なホ……ことシ	ちようど……と同じ	連体形十が、名詞十の

(1) 将・且 まさニ……(ント)す 今にも……しようとする 未然形

将ニ百撃一レ之ヲ。(説苑)

《将に自らの之を撃たんとす。》

《今にも自分でこれを撃とうとする。》

人之将ニ死セシト、其ノ言也善シ。(論語)

《人の将に死せんとするや、其の言や善し。》

《人がいよいよ死のうとするとき、その(言い残す)言葉は立派である。》

引レ酒ヲ且ニ飲マント之ヲ。(戦国策)

《酒を引きて且に之を飲まんとす。》

《酒を引き寄せて今にも飲もうとする。》

(2) 当 まさニ……ベシ 当然……すべきである 終止形

士ハ当ニ先シテ天下之憂ヒニ一而憂ヘ、後ニ天下之

楽ニ一而楽シム上也。(小学)

《士は当に天下の憂ひに先じて憂へ、天下の楽しみに後れて楽しむべきなり。》

《士たるものは、天下の人々が心配するのに先じて心配し、天下の人々が楽しんでから楽しむというようではなくてはならない。》

(3) 応 まさニ……ベシ きつと……だろう 終止形

応ニ知ルニ故郷ノ事ヲ。(王維・雑詩)

《応に故郷の事を知るべし。》

《きつと故郷の事をご存じでしょう。》

(4) 須 すべからク……ベシ せひ……する必要がある 終止形

人生得レ意須レ尽レ歎ヲ。(李白・将進酒)

《人生意を得れば須らく歎を尽くすべし。》

《人生でうまくいっている時は歓楽を尽くすことが必要である。》

(5) 宜 よろシク……ベシ ……するのが適当だ 終止形

今大王亦宜ニ斎戒スルコト五日ナル。(史記)

《今大王も亦た宜しく斎戒すること五日なるべし。》

《今は、大王様も、五日間物忌みされるのがよろしいでしょう。》

(6) 未 いまダ……ず まだ……しない 未然形

未ダ知ラ生ラ、焉クシテ知ラ死ヲ。(論語)

《未だ生を知らず、焉くんぞ死を知らん。》

《まだ生というものがよく分かっていない。(それなのに) どうして死というものがわかるうか、わからない。》

(7) 盍 なんゾ……ザル どうして……しないのか 未然形

盍ニ各言ニ爾志ヲ。(論語)

《盍に各言に爾志を。》

三 それぞれの句法

[1] 返り点

1 し点



2 一二点



3 上下点



n...正の整数
m...正の整数

$$m > n + 1$$

読み仮名は、音読みは現代仮名遣い、訓読みは歴史的仮名遣いを用いてある。

基本的な練習問題

(1)~(6)の読む順に番号を付けてください。



ケアレスマスの例

次の(7)(8)の返り点の付け方はいずれも誤りです。正しい返り点を付けなさい。



返り点をつける問題

次の(11)(12)に返り点をつけなさい。



還元できるにもかかわらず、「語」と呼ばずに「句」と呼ぶために、もっと大仰なもののように思われて、漢文独自のものであるかのように誤解されること。第二は、漢文の勉強は「句法」を一通り済ませば充分なのだと思うってしまうこと。漢文で「句法」と呼ばれている、たとえば、「疑問・反語」「否定」「受け身」「使役」等々、英語や古文にも当然そういうことを表現する言葉はあるが、わざわざ取り出して「句法」などと呼ばない。他の重要な語の中にまじってその存在を主張しているに過ぎない。逆に漢文の中にもそれら「句法」と呼ばれるもの以外にも重要な単語はあるにもかかわらず、あまり顧みられることがないという困ったことになってしまっているのである。

……後略……

引用がやや長きにわたったが、「受験漢文の語句602」作成の意図は理解いただけたと思う。一九九三年二月に初版の出た本なので、もう十年以上前のことになるが、漢文をとりまく世間の事情は、その後いっそうに好転していない。

さて、しかし、そのことを嘆くのが本稿の目的ではない。実は、私は、一九八七年、奈良女子大学文学部附属中・高等学校研究紀要第二八集に、「漢文の句法」なるものを発表している。前述の(1) (6)の本のほとんどは、この「漢文の句法」をベースとして派生していったものである。

いろいろなタイプの参考書を作成して、その時にはよかれと思っ
て書いていることが、新たな発展を阻む贅肉となりかねないことに最近気づいた。とりわけ、授業の教材とするには、骨格としての素材だけの方が、その場で肉付けするには好都合である。

そこで、新たな発展を目指して、一度原点に回帰するのが本稿の目的である。説明は最小限にとどめ、良質なデータベースたらんことを願って、重要な例文を精選することに意を注いだ。

二 本稿作成の方法

内容と直接関わりはないが、本稿はパソコンでプリントアウトしたものをそのまま版下としている。返り点・送りがなを組むのがあまりに煩雑なのと、パソコンで返り点・送りがなを入力したもので、じゅうぶんにそのまま読むに耐えると判断したからである。

参考までに、私が返り点・送りがなを入力している方法を記す。使用ソフトは一太郎。

1 本文13ポイント

漢字・返り点・送りがな全て13ポイント入力。

学^レテ而時^ニ習^フレ之ヲ、不二亦説^{バシカラ}一乎。

2 返り点・送りがなの属性変更

送り仮名 7ポイント ベース位置100%

学^レテ而時^ニ習^フレ之ヲ、不二亦説^{バシカラ}一乎。

返り点 10ポイント ベース位置マイナス50%

3 フォント・飾りコピー

返り点・送りがなを全て属性変更する。

学^レテ而時^ニ習^フレ之ヲ、不二亦説^{バシカラ}一乎。

なお、本校のホームページから、私が作成した、返り点・送りがなつきの漢文がダウンロードできるようになっている。高校の教科書に掲載されているものはかなりの部分カバーできている。

谷本文男

一 本稿作成の経緯

私はこれまで、様々なタイプの漢文の参考書を作成してきた。主なものを列挙する。

- (1) 大学入試ミニマム演習 標準 漢文
- (2) 基礎力GET漢文
- (3) 漢文のルール
- (4) 本番で勝つ漢文句法の超合格講座
- (5) シグマ漢文の探求 (共著)
- (6) 受験漢文の語句 602

(1)と(2)はB5版のうすもの。両方とも見開き2ページを一つの単位として、三十回で、句法の学習や演習を一通り終えるもの。(1)は絶版。

(3)と(4)は編集上の制約はあまりなく、自由に記述した。(3)は、訓読の基礎・漢文の構造・句法に加えて、語彙編のあるのが最大の特徴である。漢文の語彙を習得するのに適当なものは、ありそうでなかなか無いのが現実である。(4)は、あまり上質でない紙を使っている、本の厚みの割には重くないのが特徴。語り口調で、体裁は「実況中継」「実況放送」に似ている。というよりも、両者に触発されて(本音を言えば、両シリーズの漢文の本を読んであまり感心できなかった)ので、書いたものである。後に運良く出版の運びとはなつたが、執筆当初は、本になる当てもなく書き始めたものである。

それだけに本人の思い入れはかなり深い。
(5)は総合参考書。漢文の基礎を導入として、大部な例文研究が中心となつて、句法の説明もついている。上質な紙を使用していて、

分厚くずしりと重い。私は導入と句法の部分を担当した。一昔前の参考書はこういうタイプが多かった。

(6)も残念ながら絶版になつてしまつている。(3)の語彙編について「漢文の語彙を習得する適当なものはなかなか無い」と書いたが、この本はまさに漢文単語集である。「はじめに」と題して書いたはしがきの一部を再録する。

本書は長年私が作りたいたいと念願していたものである。個人的な思い出も含めて少し無駄話を聞いてください。高校生のときに英和辞典を引いて英語を勉強し、古語辞典を引いて古文を勉強し、そして漢文を勉強するときに漢和辞典を引いてみて、はたと当惑したことを思い出す。あまり役に立たないのだ。さらに受験勉強をするようになり、巷間評判の高い英単語集などを購入して覚え、古文単語集は本屋でみるだけ、漢文単語集はどこを捜してもなかった。大学に入り、古文の購読などはときどき高校時代の参考書(よくできた受験参考書は結構大学でも役に立つものなのです)を引っ張り出して参考にしたこともあった。が、漢文を勉強するには相変わらず適当なものがない。そうこうするうちに、専門課程に進み、中国文学を専攻することとなった。仕方がないから漢和辞典を引きまくった。ある程度学習の進んだ者にとっては漢和辞典は役に立つということが次第にわかつてきた。大学卒業後自分が漢文を教える身になって、またもや自分が何年か前にぶつかった問題に、立場を変えてぶつかることとなつてしまった。つまり、生徒に推薦できる適当な参考書・単語集がないのだ。というわけで自分で作つたと言つてしまえば、話は簡単だが、事はそう簡単には運んでいない。

……中略……

さて、その句法であるが、漢文においてこのことが強調されるために、こまつたことが二つ起こつている。第一は、その中味を見るとほとんど単語、あるいはせいぜい熟語、慣用句のレベルに

研究紀要 第45集

2004(平成16)年4月1日発行
発行者 奈良女子大学
附属中等教育学校

校長 植野洋志

〒630-8305 奈良市東紀寺町1-60-1

TEL 0742(26)2571

FAX 0742(26)3660

<http://www.nara-wu.ac.jp/fuchuko/>